池波正太郎

その男（二）



文春文庫

著者紹介

池波正太郎（いけなみ・しょうたろう）

大正12（1923）年、東京に生れる。昭和30年、東京都職員を退職し、作家生活に入る。新国劇の舞台で多くの戯曲を発表し、35年、第43回直木賞を「錯乱」によって受賞。52年、第11回吉川英治文学賞を「鬼平犯科帳」その他により受賞する。63年、第36回菊池寛賞受賞。作品に「剣客商売」「その男」「真田太平記」〝必殺仕掛人〟シリーズなど多数。平成2年5月3日没。東京・浅草に池波正太郎記念文庫がある（☎03・5246・5915台東区立中央図書館）。

文春文庫

その男（二）

池波正太郎



文春文庫

その男（二）

池波正太郎

い 4 24

文春文庫

543 ＋税

9784167142247

1920193005431

ISBN978-4-16-714224-7

C0193 ¥543E

定価（本体543円＋税）

徳川幕府はいまや風前の灯、国内の騒乱は増すばかり――京に上った虎之助は、師の池本が幕府の秘密の仕事についている事を知る。そしてその薩摩との暗闘にまきこまれてゆく。しかし、師は、それを嫌い「江戸に戻れ、女と世帯を持って世の流れに関りなく生きよ」と諭すが……そんな中で、中村半次郎、伊庭八郎との交友が始まる。

い 4 24

文春文庫

文春文庫
池波正太郎の本

カバー・熊谷博人

文春文庫

その男

(二)

池波正太郎

文藝春秋

その男(二)

池波正太郎

文春文庫

文春文庫

その男
(二)

池波正太郎

文藝春秋

その男（二）／目次

その男（二）

旅籠・魚屋太平

一

越前へ出発した池本茂兵衛を送り出してから、虎之助は、津国屋二階の部屋へもどった。
表具師の家へは、津国屋から知らせを出してもらい、
「急の用事で、岐阜へ行って来ることになったので、留守をたのみます」
と、つたえさせた。
それから杉虎之助、酒をはこばせて、これをゆっくりとのみつづけながら沈思黙考の態（てい）となった。
茂兵衛と虎之助との密談の内容をきいてはいない津国屋のあるじ、長太郎だが、
「なんや、凝（じっ）とだまりこんでしもて……杉さま、気味がわるいがな」
と、女房にいった。
長太郎は、自分がねむる前に虎之助の部屋へ行き、
「まだ、おやすみではござりまへんので？」
「うむ……もう、かまわないでくれ、早く寝て下さいよ」

「へえ……」
その夜は長太郎も、なにか寝そびれてしまい、夜のしらじら明けに起き、小用に行った帰りに、そっと二階へあがって見ると、何やら虎之助の部屋で物音がしている。
「もし杉さま。あるじでござります」
「お、早いではないか」
「杉さまこそ、もう、お目ざめでござりますか……」
「うむ。ときに御亭主。たのみがあるのだがね」
「へ。なんなりと……」
「すまぬが、よく切れる剃刀を一つ、持って来てくれぬかな」
「へい、へい」
「ときに御亭主。お前さん、剃刀をつかうのが上手だったね。ひとつ、たのみが……ま、いい、とにかく剃刀をたのむ」
ひげでもあたってくれ、というのかとおもい、津国屋長太郎がしかるべき仕度をととのえ、部屋へもどって来るや、
「ひげじゃあない。ひげは剃らないでいい。そのかわり、あたまをまるめて下さいよ」
「げえっ……」
これには、長太郎がおどろいた。
いつもぬれぬれとゆいあげている虎之助の総髪を坊主にしてくれ、と、いうのである。
「そうだ、鋏も要るね」
「いったい、なんのおつもりでござりますのやろか？」

「お前さんだけにいう。これから池本先生の御用をつとめなければならないのだ」
ときいて、津国屋が緊張した。
「それでね、旅の坊主の衣裳を、どこかで買って来てくれ」
「わけもないことで」
「私は旅の僧になって、ここから出る、出るがしかし、このことは、お前さんの女房どののほかには、だれにも内密にして、そっと私を外へ出して下さいよ」
「へい、へい」
「急ぐのだ。万事、たのみましたぜ」
「まかせておいとくれやす」
間もなく津国屋の女房が、ひそかに、衣裳をととのえてきた。
そのころすでに、虎之助のあたまは青々と剃りあがっていたのである。
京都から大坂まで十二里余。
これを陸行して、虎之助は夜に入ると間もなく、大坂の町へ入っている。いつもながら足は速い。
網代笠をかぶり、僧衣をまとって、白の手甲・脚半。しかもそれがぴったりと板について見える虎之助であった。
だが、このような変装をしたのは、何しろはじめてのことだけに、虎之助自身としては、
「どうも、ぎごちなくて困りました」
と、いうことになる。
「ともかく、私も薩摩の連中には顔を見られている。これはうかつに大坂へ乗りこめないとおも

いましてね」
虎之助の語りのこしによれば、
「その魚屋太平とかいう宿屋のことを、どうも礼子がさぐっているらしい……となれば、薩摩藩にかかわり合いのあることにちがいない。そこへ行こうというのですから、こいつ、やはり顔かたちを変えて行かねばなりません。
そこで考えた。どんな姿に変ってやろうか、とね。
いろいろ、おもいついたが、どうもぴったりとこないのですね。考えあぐねたあげく、ふっとお秀のことがおもい出されたのですよ。あの、尼の姿になったお秀のことがね……そのとき、よし、こいつだ、それにこころがきまったものです。それで坊主になったわけ。あは、は、はは……」
大坂へ入って、それとなくたずねると、中ノ島の宿屋〔魚屋太平〕は、すぐにわかった。
魚屋太平は、薩摩藩の大坂屋敷からも程近い。
だが、どのようにして手をつけたらよいものか、さすがの虎之助も、だいぶんにおもいまよったのである。

二

淀川が大坂市中へ入って、大坂城の北から西へながれるところ、その大川の中にある中洲（なかす）のような土地を、
〔中ノ島〕
と、よぶ。
東西二十余町にわたる中ノ島は中洲というよりも、その名のごとく、川の中の〔島〕といえよう。大川は、この中ノ島によって二つにわかれる。
すなわち、中ノ島の北をながれるのを堂島川。南へわかれてながれるのを土佐堀とよぶ。
この二つのながれは、中ノ島がつきたところでふたたび合流し、さらに木津川と安治川にわかれるのだ。
中ノ島を中心とする一帯には、諸国大名の蔵屋敷がびっしりとたちならんでいる。
諸藩の〔蔵屋敷〕とは、諸大名の領国の物産（主として米）を回送し、これを金に換えるためにもうけられた屋敷である。
中ノ島から、堂島川、土佐堀の河岸道へ押しならぶ蔵屋敷の壮観をながめれば、当時の商業都市としての大坂が、どのような重味をもっていたか、たちどころにわかろうというものだ。
薩摩藩の蔵屋敷（大坂藩邸）は、土佐堀一丁目にあった。
河岸道をへだてて土佐堀。
土佐堀へかかる越中橋をわたると、中ノ島になる。
越中橋から常安橋へ出て、まっすぐに通っている道をどこまでもすすむと、今度は堂島川へかかる玉江橋のたもとに出る。
その玉江橋の河岸道に面した大垣藩の蔵屋敷の西がわが町家になってい、角地に〔魚屋太平〕があった。
ここは旅籠（はたご）でもあるし、舟をもっていて泊り客を京都へはこんだりもするという、小さな宿屋ではあるが、こうした便利な店が、このあたりにはたくさんにある。

旅僧姿の杉虎之助は、魚屋太平の近くの〔うどん屋〕へ入って酒を一本のみ、熱いうどんで腹をこしらえた。

うどんをすすりこみつつ、

(よし!!)

虎之助の肚(はら)はきまった。

「どうも、疲れてしまって……」

虎之助がうどん屋の老爺に、

「泊るところは、ありませぬか?」

「へい、へい。すぐ近くに魚屋という旅籠がございます」

「それはよい。ひとつ、口をきいてはくれませぬか」

「よろしゅうござりますとも」

こういうときには、下手な変装をするよりも、旅僧になるのが、もっともよい。

現代(いま)はさておき、そのころの坊さまは、世の人びとに敬意をもって見られ、迎えられていたからである。

魚屋へ出かけて、うどん屋の亭主が口をきいてくれた。

さいわいに、部屋がとれたという。

虎之助は、

(先ず、よかった……明日になったら、腹をこわしたとでもいい、三日ほど魚屋へ泊りこんでみよう)

と、考えていた。

部屋は、河岸道に面していた。

四畳半の小さな部屋だ。

「江戸は下谷・金杉の安楽寺(あんらくじ)の僧・英誉(えいよ)」

と、虎之助は宿帳へ書いた。

これは、金杉のわが家のとなりにある安楽寺と、日ごろ親しくしている僧の名をそのままにつかったのである。

留守中は、安楽寺の僧・英誉が、虎之助の江戸の家に泊ってくれているはずであった。

すでに、五ツ半(午後九時)ごろである。

女中に足をすすがせながら、虎之助が、

「お腹(なか)はじゅうぶんでござります。まことに申しわけないが、すこし、お酒を冷たいままでけっこうゆえ、もってきて下され」

そっとささやき、す早く、銭をにぎらせたものである。

当時の僧は、女と酒が禁物(きんもつ)であったからだ。

女中は、にやりとしてうなずいた。

部屋へ案内をして、女中がすぐに寝床をとってくれる。

網代笠をとると、あたまが寒かった。

「お風呂は、どうなされます?」

「風邪ひいていますゆえ……」

「あい。では、すぐにお酒を……」

「たのみます」

襦袢（じゅばん）ひとつになり、寝床へもぐりこむと、さすがに疲れが五体に浮いて出た。
（ま、ともかく明日からだ。それにしても……酒がおそいな）
おもいながら、いつの間にか、虎之助はねむりはじめた。
おもえば、昨夜もその前の夜（蒔絵師・原孫七が襲撃された夜）も、ろくにねむっていない。
と……。
だれかの手が、虎之助の躰をゆりうごかしている。
はっと、目ざめた。
行灯（あんどん）のあかりが、暗くなっている。
「だれだ？」
飛び起きた虎之助に、女のにおいがせまってきて、
「礼子」
と、ささやいてきた。
「あっ……」
これには、虎之助もおどろいた。
まさに、礼子。
「叱（し）っ……」
礼子が虎之助の口へゆびをあてて、
「わたくし、いま、ここの女中をしているのです」
と、いった。

三

まさに、旅籠の女中そのものの礼子なのである。
「あの折は、ほんとうに、ありがとうございました」
と、礼子から、御油（ごゆ）の宿場の始末をきいたのも、このときであった。
虎之助も、京都へ来てからのことを語った。
「もっと……もっと、低い声で……」
礼子が、身をすり寄せ、虎之助の躰へぴったりとついて、虎之助のことばをきくときには耳をさし向け、自分が語るときは、男の耳へくちびるがふれんばかりにして、低く低く、ささやいてくるのだ。
杉虎之助ともあろうものが、全身の血が熱くなってくるのを、どうしようもなかったそうな。
礼子は、別の女中が虎之助の足を洗っているとき、土間の奥から、これを見ていたのである。
「それにしても、おどろきました」
くすりと笑った。
「なにが？」
「虎之助さまのおつむりが……」
「あ、これか……」
「よう似合います」
「からかってもらっては困る。これでも一所懸命なのだ」

虎之助の口が耳へさしよせられるたびに、いちいちうなずきながらも、礼子の乳房が着物の下で大きく波うっている。

「となり座敷に、近江から来た商人夫婦がねむっています」

「わかった」

「池本先生は越前へ、とか……？」

「さよう」

「困りました」

このところ、礼子と池本茂兵衛との間に、よく連絡がついていなかったらしい。

「どうしたらよろしいのか……」

「私にできることなら、なんでもする」

「ちょっと、お待ち下さいませ」

礼子が腰を浮かせ、

「一分、下さいませ」

「いいとも」

「一分で、わたくしを抱いたことにしておいて下さいませ」

「え……？」

「ここでは、女中がそうなのです」

「ま、まさか、礼子どのは……？」

「これが、はじめてですよ、虎之助さま」

笑いをふくんでいい、礼子が廊下へ出て行った。

虎之助、いささか昂奮せざるを得ないではないか……。

行灯のあかりを消し、礼子がもどるのを待った。

その時間が、ひどく長かった。

廊下へ足音がし、礼子がもどって来た。

「虎之助さま……」

「ここだ」

「失礼いたします」

するりと、礼子が寝床へ入って来て、

「これで、夜が明けるまで、ゆるりと語り合えます」

「む……」

一つ寝床の中で身を寄せ合ったのだけれども、たがいの腕は凝とうごかぬ。

「はずかしいことですが……それまでの私は、相手にした女が、みな、それこそ百歩楼の歌山のような女ばかりだったので……礼子は、いわばしろうと。それもさむらいのむすめで国事にはたらいているという……どうにも、手が出せませんでね。抱きしめてやりたいのはやまやまなのだが、女郎とおなじにあつかうわけにも行きませんし……かと申して、ぴったりとこう、私に身をすりよせてきているのですから、たまったものではないので。いやはや、あのときほど、困ったことはありませんでしたよ」

のちに、虎之助は当夜を回想して、

「ですが、事は重大というやつで……その夜も、薩摩のさむらいが三人も魚屋へ泊っていたのです。この連中は、池本先生からもきいていたいわゆる精忠組なので」

〔精忠組〕とは……。

　亡き井伊大老が〔勤王運動〕を弾圧したとき、薩摩藩士百余名をもって結成されたものだ。

　この中心になった人物が、かの西郷吉之助（のちの隆盛）である。

　精忠組は、薩摩の前藩主・島津斉彬に忠誠を誓うと共に、斉彬を押したて、勤王革命へまっしぐらに突進しようとした。

　ところが斉彬が急死してしまい、幕府の弾圧もきびしくなり、西郷吉之助も薩摩藩の手によって、奄美大島へ流され、押しこめられてしまった。

　その精忠組の残党が、いま、この魚屋太平方へ三人も泊っている。

「近いうちに、大変なことが起りそうなのです」

　と、礼子が、ささやきともあえぎともつかぬ声でいった。

寺田屋騒ぎ

一

　薩摩の〔大殿さま〕島津久光が、千数百の武装藩兵をひきいて、京都へのぼる日が近いというのは、やはり、ほんとうらしい。

　島津久光は、先代の藩主であり自分の兄（腹ちがいの）でもある島津斉彬の〔こころざし〕をつぎ、勤王運動の、先がけとなって、はたらくつもりに変りはないのだが、

「幕府のちからが、まだまだ、おとろえきったわけではない。いまここで急激に事を起し、幕府に押えつけられてしまっては元も子もなくなる」

　それが持論であり、信念である。

　幕府にしても、薩摩藩を利用し、長州藩の恐るべき勤王運動を、

「押えてしまおう」

　というのが、ねらいらしい。

　それだけに、薩摩藩のうごきには、幕府もひどく神経をつかい、微細な情報ひとつにさえ、

「ききもらしてはならぬ」

と、池本茂兵衛たち薩摩掛りの隠密へ、厳命を下しているという。

「けれど、人が足りないのです」

礼子が、ためいきをついて、

「薩摩はおそろしい」

一つ寝床の虎之助へ、はじめて、身をすり寄せるようにした。

薩摩藩には、

〔庭方役〕

といって、これも隠密活動にはたらく役目があり、その探索ぶりも実に巧妙なものだし、幕府隠密をひそかにほうむるための、いわゆる〔機動班〕は、すぐれた猟犬のような嗅覚と有無をいわせぬ実行力をそなえているらしい。

その片りんは、虎之助も何度か経験をしているものであった。

「礼子どの……」

「はい」

「これまでに、死ぬか生きるかの境目を、何度くぐられた？」

「かぞえきれぬほど……」

いいさして、礼子がひたと虎之助の胸へ顔をうめ、

「おもうだに、ぞっといたします」

ささやいてきた。

「その、とたんに……」

と、虎之助がのちになって語るには、

「何かこう、熱いかたまりのようなものが、私の胸の底から急につきあがってきましてね。そのときの礼子が、なんともいえず健気でもあり、愛らしくもあり、あわれでもあり……こちらも、ついその何です、ぐっと礼子を抱きしめてしまったもので……」

それからのことを書きのべるにも、およぶまい。

夜が明けかかるころ、礼子は虎之助の腕からぬけ出て、廊下を去って行ったのだが、

「その前に、私は、池本先生から申しつけられたことを、礼子につたえたのです。江戸へもどり、私と、いっしょに暮すということをね。

なんと、礼子は承知をいたしました。

そこが、女なのですねえ。はじめて男に肌身をゆるしたとき、礼子の生きかたというものが、われ知らず微妙に変ってきていたので……」

虎之助の腕からはなれるとき、礼子は、こういったそうだ。

「わたくし、虎さまの子が生みたい……」

礼子ほどの女の台詞にしては、

「その月なみに、実は私もびっくりしたものです」

と、いうことになる。

しかし、池本茂兵衛のたのみもあって、今度の薩摩・精忠組の蠢動については、二人ちからを合せ、

「やれるだけのことはやろう」

と、誓い合った。

次の日も、虎之助は〔魚屋太平〕方へ泊った。予定のごとく、風邪をひいたと魚屋へは告げて

おき、礼子が、わざわざ薬を買いに出たりしたものだ。

夜がふけると、礼子が部屋へ来た。

もう、こうなると風邪どころではない。

二人とも、堰を切ったように、もとめ合った。これまでの礼子・虎之助の胸底には、たがいの想いが、いつの間にか重く烈しく、燃えこもっていたのであろうか……。

次の夜も、である。

だが、無我夢中でいたのみではない。

二人は、じっくりと今後の連絡の仕方やら、礼子からうけた情報を虎之助がどこへ持ちはこんで行くか……そうしたことについて、こまごまと打ち合せをしたのであった。

礼子は、つい五日ほど前から池本茂兵衛配下の隠密・山田慎三郎と連絡がついたのだそうな。

山田は、以前から大坂に潜入していた男で、これが、淀屋橋に近い尊光寺の塀外で、なんと甘酒やに化けている。

前後担いの荷台を道端へおろし、天狗の面の絵を描いた行灯にあかりを入れ、夕闇が濃くなると尊光寺外へあらわれるが、そこを根城にし、

「甘酒ぇ、飴湯ぅ」

呼び声をあげて、町をまわりもするのだ。

礼子の引き合せによって、甘酒やの山田慎三郎を知った杉虎之助は、これも托鉢僧の姿で町をまわる。

虎之助が、魚屋方のまわりを歩いているとき（主に日中である）礼子からの情報をうけとるのである。

朝と夕方に、一定の時刻をきめておき、礼子は通りが見える場所（たとえば物干など）に出ていて、虎之助を見かけると、何気なく魚屋をぬけ出し、す早く、小さくたたんだ密書を虎之助へわたす。すれちがいざまに、または、布施をわたすかたちを見せて……。

二

いつの間にか、一月がすぎた。

礼子と山田慎三郎との間をつなぐ役目を黙々として果している杉虎之助にも、事態が容易でないことが、はっきりとわかりはじめた。

いまや、旅籠・魚屋太平方には、二十名に近い勤王志士が泊りこんでいるとか。

しかも、薩摩のさむらいばかりではないらしいのだ。

また京都には、諸国からあつまった志士や浪士たちが、

「いよいよ、薩摩が兵をひきいて上洛する」

「島津公を押したて、薩摩藩の実力にものをいわせ、このさい、いっきょに徳川幕府を打ち倒してしまわなくてはならぬ!!」

いろめきたっている。

まるで、

「薩摩が公儀と戦さをしに京へのぼってくる」

かのように、おもわれさえするほどであった。

幕府も、緊張せざるを得なかったろう。

「どちらにしろ、ひとさわぎ起りましょうよ」
と、甘酒やに化けた山田慎三郎が、或夜、虎之助にいった。
山田は、紺の筒袖の裾を端折り、股引（ももひき）に素足でわら草履（ぞうり）をはき、ぴたり、甘酒やが板についている。
荷台の上の七輪（かんてき）に赤銅（しゃくどう）の釜をかけ、瀬戸焼の大ぶりな茶わんへ甘酒を入れたのを虎之助へわたし、山田が、
「ちょいと、おつなものですぜ」
「この甘酒も、あんたがつくられるので？」
「そりゃ、もう……」
「おどろいたな」
「私は十八のころから、それ、礼子さんの父ご内山房五郎さんに仕こまれましてね。甘酒もやれば船頭にも、木樵（きこり）にもなりもすよ」
と、語尾を薩摩なまりでいったものだ。
見たところ三十五、六の山田は、江戸にいる妻子とは、
「もう、六年も会っていませんがね」
と、事もなげにいったが、
「ですがねえ、杉さん。おなじ将軍（だんな）の家来でも、私どものような御役目についている者の女房子は、おもえば可哀想なもので……」
「なるほど」
山田慎三郎のはなしによると……。

長州藩からも、
「勤王の先がけを薩摩に横どりされては、われわれの名折れになる!!」
と叫ぶ革新派のものたちが、しきりに京都へ潜入しつつあるらしい。
こうした倒幕運動のたかまりをねらい、京坂にあつまった志士たちを蔭でうごかしている黒幕は、
「田中河内介という人物ですよ」
と、山田が教えてくれた。
「この男はね。杉さん。なんでも但馬（たじま）の医者の出だそうだが、のちに京へやって来て、だいぶんに学問をやったらしい。そして、公家（くげ）の中山忠能（ただよし）の家来で田中近江介（おうみのすけ）というものの養子になったのですよ。ま、こやつなぞは、いちばん烈しいので……いのちなぞは少しも惜しくない。いつ死んでもよい。なにがなんでも幕府を打ち倒し、日本を天子さまへお返し申そうという……もう五十に近いやつですが、実に恐ろしい男だ」
田中河内介は、幼年時代の明治天皇の養育係をつとめたこともある。河内介がつかえていた中山家が明治帝の生母の実家であったからだ。
さらに、山田慎三郎は、おどろくべきことを語り出した。
「杉さんだから、申してもよいとおもうが……」
「田中河内介なぞが考えていることはですよ、よろしいか。先ず、島津久光が京へのぼって来るのを待ち、江戸の同志が、御老中の安藤対馬守（つしまのかみ）様をはじめ、公儀の要職に在（あ）る方々を暗殺しようという……。
つぎに、こちらはこちらで、幕府（こうぎ）と仲のよい公家（くげ）の九条関白（かんぱく）を殺し、所司代（しょしだい）その他に火をはな

ち、邪魔なものは片端から殺してしまう。そうしておいて、島津をたきつけ、薩摩の兵に長州勢をも加え、天子さまのおことばをいただき、江戸へ攻めのぼろうというのだ」
「そ、そんなことが……」
　虎之助は、のみかけていた甘酒にむせた。
「そんなことが、うまく行くとおもっているのですかね」
「うまく行ってたまるものか……第一、杉さん。かんじんの天子さまは……」
　孝明天皇は、
「国内における騒乱は好まぬ」
と、いっておられる。
「天子さまは、御妹君を将軍(だんな)へ下しおかれたのですぜ。こいつはもう、朝廷と幕府が親類づき合いになったことだ」
　あながち、山田の身びいきともいえない。
　孝明天皇は、幕府が政局を安定させるために必死の努力をしていることを、
「よく、御承知ですからね」
　自信たっぷりに、山田慎三郎はいったものである。

三

　四月に入ると、いよいよ大坂の薩摩屋敷がさわがしくなった。
　魚屋太平方にたてこもる志士や浪士たちは四十名にもなり、江戸の薩摩屋敷につとめている藩

士も数名、許可を得ずに大坂へ駈けつけ、
「われわれは、魚太組(うおたぐみ)ごわす!!」
なぞと、気勢をあげているそうな。
　この連中は、礼子にいわせると、
「明日にも天下をとる気でいる」
のだそうで、だから旅籠の中でも大声を張りあげて議論をたたかわし、
「将軍を討て!!」
「幕府を倒せ!!」
と、わめき叫ぶ。
　礼子にとっては、もっけのさいわいというもので、彼らの動静をさぐり出すのがまことに容易となった。
　礼子からの情報は虎之助を経て、山田慎三郎へ……。
　山田は、それをすぐさま、どこかへ走って行って報告するらしいのだが、そこまでは虎之助も立ち入らなかった。
　ともかく、魚屋方にいる連中のうごきは、こうして一から十まで幕府の耳へつつぬけになっていたのである。
　そのうちに……。
　この情報を、幕府がどのようにつかい、役立てていたかは、虎之助の知るところではなかった。
　大坂の薩摩屋敷でも、
「魚太組を、そのままにしておくことはできぬ」

と、さわぎはじめた。

島津久光は藩兵をひきいて、すぐに鹿児島城下を発し、下関を経て、京へ向いつつある。

久光からも、

「わしの命にそむき、血気にはやってさわぎたてる家来どもを取りしずめよ」

と、きびしい命令が大坂や京都の藩邸にとどいているのだ。

そこで……。

大坂屋敷の重役で、久光の信頼があつい堀次郎という人物が、魚屋へあらわれ、

「どうじゃ。一同を藩邸へかくもうてやろうではないか」

もちかけてみると、魚太組は、藩が自分たちの味方をしてくれるものとおもいこみ、

「まことにごわすか？」

「まことじゃ」

「そりゃ、久光公のおことばでござりもすか？」

「いかにも」

一同、勇躍をした。

島津久光も、ついに勤王革命の先鋒をつとめる気になってくれたか、これはうれしい、ありがたい、というので〔魚太組〕は、

「いよいよ、幕府を相手に大戦さじゃ」

「腕が鳴りもす」

「血がさわぎもすよ」

いやもう大へんなよろこび方で、魚屋にいなかった同志たちまで狩りあつめ、総員四十余名の

勤王志士が、土佐堀の薩摩藩邸へ入り、邸内の二十八番長屋へ収容された。

「これは、どういうことですかな？」

虎之助が問うと、山田は、

「さてね……」

「島津公の行列は、いつごろ、こちらへ着くのです？」

「間もなくでしょうね」

「そちらのほうへは、さぐりを入れなくともよいのですか？」

すると、山田がくっくっと笑い、

「杉さんも、どうやら、この道がおもしろくなってきたようですねえ」

「この道……？」

「他人の秘密を嗅ぎ出すことが、ですよ」

「ふうむ……」

「私どもも、いのちがけで御役目にはたらいているわけだが……その御役目がむずかしくなればなるほど、ついつい、慾目をはなれて夢中になってしまうのでね。そこがまあ、隠密稼業のだいご味というものか、どうか……」

礼子も、おそらく、その暗い情熱のとりことなってしまったのであろう。

「御心配にはおよびませんよ、杉さん。薩摩の行列の中にも、こっちのものが二人やそこらはまじっています」

「ほんとうですか？」

「ええ。こっちも、これで百年もの間、薩摩を見張りつづけているのですからねえ」

そういった山田慎三郎の顔から笑いが消えて、
「だが、その百年の間に、江戸の隠密が何人、薩摩ざむらいの手にかかったことか……」
しみじみと、つぶやいたのである。

四

島津久光は、藩兵をひきい、京都の藩邸へ入った。
久光は、近衛忠房、中山忠能、正親町実愛、岩倉具視などの公家と相談をし、徳川幕府への建言をおこなうことにきめた。
そして、久光みずから二十三カ条にわたる、
〔政治改革案〕
をつくった。
たとえば……。
「われわれ大名は、将軍と幕府へ忠義をつくすため、これまで交代で一年おきに領国から江戸へ出て来ていたが、これを三年に一度にしてもらい、それも江戸につとめている期間を百カ日にちぢめ、妻子を国もとへ連れもどすようにあらためてもらいたい」
という一条がある。
この参観交代の制度は、幕府が諸大名を制圧するための代表的な政策であった。
大名の妻子を江戸屋敷へとどめおくというのも、体のよい、
〔人質〕

なのである。
これを、あらためてもらいたい、というのだ。
のちに、幕府は、この要求をのんでいる。
これは、とりも直さず徳川政権の威望がおとろえたことを、はっきりと天下に知らしめたことになった。
島津久光にしてみれば、それだけの自信もあり、抱負もあったからこそ、
「いまここで、みだりにさわぎたててはならぬ」
しかも、自分の家来たちが不穏のうごきを見せているというのは、
「わしのこころも知らず、まことにもって、けしからぬことである」
と、いうわけであった。
だから、大坂藩邸の二十八番長屋へ収容した志士たちについても、
「ぬかりなく見張っておれ。決して外へ出してはならぬ」
命令を下してある。
そうした気配が、二十八番長屋にいる志士たちにもひしひしと感じられてきた。
「こりゃ、どうもおかしい……」
「久光公は、亡き先君（斉彬）とちがい、まったく、たよりにならぬ」
「やはり、幕府の腰にへばりついて行くつもりなのじゃ」
こうなると志士たちも、うかつなことはできぬ。
長屋の中で、ひそかなる密議が何度もおこなわれた。
その結果……。

四月二十三日の夜までに、一同は少しずつ藩邸をぬけ出し、伏見の旅宿・寺田屋へ集合することにきまった。

寺田屋で勢ぞろいをし、京都へ潜入して、かねて計画したように幕府の高官を殺し、役所に火をはなち、幕府と仲のよい九条関白を暗殺、あわよくば天皇おわす京都御所まで乗っ取ってしまおうというのだ。

このクーデターをもって、幕府打倒の発火点にしようというのが彼らの目的であった。

そして、二十一日の夜から二十二日、二十三日にかけて、二十八番長屋から一人、二人と脱出しはじめたのである。

藩邸でも、彼らを監視してはいるが、さりとて罪人あつかいにするわけにもゆかぬ。

そのようなことをしたら、勇猛血気の志士たちが何を仕出かすか知れたものではない。

まるで、爆薬を抱えているようなものなのだ。

それに……。

大坂藩邸内にも〔精忠組〕に同情するものがいて、ひそかに脱出する志士たちの便宜をはかってやったらしい。

二十二日の朝。

魚屋太平方の前の河岸道をゆっくりと歩いて行く杉虎之助を見つけ、礼子が追いかけて来た。

托鉢僧に化けた虎之助が、広島藩と鳥取藩・両蔵屋敷の間の道をまがったとき、うしろから来た礼子が、虎之助を追いこしざま、

「あの連中が、舟で、伏見の寺田屋へ逃げました。見張りを……」

す早くささやき、小走りに去った。

虎之助は、これをすぐさま山田慎三郎へ知らせた。

「いよいよ、はじまりますね、杉さん」

「四十人で何ができるのですかね？」

「いや、あばれまわって火をつければいいのだ。その火のつけぐあいひとつで、京の町中が大さわぎになる。これは大事(おおごと)ですぜ」

「どうします、山田さん」

「私はすぐに知らせて来る。あなたは、もう少し、こっちにいて礼子さんの連絡(つなぎ)をして下さい」

山田は、くわしく以後のことを虎之助と打ち合せた。

そしてすぐ、野田に借りている小さな家から出て行った。野田は現・大阪駅の西にあたる。

二十二日の夜から二十三日の早朝にかけて、薩摩藩邸に軟禁されていた志士四十余名のほとんどが脱出に成功し、淀川を舟で下り、伏見へ向った。

魚屋にいた礼子が、いち早く、このことを知ったのは、先に脱出した志士たちが魚屋へ、

「伏見へ下る舟の仕度を、早くたのむ」

と、駈けこんで来たからだ。

志士たちのすべてが脱出したものだから、さすがに藩邸でも気づいた。

「一大事じゃ」

というので、すぐさま京都藩邸にいる〔大殿さま〕の島津久光のもとへ騎馬の急使が駈けつけて来た。

「おろかものめが！」

久光は激怒した。

「これまで気づかなんだとは、何たることじゃ。すぐさま、彼らの居どころをつきとめよ」

五

田中河内介をふくむ諸方の志士十余名と、薩摩・精忠組三十余名は、二十三日の夕暮れまでに伏見の寺田屋へあつまった。

同じころ。

京都の薩摩藩邸へも、彼らが寺田屋にいるという知らせが入っている。

これは、薩摩藩がさぐり出すよりも先に、京都の所司代から、

「御藩の士らしき数十名が、伏見の寺田屋へあつまり、ただならぬ様子である。責任(せめ)はすべて、御藩にあることゆえ、善処されたい」

との通告が来たのだ。

これすなわち、礼子や虎之助、山田のはたらきによるものといえよう。

「おのれ、なんということじゃ」

島津久光は、自藩の内紛を幕府にさぐりとられてしまったので、その怒りは層倍のものとなった。

「寺田屋へおもむき、みなのものを引っ捕えよ。手にあまらば斬れ!!」

この命をうけた京都藩邸では、

「多勢で出て行っては、かえって向うも気が昂ぶり、騒ぎが大きくなろう」

と考え、腕ききの藩士たちを選抜し、これを寺田屋へさし向けることにした。

奈良原喜八郎・江夏仲左衛門・森岡善助など八名がそれである。

この中に、折しも藩邸に居合せた「ひげ男」の大山格之助も加わっていた。

すでに夜となっている。

そのころになって、ようやく大坂の藩邸から、

「一同が、寺田屋に……」

知らせて来た。

寺田屋は、伏見における薩摩藩の定宿ゆえ、ようやくにさぐり当てたものであろう。

久光は怒りがおさまらず、大坂からの使者を、

「追い返せ!!」

と、いった。

九名の鎮撫使(ちんぶし)が錦小路の薩摩藩邸を出て、伏見へ向った。

正式には八名だが、別に一人、参加している。

これは薩摩藩士の中でも、もっとも身分の低い鉄砲足軽で、名を中村半次郎という。身分の上下がやかましい薩摩藩であるから、正式の鎮撫使にはなれぬが、いざとなったとき、中村半次郎の剣の冴えが、

「役にたとうから……」

というので、参加させられたのである。

京都藩邸から伏見の寺田屋まで約二里。

伏見の町の南端、宇治川のながれが堀川へみちびかれて町へながれこむところ、蓬萊橋(ほうらいばし)の船着場のすぐ前に、寺田屋がある。

伏見は、京と大坂の間をむすぶ交通の要地であり、ことに船便の便利は世に知れわたっている。宿屋も多く、中書島(ちゅうしょじま)の廓(くるわ)も京坂に名高い。

大坂へ向う最後の夜船が出ると、伏見の町はひっそりと寝しずまってしまう。

ことに近年は世の中が物騒なので、町の人びとは夜船の最終便が出るや、先をあらそって戸をおろすのであった。

薩摩の鎮撫使たちが、蓬萊橋をわたりきったとき、山田慎三郎と杉虎之助は、橋の北詰の橋板の下へ身をかくし、寺田屋を見張っていた。

六

橋をわたりきって、八名の鎮撫使が、

「おはん、このあたりで見張りをしちょれ」

と、足軽の中村半次郎に命じた。

身分の軽い半次郎なぞ、見張りが相応だといわぬばかりなのである。

「見張りごわすか……」

半次郎が不満そうにいう。

「ばかもん」

吐きすてるように江夏仲左衛門が、

「なんちゅ顔するのじゃ。これまでついて来ただけでも名誉のことじゃ」

「は……」

「よう、見張っちょれ」

一同は、すでに戸をおろした寺田屋へ向う。

ひげ男の大山格之助が一足おくれて、中村半次郎へ、にこにこと笑いかけ、

「斬り合いの物音がきこえたら、飛びこんで来いよ」

「まことにごわすか？」

「おはんの腕前な、俺(おい)はよう知っちょる」

「大山さァ……」

「待っちょれ、な……」

橋板の下から、虎之助は二人を見ていた。

大山格之助の顔に、もうひげはついていなかった。

こうして、よく見ると、大山は小肥りの体格で、非常に愛嬌のある口のききかたをする。美江寺のときも御油のときも斬り合いの最中(さなか)であったためか、大山は、もっと背丈の高い痩せた男に見えたものだ。だが、大山格之助であることに間ちがいはない。

ここへ、新たに京都から駈けつけて来た上床源助を加え、九名の鎮撫使が寺田屋の戸を開けさせて中へ入って行った。

「くそ!!」

中村半次郎が、あたりいちめんにつばを吐き散らしつつ、

「芋ざむらいじゃちゅて、ばかにするな」

くやしげにいうのを、虎之助も山田も、はっきりときいた。

あとで山田からきいたところによると、薩摩藩の身分の低いものは、芋ばかり食べているとい

うので、
「芋ざむらい」
とよばれ、藩士たちから軽蔑されているのだそうな。
その芋侍の中村半次郎の顔はよく見えぬが、これはいかにも背丈の高い骨格たくましい若者で、
（この男は、大山よりもできる）
虎之助は、そう感じた。
いかにも俊敏（しゅんびん）そうな体軀に長い大刀が、軽々と腰に寄りそっている。
のちのち、この中村半次郎と深い因縁がむすばれようとは、このときの杉虎之助、おもってもみなかったのである。
深夜である。
（まるで夏のような……）
むし暑い夜の闇が、あたりにたれこめてい、どこかで火の番の拍子木（ひょうしぎ）がきこえている。
このとき、荷を積んだ牛車が蓬萊橋を南からわたって来た。
半次郎が橋のたもとで、これを凝（じっ）と見つめている。
牛車は、きしみの音をたてて橋をわたり、寺田屋の前をすぎて西へ去った。
寺田屋の内から、すさまじい物音が起ったのは、実にこのときであった。
中村半次郎が、
「あっ!!」
と叫び、寺田屋の戸を押し開け、中へ駈けこんで行った。
「杉さん……」

「はじまりましたね、山田さん」
二人は橋の下から道へ飛び出した。
物凄い気合声と、刃と刃が嚙み合う音が、はっきりときこえた。
そればかりではない。
まるで大地震でも起ったような響音が寺田屋の中からきこえた。
これは、
「久光公の御命令である。暴挙をやめて、京の屋敷へ帰ってくれ」
説きふせようとする鎮撫使に反抗する志士たちが、ついに刀をぬきはらって闘いはじめたものである。
だが、斬り合いはすぐに終った。
鎮撫使も、さすがにえらびぬかれた藩士たちである。
同藩の志士八名を斬って、残る連中を、ようやくに説得したのだ。
鎮撫使のほうでも、道島五郎兵衛が斬死をした。
田中河内介父子をもふくめた志士たちが、鎮撫使と共に寺田屋から出て来たときには、道の其処此処に、
「なにが起ったのや?」
「斬り合いか……?」
町の人びとがあらわれ、遠巻きに見物していた。
虎之助はいう。
「鎮撫使たちは斬り合いのあとで、よほどにうまくいいくるめたのでしょうね。三十余名の志士

たちは、そのまま、おとなしく京の薩摩屋敷へ入って行きましたのです。
　はい、私も山田さんと共にあとをつけて、始終を見とどけました。
　このとき、寺田屋にあつまっていた志士の中には、西郷隆盛の実弟・慎吾も入っていましたし、のちに陸軍元帥となった大山巌（いわお）もいたのですよ。ええもう、ひげ男の大山格之助も得意の剣をふるって大分にはたらいたようで……」
　実に、悲惨な決闘であった。
　同じ藩の、友人同士が斬り合い、殺し合い、傷つけ合ったのである。
「薩摩藩は、なんというまねをしたのだ。これでは、とてもたのみにならぬ」
と、諸国の勤王の志士たちは愛想をつかしてしまい、以後は長州藩の実力をたのんで幕府を倒そうという形勢になって行くのである。
　それはさておき……。
　寺田屋騒動がすんで間もなく、杉虎之助は礼子と共に、京都を発し、江戸へ向った。
　二人は、いまや名実ともに、
〔完全な夫婦〕
となっていたのである。
　江戸へもどり、山口金五郎叔父のところへ、礼子をともなってあらわれた坊主あたまの虎之助が、
「女房です」
と、引き合せるや、金五郎が眼をむいておどろき、
「虎よ。お前は化けものかえ」
と、いったものだ。

声

一

　江戸の金杉の家で、虎之助と礼子の新しい生活がはじまった。
　虎之助がまる一年を留守にしている間に、江戸の空気は見ちがえるほどの険（けわ）しさに変っていた。
　今年の正月十五日というから、杉虎之助が京都の表具師の家で、池本茂兵衛からの連絡を待ちかねていたころだが……。
　幕府の老中・安藤対馬守（つしまのかみ）が、江戸城・坂下門外において、またも水戸浪士をふくむ六人の志士に襲撃されたものである。
　このとき、安藤の駕籠は、きびしく警固されていた。
　六人の志士は、安藤老中に軽傷を負わせたけれども、すべて、その場に斬り伏せられている。
　前の井伊大老襲撃の二の舞いを演ずることなくてすんだわけだが、しかし、この事件のため、安藤対馬守は老中を免職となった。
　つまり、幕府の安藤政権は、二年そこそこで消滅したことになる。
　そこへ……。

寺田屋騒動後の島津久光が、勅使の大原重徳と共に江戸へあらわれ、勅使をたすけて、幕府へ二十数カ条の政治改革案をつきつけ、実行をせまるという始末で、

「いやはや、とんでもねえことになった。もういけねえ、もうだめだよ。虎之助」

と、山口金五郎はあたまをかかえて、

「これではもう、徳川の天下がつづくはずがねえ」

おもいきったことを、ずばりといってのけたのには、虎之助もおどろいた。

その金五郎叔父の直感のするどさは、微禄の御家人として、ろくな御役目につかず、生涯を人生の裏道にすごしぬいた山口金五郎の、

「なあに、人の世は、いつも変るものじゃあねえ。本所あたりにごろごろしている無頼どもの浮き沈みを見ていたって、天下の御政道をあやつる人間どもの姿がわかろうというものさ」

という考え方から出ている。

「叔父上。そりゃ、いささからんぼうではございませんか」

「なあに、かまわねえ。そりゃな、御政道がしっかりしているときには、上は御老中から下は諸役人まで、おのずからしゃんとしているものよ。ところがだ、ものごとがいったんくずれ出したときの人間というものは、上も下もねえのだ。うわさによれば虎よ。勅使が江戸城内で御老中と会見の折に、なんとおどろくじゃあねえか。いつの間に入って来たか知れぬ何人もの薩摩ざむらいどもが刀をひきつけ、次の間に入って来て、老中をにらみつけていたというよ」

「まことなので？」

「見たわけではねえがね……」

ゆるしもなく城内の奥ふかく潜入していた薩摩藩士が、勅使をまもるかたちとなり、いずれも

大剣を所持していたというのはおどろくべきことだ。

勅使・大原重徳は、二人の老中に対し、

「この上のいいのがれは、もうききとうない。朝廷の命をうけぬとあれば、お二人とも最後のお覚悟をなされよ」

と、きめつけ、老中（脇坂安宅・板倉勝静）ふたりは、ぶるぶると、ふるえ通しであったとか……。

ま、そうしたわけで、いまの世の中の激しい移り変りにおどろいていたらきりもないのだが、虎之助はひたすら、礼子との明け暮れにひたりこんでしまっていたのである。

礼子も池本茂兵衛のいいつけをまもり、一歩も外へ出なかったし、虎之助も坊主あたまの毛が生えそろうまでは、

「みっともないからね」

家を出たくなかった。

ともかく、新婚なのである。

たまさかに山口金五郎夫婦や、浅草・駒形の鰻や〔中村〕の房吉夫婦がたずねてくるほどのもので、文字どおりの水入らずであった。

おかしなことには、金五郎叔父のむすめ・千代が、礼子をつれて江戸へ帰って来た虎之助の眼を避けるようになったことだ。

金五郎にいわせると、

「かわいいや、お千代は虎めに惚れていたのさ」

なのだそうだ。

お千代も十六歳になっている。

当時のむすめとして、結婚をしたところで、別にあやしむべき年齢ではないし、いとこ同士が夫婦になることも現代とちがって、あまりふしぎにもおもわれなかった。

だからといって、虎之助にはおもいもよらぬことである。

金五郎は妻のお浜へ、

「お千代はそっとしておいてやれ。そしてな、このことはかまえて、虎之助にもらしてはいけないよ」

と、釘をさした。

まだ少女のおもかげが濃いお千代にひきかえ、礼子は虎之助と同年の二十二歳であるから、そのころの女としては、晩婚といえよう。

この年齢(とし)になって、はじめて男を知った礼子は、遅咲きの花がもつ豊潤(ほうじゅん)さを、見る見るうちにその肌身へみなぎらせはじめた。

二

江戸へ来てからの礼子は、細くひきしまって浅ぐろかったえりあしのあたりがなめらかに肉づき、肌の色が白くなり、たとえようもないほどに凝脂(ぎょうし)の照りがなやましく、

(これが、礼子か……)

夜の寝間で、虎之助は日に日に変貌する妻の生きものに瞠目(どうもく)するおもいであった。

これまで、客をとる女の肌身しか知らなかっただけに、ひとりの女と日夜はなれず暮すことのおどろきを、虎之助は、はじめて体験をしたことになる。

(女とは、こうしたものなのか……)

おどろきと感動と歓喜に、さすがの虎之助もわれを忘れる態(てい)たらくとなったようだ。

それに……。

幼少のころに実母が亡くなり、とげとげしい、暗い家庭の暮しの中で育ち、長じてのち、池本茂兵衛の温情にはぐくまれたとはいえ、女のこころのやさしさ美しさを「わが家」において味わうことのなかった虎之助であったから、

(これが家の暮しというものなのだな……)

送り迎える日々が、鮮烈きわまるものだったといえよう。

目ざめると、まくらもとに礼子がすわり、微笑している。

日課の水浴びを終えると、礼子の手が背をふき清めてくれる。

そして、自分が一指もうごかさぬのに、台所から朝餉(あさげ)のにおいがただよってくるのである。おもえば、ふしぎきわまることであった。

夏が、すぎようとしていた。

「こうなるとはおもわなかったな、二人とも……」

「はい。わたくしも……」

「おい」

「はい?」

「うれしいよ、おい」

「わたくしも……」

われながら甘いとおもうことばが、われ知らず口にのぼってしまう。口に出してから、
（おれとしたことが……）
顔を赤らめ、自分で自分に舌うちをしてみる。
そうした中で、二人が話題にのぼせるのは、池本茂兵衛のことのみであった。
或日の残暑の烈しさを境にして、翌朝から、突然に空が高く澄みわたった。
秋が来たのだ。
その日の夕暮れになって……。
〔中村〕のあるじ・房吉が金杉へやって来た。
池本茂兵衛が二人によこした手紙と金五十両をたずさえて、であった。
江戸へついてすぐに、虎之助は礼子との暮しがはじまったことを、京都へ書き送った。
といっても、あれからの茂兵衛の居どころはわからぬ。だから三条・白川の旅籠〔津国屋〕気付で手紙を出したのだ。
その手紙が、ようやく茂兵衛の眼にふれたものとみえる。
茂兵衛の手紙と金を〔中村〕へとどけたのは、
「この前のときの、商人ふうの、中年のお人でございましたよ」
と、房吉が告げた。
礼子は、房吉から使いの人の顔かたちをくわしくききとっていたが、あとで房吉が帰ってから、
「そのお方は、井関忠右衛門といい、池本のおじさまとよく御いっしょに御役目にはたらいておられる方にちがいありませぬ」
といった。

茂兵衛が、わざと井関を金杉の家へさし向けなかったのは、礼子に以前の、〔隠密暮し〕に、想いを向けさせぬ配慮がふくまれているのであろう。
例によって、池本茂兵衛の手紙は簡潔をきわめていた。

江戸御安着のよし、何よりのことと、よろこびおりそろ。
大坂にてのおはたらき、かたじけなく存じそろ。
これよりは、われらがことを御放念。二人ちからを合せ、難局の世をわたられたし。

茂

虎之助殿
礼子どの

二人とも、くり返しくり返し、むさぼるように、この短い手紙を読んだ。
「先生は、よろこんで下されている」
「はい」
「私たちが、こうして暮していることを、まことによろこんでおられるのか……？」
「きまっておりましょう」
「またも、このような大金をお送り下された……」
「おじさまはいつも、いまの世に虎之助の出る幕はない、と、おっしゃってでございましたけれど……」

「私の出る幕はない、とね？」
「はい」
「ふうむ……」
どうも、わからない。
どちらにせよ、家と家族にめぐまれなかった二人の、においたつばかりに初々しい生活が、やがて落ちついて行き、そのまま長い歳月を送り迎えすることであろうことを、このときの虎之助はうたぐってもみなかったのである。

三

秋になると……。
将軍と幕府に対し、じゅうぶんに薩摩藩の威力を見せつけた島津久光が、江戸を去った。
さて、その意気揚々たる行列が神奈川宿の手前の生麦村へさしかかったとき、異変が起った。
乗馬のイギリス人（婦人一名をふくむ）が、久光の行列を横切ろうとしたのである。
「無礼者、さがれ」
先ばらいの藩士が、どなりつけた。
だが言葉も風俗習慣も全くちがう異国人には、なんのことかさっぱりわからず、まごまごしているのを見て、久光の駕籠につきそっていた奈良原喜八郎が、
「無礼千万!!」
駈けよりざま、抜き打ちに先頭のイギリス人を斬った。

残る三名は悲鳴を発し、馬に鞭をくれ、必死に逃げ、神奈川のアメリカ領事館へ駈けこんだという。
落馬したイギリス商人・リチャードソンは、奈良原にとどめを刺されて死んだ。
奈良原は、寺田屋のときの鎮撫使の一人だった男である。
この事件が、いわゆる〔生麦事件〕とよばれるものだ。
島津久光は奈良原をとがめもせず、平然として行列の出発を命じた。
むろん、イギリス側は激怒し、幕府と薩摩藩に対して莫大な償金と慰謝料を要求してきたが、
薩摩藩では、
「ほうりすてておけ」
どこまでも知らぬ顔であった。
うろたえるのは、国政を担当する徳川幕府のみなのである。
そして、この事件は翌年の七月になり、イギリス艦隊の鹿児島城下・砲撃へみちびかれることになる。
それはさておき……。
杉虎之助夫婦は、文久三年の正月を迎えた。二人そろって二十三歳になった。
正月五日の朝。
伊庭八郎が、久しぶりで虎之助の家へあらわれた。
これまでに八郎は、二度ほど礼子にも会っている。
新年のあいさつがすむや、
「虎さん、あたまの毛も、だいぶん尋常になったねえ」

と、八郎が、
「いったい、京くんだりまで出かけて、なんのために坊主になったものか……」
これには、虎之助もこたえられない。
「虎さん、私も、この三月には、いよいよ京へ行くことになりそうだ」
将軍・家茂(いえもち)が上洛して、天皇と朝廷にあいさつをおこなう、その行列に、八郎は父・伊庭軍平と共に〔奥詰(おくづめ)〕の一員として加わることになったのである。
「いっしょに行かぬか……と、さそいをかけたいところだが、虎さんのそばに、このような……」
と、八郎が礼子を見やって、
「美しいお人が寄りそっていたのではねえ」
にやりとした。
「ま……」
礼子が、ぱっと座を立ち、まっ赤になって台所のほうへ駈けこんだ。
かつての礼子になかった挙動ではある。
「それでね、明日から私も少々いそがしくなる。いまのうちに二人きりで別盃(べっぱい)を、とおもってね」
「鳥八十(とりやそ)かね、八郎さん」
「いかにも」
「よろこんで、よばれましょうよ」
「では……」

伊庭八郎は、すぐに帰って行った。
八郎からきいたところによると、京都の情勢は、まことに険悪なものだという。
口には出さぬが、将軍直属の衛士(えいし)として、八郎も死を決しているらしい。
「伊庭さまに、御酒(ごしゅ)をとおもっていましたのですけれど……」
「いいさ、今夜は二人して、したたかにのむ。いうまでもないが、戸じまりはきびしくしておけよ」
「はい」
「湯をわかしてくれないか」
「はい」
「いっしょに入ろう」
「いや……」
「背中をながしてやろう」
「いや、いや……」
「なにが、いやだ。いまさら……」
「ま、痛い……」
「なにが痛い。いまさら……」
二人して、たわむれはじめたとき、門の方で人の足音がした。
「だれかな……？」
縁へ出た虎之助が玄関のほうを見るや、
「礼子、奥へ入っていろ」

押しころした声でいった。

「あなた……」

「早く……」

と、虎之助が部屋へもどって来て、大刀をつかみ、

「早く……早く、行け」

「どうなさいました？」

「薩摩ざむらいらしい」

「えっ……」

「大丈夫だ。早く行きなさい」

「は、はい」

礼子が奥の間へ走りこんだ。

「出るなよ」

声をかけておいてから、虎之助は大刀の鯉口を切った。

「ごめん。ごめん下はれ」

玄関口で、男の声がきこえた。

これは、あきらかに薩摩なまりの、若い男の声であった。

(来たな……それにしても、どうして、ここをかぎつけたものか……江戸へもどって以来、礼子もおれも、ほとんど外へ出てはいなかったのに……)

もしも、二人を斬りに来たのなら、敵は二人や三人ではあるまい。

それにしても、

(昼日中に打ちこんで来ようとは、おもえないが……)

おもいきって、虎之助は部屋を出て玄関口へ向った。

「ごめん。ごめん下はれ。たのンもす」

声が大きくなった。

その声は、虎之助はききおぼえがない。

のびのびとして、いかにも快活な男の声であった。

中村半次郎

一

「どなた?」
と、虎之助は大刀を右手に軽くもち直し、玄関へ出て行った。
見おぼえが、まったくない客にもおもえた。
背丈が、がっしりと高いばかりでなく、幅のひろい、肉の厚い、いかにも武術にきたえぬかれたかのような体軀のもちぬしだ。
その、すばらしい体軀が、粗末な木綿縞の衣服からはじけて出そうに見えた。
若わかしい精悍な顔だちだが、
「突然に参上しもして、ごぶれいを……」
虎之助へ笑いかける眼つきが優しげで、ほころびた口もとからまっ白な歯がのぞいた。
よれよれの袴、腰の大小にしても、あまりぱっとせぬこしらえなのだが、そのような外形を忘れさせてしまうほどに、この若いさむらいの挙動は溌剌としている。
「杉虎之助どんな、こちらでごわすか?」

「私が、杉です」
こたえたとたんに、虎之助は、
(あのときの男だ……)
はっと、おもい出した。
去年の四月二十三日。
伏見、寺田屋における騒動のとき、鎮撫使一行が屋内へ入ったのち、蓬莱橋のたもとで見張りをしていた若い薩摩ざむらいではないか。
深夜だったとはいえ、常夜灯のあかりで虎之助は、この男の横顔をはっきりと見ていた。
(む……そういえば、声にもおぼえがある)
虎之助が右手の大刀を左手へもちかえようとしたとき、
「おいどんな、京の法秀……いやその、お秀さァから、たのまれて来たのでごわす」
なんと、これまた意外なことをいい出したではないか。
「お秀どの……?」
「はァい……」
と、こたえる口調が、まるで幼児のごとく人なつかしげで、しかも愛嬌にあふれている。
「しばらく、お待ちを……」
虎之助は奥へ入り、礼子に、
「安楽寺へ行っていなさい」
「薩摩ことばのように、きこえましたけれど……?」
「案ずるな。さ、行きなさい」

礼子が裏庭づたいに安楽寺へ走るのを見とどけてから、玄関へもどり、
「お待たせしました。ま、おあがり下さい」
「かまいませんか？」
薩摩ざむらいは、虎之助の居間へ入るや、
「こりゃ、申しおくれもした。おいどんな、薩摩藩の中村半次郎と申す」
なんのこだわりもなく、いった。
半次郎は、腰からはずした大刀を右脇へ置いた。
これは、虎之助に害意をもたぬことをあらわしている。
虎之助が茶をいれてやると、すぐ手にとって、うまそうにのんだ半次郎へ、
「お秀さんから、何やらたのまれなすった……？」
「はァい」
「それは、また……？」
「金な、あずかってきもした」
「金……」
「お前さァに借りた金じゃいうことでごわした。ちげもすか？」
「いや、ちがいませんが……」
「これでごわす」
中村半次郎が、ふところから紙につつんだ金十両をさし出し、
「あらためて下はれ」

今度は、お秀からの手紙を出してよこした。
「そいから、これを……」
まさに小判が十枚。
「では……」

その後は御無音(むいん)にうちすぎ、まことに申しわけもこれなく、なにとぞなにとぞ御ゆるし下されますよう。ようやくに京へも腰が落ちつき、小松谷に一庵(いちあん)をかまえ、あたまをまるめ、暮しおりまする。
とは申せ、御存知のごとき女、とてもとても読経三昧(どきょうざんまい)にはすごしがたく、このたび、江戸へ下る人へことづけ、こころにかかりおりましたる金子御返済いたしますが、この使者、中村半次郎は、いまのわたくしの情夫(いろおとこ)にございます。なにとぞ、お笑い下されますよう。時勢いよいよおもうにはかりがたく、くれぐれもお気をつけあそばしますよう、朝夕にいのりおりまする。いずれ、お目もじの折もあらばと、こころときめきつつ……。

秀

杉虎之助様

お秀の手紙は、およそこうしたものであったが、自分の情夫にもたせた手紙の中で、
「いずれ、お目もじの折もあらばと、こころときめきつつ……」
とあるのには、さすがの虎之助も度肝をぬかれたものだ。

二

中村半次郎は、公用で、京都の薩摩藩邸から江戸藩邸へやって来たものらしい。
一昨日の夕刻に、江戸に着いたばかりなのだが、
「明日は、京へもどらねばなりもはん」
という。
「それは、いそがしいことですな」
「杉どんな、お秀さァとは、どげな関係（かかわりあい）がござす？」
「お秀さんから、ききませんでしたか？」
「ききもした。悪いやつどもにかこまれて困っちょったときに、助けてもろた、と……」
「それだけのことですよ」
「ふうむ……」
中村半次郎が、にやりと虎之助をながめまわし、
「そいだけのこととは、思（おめ）もはんが……」
「なぜね？」
「こげな杉どんを、お秀さァがほうっておくわけなごわはん」
虎之助は、急に笑いがこみあげてきた。
（この男とおれが、お秀に……）
とおもうと、

嫉妬がわくどころか、池本先生や礼子の〔敵〕の一人であることも忘れそうになる。
それほど半次郎の無邪気な快活さに、虎之助はひきこまれていたといえよう。
「ときに、中村さん」
「はァい」
「私よりも、あなたはどうなのですね？」
「え……？」
「お秀さんとは、どうして知り合われた？」
すると半次郎が、
両手であたまをかきむしるようにして、はにかみはじめた。
まるで童児のごとく、天真爛漫（てんしんらんまん）に、はにかんで見せるのである。
またしても虎之助は、微笑をさそわれずにはいられなかった。
「いってごらんなさい。いや、ぜひとも、きかせていただこう」
虎之助は台所へ行き、角樽（つのだる）の酒をもってきて、
「さ、のみましょう」
冷のまま茶わんにつぎ、
「きらいですかね？」
「いや、大好き」
「では、おやんなさい」
「いただきもそ……や、こりゃ、よい酒じゃ。お前（まん）さァな、いつも、こげなよい酒をのんでいなさるか？」

「もらいものですよ」
「お前さァな、御浪人で？」
「父は旗本でしたがね」
「ふむ、さようか」
半次郎は気にもしない様子だ。
「私は勘当をされてしまい、家は弟がついでいますよ」
「勘当うくるような人には見えもはんが……？」
「それよりも中村さん、お秀さんとのなれそめは……？」
「こりゃ、どうも……」
あたまをかきかき、中村半次郎が語りはじめた。
去年の六月ごろ、というから、寺田屋の騒ぎもしずまってのちのことだが……。
半次郎は或日。錦小路の藩邸から程近い六角堂・境内にある茶店で、名物の〔へそ石餅〕を食べていて、折しも参詣に来たらしい町むすめが一人、垢くさい浪人ふうの男三人にかこまれ、乱暴されかかるのを見た。
「何すっか!!」
飛び出して行き、斬り合いとなったが、半次郎は三人の刀を叩き落し、たちまちに追いはらってしまったそうな。
むすめは、左足をくじいていた。
捨ててもおけず、半次郎がむすめを背負い、医者へ駈けつけようとしたとき、このさわぎを見ていた尼が、

「この近くに、わたくしの知り合いの医家がある。案内しましょう」
といい、つきそって来てくれた。
この尼が、お秀の〔法秀〕であった。
「そいからな、法秀さァがおいどんのことを、よか男じゃ、あそびに来なはれ……こういうてくれもして、それからその、出かけもしてな。酒のんで……いやその……尼さァが茶わんに酒ついで、ぐいぐいのみほす。おどろきもしたよ」
「なるほど……」
「そいからな……」
「それから？」
「どうも、たがいに、よかこころもちになりもして……」
「それはそうでしょう」
「そいから、雨戸な閉めもしてな……」
「なるほど……」
「そいから……その、な……」
と、際限もない。
虎之助は、すっかりききかされてしまったものだ。
ところで……。
中村半次郎は、天保九年十二月の生まれというから、虎之助より三歳の年長である。
半次郎は、鹿児島城下を背後から抱きすくめたかたちになっている吉野原高原の、吉野村・実方の郷士の子に生まれた。

兄の与左衛門が若死をしてしまったので、半次郎が跡つぎとなったわけだが、
「そのころの貧乏暮しは、筆や口にはつくせもはん」
と、半次郎が虎之助にいった。
吉野原の郷士たちは、
〔芋ざむらい〕
とか、
〔紙漉きざむらい〕
とかよばれ、藩士たちの軽蔑と冷笑を買っている。薩摩藩では特に、身分の上下がやかましいのだそうである。
「いまに見ちょれ!!」
これが半次郎の口ぐせであった。
いまに、きっと身を立てて、
「城下ざむらいどもを見返しちゃる」
と、いうのである。
文字を読み書きするのは大きらいな彼も、剣術にかけては天才的な素質をそなえており、鹿児島城下に住む剣客・伊集院鴨居に示現流の手ほどきをうけた。
「芋ざむらいが、剣をまなんでどうするのじゃ」
なぞと冷笑していた藩士たちが、半年もするうちに、半次郎の猛烈きわまる木刀に叩きのめされることになった。
半次郎は、いのちがけで剣をまなんでいるのだから、薩摩独得の剣法といわれる決死の〔示現流〕が、層倍に彼の上達を早めることになった。

「そのころはもう、いつもいつも、城下ざむらいどもと喧嘩な、しちょりもしたよ」
と、半次郎は虎之助に語った。
半次郎の父・与右衛門は、五石どりの藩の小吏として、江戸屋敷へつめているうちに、公務上の金を、わずかに三両ほど、そっとだまって借りうけていたのが上役に見つかってしまい、徳之島（薩南諸島）へ流罪にされ、そこで病死してしまったそうな。
「その金を、内密で借りたのも、おいどんの妹、貞子の病気な癒すためでごわした」
亡父のはなしになると、中村半次郎は、虎之助の前でぼろぼろと泣く。
うれしいにつけ悲しいにつけ、この男は激した感情をまったくかくそうとしないのである。
半次郎が語りつづけているうちに、安楽寺の僧・英誉が庭へあらわれた。
これは、礼子からたのまれて様子を見に来たものだが、虎之助と半次郎がなごやかに語り合っているのを見るや、さりげなく一礼し、去って行った。
そうしたことがあっただけに、半次郎の、
「いまに見ちょれ!!」
には、痛切な悲願がこめられていたのである。
もともと、薩摩藩の郷士は、平時において農民と共にはたらき、いざとなれば武器をとって戦列に加わるという使命をもたされていた。
なればこそ……。
去年の春に、島津久光が武装の藩兵をひきいて京へのぼるにあたり、中村半次郎も鉄砲足軽に選抜され、行列に加わり、生まれてはじめて、京の地をふんだのであろう。

やがて……。
中村半次郎は虎之助の家を去った。
「法秀さァに、何かことづけでもごわはんか？」
という半次郎に、
「よろしく、と、つたえて下さい」
「それだけで、ようごわすか？」
「よろしいとも」
「まことにごぶれいごわすが、杉どんな、おいくつでごわす？」
「二十三歳」
「へえっ……」
と、半次郎が瞠目し、
「おいどんな、三十にも見えもしたど」
と、いったものだ。
玄関を出て行くとき、半次郎は虎之助をかえり見て、
「いやもう、法秀さァな、大変な女でごわす」
「ほう……どこがね？」
「尻が、背中に、張りついちょりもす」
おもわず、虎之助はふき出した。
お秀のみごとな肉体を、もののみごとに表現していることばであったからだ。
中村半次郎が帰ってから、虎之助は礼子をよびに行った。

こうなれば仕方がない。
お秀の危急をたすけ、金十両をあたえて京都へ向わしめたことを礼子に語ったけれども、お秀を抱いたこと（いや抱かれたといったほうが適切であったかも知れぬ）はかくしておいた。
お秀からの手紙も、かくした。
「まあ……」
と、礼子がまじまじと虎之助をながめ、
「ほんに、それだけのことでしょうかしら？」
「それだけのことさ」
「あやしいこと」
「ばかな……」
「でも、ゆるしてさしあげます」
「ゆるしてもらうおぼえはないぜ」
「ようございます。なにごとも、わたくしと、このようになる以前のことなのですから……」
これには虎之助、一言もなかった。
夕餉のときに、
「中村半次郎の剣術をみとめ、久光公上洛の行列に加わらせたのは、西郷吉之助だそうな。半次郎は大へんに、西郷という人の恩をいいたてていたぞ」
虎之助がいうと、礼子は、
「その西郷吉之助という人物、おそろしい男なのですよ」
と、いった。

西郷吉之助

一

礼子から語りきかせてもらうまで、杉虎之助も、

〔西郷吉之助〕

という人物については、

「かいもく、知ってはおりませぬでした」

だったのである。

いささか、薩摩藩の西郷吉之助についてのべておきたい。

吉之助は、後年の陸軍大将・西郷隆盛のことだ。

中村半次郎と虎之助の交渉の、これからのちの展開をおもうにつけ、虎之助と西郷の関係も、とおりいっぺんのものではなくなるはずだ。

のちのち、虎之助は西郷吉之助の睾丸の世話までやくことになるのだから……。

西郷吉之助が生まれたのは文政十年十二月七日で、現代より約百四十年前に、薩摩七十七万石、島津家の鹿児島城下・加治屋町に誕生した。

吉之助の父・西郷吉兵衛は〔勘定方小頭〕という役目についていて、いうまでもなく下級藩士のひとりであった。

後年に、西郷吉之助が、

「夜具な、つくれぬほどの貧しい暮しで、一枚の夜具をきょうだいども（七人）が引っ張り合うて寝たものごわす」

しみじみと、のべている。

西郷吉之助の風貌については、いろいろと異論もあろうが、やはり筆者は、いまも上野公園にのこる彼の銅像がもつイメージに、西郷そのものを見るようなおもいがしている。

少年のころは、無口で鈍重であった西郷を、

「木のぼりもできぬやつ」

と、軽侮していた家中の少年たちも、まともに西郷吉之助と向い合い、彼の黒ぐろとした巨大な双眸にひたと見つめられるとき、得体の知れぬ威圧感をおぼえ、口がきけなくなってしまったそうな。

中村半次郎ほどではないにしても、西郷吉之助の家も長年の貧乏暮しで、ずいぶんと苦労をかさねたらしい。

父が隠居してのち、吉之助は〔郡方書役助〕という一小吏から〔書役〕に至る十年間を農民相手の小役人としてすごした。

そのころの薩摩の〔殿さま〕は島津斉興といった。

斉興は、正夫人との間に、長男・斉彬と次男・斉敏をもうけ、側妾・お由良の方に、三男の久光を生ませている。

お由良は、江戸の三田・四国町に住む大工のむすめだといわれるが、この若く美しい〔お妾〕に、島津斉興は夢中となってしまった。

そうなると、愛するお妾の生んだ子の久光が、正夫人の生んだ長男よりも可愛ゆくて可愛ゆくてたまらなくなる。

このため、斉興が隠居して、つぎの〔殿さま〕を決めるときになり、いわゆる〔お由良くずれ〕とよぶ〔御家騒動〕が薩摩藩に起ったのである。

いうまでもなく……。

つぎの薩摩の殿さまは、正夫人の腹から生まれた長男の斉彬であって当然なのだが、そこはそれ、

「お妾可愛さに……」

島津斉興は、なにとかして妾腹の三男・久光にあとをつがせたいし、お妾のお由良も、家老の一人である島津将曹なぞを引き入れ、わが子の久光擁立の工作をすすめはじめた。

こうなると、家来たちも、二つに別れてあらそいはじめる。

西郷吉之助は、正腹・島津斉彬を、

「つぎの殿さまに……」

いただこうとする〔忠義派〕であった。

そして、血なまぐさい騒動の末に、忠義派の勝利となり、島津斉彬が藩主の座についたのであった。

新しい〔殿さま〕となった島津斉彬は、たぐいまれなる英明な人物で、この人が、あと十年生きていたら、おそらく明治維新の様相も相当に変っていたろう、とおもわれるほどだ。

斉彬は、つぎつぎに新人の登用をおこなった。

のちの明治政府の中核となった西郷隆盛も大久保利通も、斉彬によって見出され、側近に奉仕することを得たのであった。

島津斉彬について、こころみに机上の辞書をひいてみようか。

江戸末期の薩摩藩主。
藩政の刷新につとめ、殖産事業をおこし、ことに洋式兵備の充実につとめ、製練所、反射炉をもうけ、そのほか、電信、ガス灯の実験など、各種事業をまとめて集成館を設立した。
また、五隻の軍艦を建造し、幕末政局の混乱と共に、将軍継嗣問題では、水戸の徳川斉昭、越前の松平慶永とむすび、幕府政治改革をくわだてたが、井伊大老の就任によって挫折し、間もなく病死。

と、ある。

二

自分を、

「わが子のように……」

可愛がってくれた島津斉彬の急死によって、西郷吉之助は悲嘆の底に、突きおとされたといってよい。

斉彬は、死にのぞみ、

「自分の死後は、妾腹の三男・久光の子の又治郎（忠義）をあとつぎにし、久光は、この後見をするように……」

と、いいのこした。

これによって、つぎの〔殿さま〕は、島津忠義になったわけだが、なにぶん年少のことなので、薩摩七十七万石の実権は、後見の父・久光が〔大殿さま〕として、つかみとったことになるのだ。

さ、ここでだ。

島津久光としては、亡き義兄の斉彬が、それこそ眼に入れても痛くないほど可愛がっていた西郷吉之助の存在が、

「どうも、おもしろくない」

のである。

西郷は西郷で、

「とても、先代さま（斉彬）とは、くらべものにならぬ」

と、久光を見ている。

これでは双方、うまくゆくはずがない。

しかも西郷吉之助は、島津斉彬の死後も勤王運動に夢中となっていたため、幕府からにらまれ、逃げて行く場所もなくなり、ついに、僧・月照（同志）と共に、薩摩へ逃げて来て、鹿児島湾へ身を投げたものだ。

ところが、勤王僧の月照は死んだけれども、西郷は助けられて生き返った。

島津久光は、

「けしからぬやつ!!」

と、怒り、西郷を捕え、これを奄美大島へ島ながしにしてしまったものである。

しかし、薩摩の若い藩士たちの間で、西郷吉之助の人気は、

「絶対的なもの」

であった。

〔大殿さま〕の島津久光も、この西郷の人望を無視することはできない。

そこで……。

久光は藩兵をひきいて上洛する前に、西郷吉之助を奄美大島から呼び返した。

そこへ、寺田屋のさわぎがおこった。

「これは、西郷も一味の中に加わっているにちがいない」

というので、久光は、またも西郷を、沖永良部島へながしてしまったのである。

久光にとっては、藩士たちにも、他の諸藩や朝廷方にも人望のある西郷吉之助が、何か、うとましかったのであろう。

西郷もまた、終生、久光をうやまおうとはしなかった。

礼子は、江戸の薩摩屋敷にいたころ、西郷吉之助を何度か見たことがある。

「なんと申してよいやら……」

と、礼子は虎之助にためいきをついて見せ、

「西郷吉之助……あのような、人の顔が、この世にあるものでしょうかしら……」

「どんな顔？」

「口には、いいつくせませぬ」

「ほほう……」
「巨大(おおきく)て、やさしくて、いささかの飾り気もないのに、たとえようもなく立派で……」
「ふむ。それなら、その西郷吉之助の嫁になったらよかったのに……」
「いや」
「けれどさ……」
「それとは、ちがいます」
「どうちがう」
「男と女の……そうしたことではなくて、もっと別の……たとえば、おのれがたのむことのためには、いつにても死ねるという、なにもかも投げ出して、世のため、人のためにつくそうとする火のような情熱(こころ)が、あの人の顔にも躰にもみなぎりあふれているのです」
「ふうむ……」
「このような人を敵にまわしたときのおそろしさ……それを、わたくしは、西郷吉之助を見るたびにおもいました」
「さほどの男か……」
「一目見れば、だれにも、そのことがなっとくゆきましょう」
「ま、いいさ」
「え……？」
「おれはおまえさんがそばにいてくれればいい。ほかのことは、もう何も知らぬよ」
「池本先生も、そのことを、おのぞみでしたものね」
「そうだとも」

「うれしいこと……」
「さ、こっちへおいで」
「いや……」
「いいではないか」
「あとで……ゆっくり……」

三

こうしたわけで、虎之助と礼子は二人きりの、ひっそりと甘い、たのしい明け暮れにひたりきっていたのだから、時勢のうごきなど、
（どうでもよかった……）
のである。
虎之助は、のちに、そのころの自分と礼子の生活をかえりみて、こういっている。
「のちになって考えて見ますと、この文久二年、三年という年は、それまで二百何十年もの間、日本の国をおさめつづけてきた徳川将軍と幕府の屋台骨が音をたててくずれはじめた年なのですね。
ところが、われわれにしてもそうなのだが……武家のほかの日本国民というものは、なにごとにも、それぞれの生活(くらし)から時勢のうつり変りを見ているので、その暮しのうつり変りは、はっきりと眼に映っても、天下のうごきぐあいなぞというものは、あまりよくわからなかったものですよ。
また考えて見ると、それでもよいことなので……。

天下が徳川のものであろうが、天皇さまのものであろうが、われわれ国民にとっては、血もながれず、おだやかな暮しがいとなめて行ければ、それがもっともよいのです。

余念なく家業に精を出し、たとえ貧しくとも三度の御飯がいただけ、女房や子どもたちをいつくしむ……ま、人間の一生、人間の世の中というものを、どこまでもつきつめて行くと、たったこれだけのことなのですね。ところが、なかなか、これだけのことがうまくはこんで行かない。これだけのことのほかに、刀を引きぬいて殺し合ったり、やれ徳川の天下だとか、勤王の志士だとか、同じ日本人どうしが、血眼になって、ちからずくであらそうのです。

そりゃあね、諸外国が、小さな島国の日本へ眼をつけて、どしどし入りこんで来ようという大事なときなのですから、日本人どうしが、たがいに憎み合い、殺し合うなぞということは、まったくばかばかしいことなのですよ。

なにごとにも、ちからを合せてやればよいのだが……。

そこのところが、双方ともにわからない。

いつでしたっけ……。

池本茂兵衛先生が、私をつれて旅をしてまわっておられましたときに、このようなことをいっておられました。

日本人というのは、虎之助。白と黒の区別があっても、その間の色合いがない、白でなければ黒、黒でなければ白と、きめつけずにはいられないところがある。しかしな虎之助。人の世の中というものは、そのように、はっきりと何事も割り切れるものではないのだよ。何千人、何万人もの人びと。みなそれぞれに暮しもちがい、こころも躰もちがう人びとを、白と黒の、たった二色で割り切ろうとしてはいけない。その間にある、さまざまな色合いによって、暮しのことも考

えねばならぬし、男女の間のことも、親子のことも考えねばならぬ。ましてや、天下をおさめる政治なら尚さらにそうなのだ。

池本先生はね、こんなわかりきったことが、天下をおさめようというえらい人たちになぜわからないのか……おのれの立場だけを、しゃにむに押しつけようとしても、そこには何の解決も生まれはせぬ……こう、おっしゃってでした。

ですがまあ、人間この世に生まれてこの方、何百年も何千年も、同じようなことをくり返してきている。池本先生もいやいやながら、それでも、御自分がおもうことの一端を何とか成功させ、世の中がおだやかになってくれればよい。ばかばかしいことではあるが、それをしてのけなくては、天下も世の中もおさまらぬのだから……と、こういう考え方で、あの御役目にはたらいておられたのでしょうよ」

それだけに、池本茂兵衛は、愛弟子の杉虎之助を、やみやみと、このような血なまぐさい時勢に巻きこみたくはなかったのであろう。

(なにともして、虎之助と礼子に、来るべき、平和な世を迎えさせたい)

この茂兵衛のおもいも、他の人びとから見れば、強いエゴイズムであったやも知れぬ。

文久三年の春になると……。

虎之助の髪の毛も、だいぶんにのびてきた。

だが、以前のようなまげを結うには、いますこし、のびが足らぬ。

そこで虎之助は、髪を肩のあたりまでたらしたままにしておいた。

将軍・家茂の行列に加わって、京都へおもむく前の伊庭八郎が、この虎之助を見て、

「まるで、宮本武蔵か由井の正雪だね」

とからかった。
「似合うかね、八郎さん」
「奥方は、なんとおおせだ？」
「広徳寺の門前へでも出て、易うらないの看板でも出したらいかが、とこういってね」
「それで？」
「よく似合うそうだよ、八郎さん」
「勝手にしやがれ」
伊庭八郎も、このところ、持病が大分によくなり、血色がすぐれ、元気いっぱいに見えたという。
八郎は、江戸を発つにあたって、
「これからは、もっとひどい大さわぎが起るよ、虎さん。お前さんも好むと好まざるとにかかわらず、このさわぎの中へ巻きこまれずにはいられないのだよ」
にんまりと笑い、その笑いとはまったくちがうするどい視線を虎之助へ突き刺すように投げてよこした。

女の炎（ほむら）

一

伊庭八郎が、京都へのぼるにあたって、
「虎さん。ひとつ、たのみがあるのだが……」
と、いったものだ。
「なんのことだね、八郎さん」
「あんたにできないことをたのむのではありませんよ」
「ほほう……」
「なればさ。どうあっても、ひきうけていただきたい」
「ことばつきがあらたまったねえ」
「たのみごとをするのだもの」
「よろしい。ひきうけましょう」
「実は、私のかわりに、講武所（こうぶしょ）の教授方（きょうじゅかた）・助勤（じょきん）をつとめていただきたいのだ」
伊庭八郎の父・軍平も幕府の講武所で教授方をつとめている。

講武所とは……。

近年、動乱の時勢を鑑(かんが)みて、幕臣の子弟に武術を奨励(しょうれい)するため、幕府がもうけた公立の〔武術練習場〕というべきものである。

講武所が、はじめて設立されたのは七年前のことで、剣術のほかに、槍術・砲術・水練・兵学などの課目に分れ、それぞれ、江戸一流の士が教授方にえらばれた。

幕府も、講武所にはちからを入れ、将軍の家来たるものならば身分の上下を問わず、無料で修行をさせたいという意向であったし、のちに築地から神田小川町へ講武所を移転したさいには、ときの大老・井伊直弼(なおすけ)が老中・若年寄をしたがえ、開場式にあらわれたそうな。

その一カ月後に、井伊大老は水戸浪士の襲撃によって殺害されている。

その後も時勢は、いよいよ急だし、長年の天下泰平の世になれつくして、

「どうも刀(こいつ)は、腰に重くていけませんよ」

などと、放言してはばからぬ山口金五郎のような家来ばかりでは、いざというときの御用に立つべくもない。

だから、初期の講武所の稽古は猛烈をきわめたもので、教授方の三橋虎三と池田新之助の模範試合のときなどは、両人の意気込みもすさまじく、三橋の木刀を受けそこねた池田の喉が破れ、介抱をうけた池田が駕籠で本所・割下水(わりげすい)の自邸へ帰る途中、ついに絶命しているほどだ。

このとき、池田を打ち破った三橋虎三は、八郎の実父・伊庭軍兵衛の甥(おい)にあたる。

八郎は、養父(だんな)・軍平の助手として講武所へ出て、旗本の子弟たちに剣術を教えているわけだが、

「このたび、将軍の御上洛について、私どもが奥詰として御供をすることになったのですよ。虎さん」

と、八郎がいうように、幕府は、講武所の中のすぐれた士を五十余名ほどえらび、これを将軍・家茂の、

〔親衛隊〕

として、将軍の警固の役目に任じたのであった。

なにしろ、いまの京都は、

「物騒(ぶっそう)きわまる」

のである。

井伊大老や安藤老中が、江戸城の門外で浪士たちの襲撃をうけたことをおもえば、将軍の行列が襲われることも容易に考えられるのであった。

そこで、伊庭八郎のような剣士がえらばれ、京へのぼることになったのだ。必然、講武所の教授方が不足となる。

「ま、幕府(こうぎ)もね。陸軍所というようなものをもうけて、行末は、外国式の調練をやるのだというのだが、……いまのところ、どうしても講武所の剣術のほうが、人手不足で、どうにもならねえものだから、養父(ちち)に、あんたのことをはなしたら、ぜひにも来ていただけ、と、こういうわけさ」

こうなっては杉虎之助、親友のたのみをひきうけざるを得ない。

そこで、ひきうけるかわりに、正式の役目としてではなく、あくまでも八郎の養父・伊庭軍平の助手ということにしてくれるなら、

「やって見ましょうよ」

と、虎之助はうなずいた。

「こりゃあ、ありがたい。このとおりだ」
八郎は〔鳥八十〕の二階座敷で両手をつき、かたちをあらため、
「では、よろしくおねがいをいたします」
と、それはもう実にきちんとしたものであった。
こうして伊庭八郎は、将軍上洛の行列に加わり、江戸を去ったわけだが……。
幕府は、これより先、会津・若松二十八万石の城主、松平肥後守容保をもって、
〔京都守護職〕
に任じ、京都の治安をととのえさせることにした。
特別に募集した浪士隊二百二十余名を京都に送りこんだのも、同様の目的からで、この浪士隊が、のちの、
〔新選組〕
になるのである。

二

虎之助は、
「これこれのわけにて、講武所へ出るようになりました」
と、池本茂兵衛へあてて手紙を書いた。
いうまでもなく、茂兵衛の居所は不明であるから、京都の旅籠〔津国屋長太郎〕気付にして、書き送ったのである。

これが文久三年の四月であった。
ところが、池本茂兵衛の返書がとどいたのは、九月も末のことで、将軍・家茂も、伊庭八郎も京都から江戸へ帰って来て三カ月も経てからだ。
八郎たちが帰ってからも、虎之助は依然、講武所へ出勤していた。
茂兵衛は、
「とんでもないことだ」
と、手紙に書いてきている。
「すぐに辞めなさい。お前は、なんで私のいうことがきけないのか」
であった。
「お前は、世の中がしずかになるまで、礼子とふたり、かまえて外に出てはならぬ。お前が出歩くことまでうるさくいわぬが……礼子をひとり、家に残しておくようなことは、決して、してはならぬ。もしも礼子に留守をさせるようなときは、かならず、となりの寺へなりとあずけておくことだ」
くどいほどに、念を押してきているのだ。
「ふうむ……」
虎之助は考えあぐねた。
（先生は、いまも尚、礼子が薩摩の刺客につけねらわれることを、恐れておいでなのか……？）
茂兵衛の手紙には、五十両という大金が、またしてもそえられ、例の町人姿の男が、浅草の〔中村〕あてにとどけられたのであった。
虎之助は、礼子に茂兵衛の手紙を見せた。

「池本先生が、わたくしをまことのむすめのようにおもわれ、いつくしんで下されるのは、まことにありがたいことですけれども……なれど、もはや、大丈夫かとおもわれます」
「なにがだえ？」
「薩摩も、先生やわたくしのことを、以前のように追うてはおりますまい。わたくし、おもいます。いまの池本先生は、薩摩掛りの隠密ではございますまい」
「なるほど……」
それというのも……。
去年以来、薩摩藩は幕府と手をむすんで、うごきはじめている。
勤王革命派としては……。
「どうも、薩摩はたよりにならぬ」
というので、島津久光が江戸へ来ている間に、三条実美など少壮の公家たちをうごかし、
「これからは長州藩や土佐藩の実力をたのみにして、幕府を打ち倒そう!!」
と、いうことになった。
長州藩は、萩三十六万九千石の大藩・毛利家である。
毛利家は鎌倉時代からの武家で、戦国の世には、毛利元就という大英雄を生み出した。
そのころの毛利家は中国地方のすべてをわがものとし、織田信長や、豊臣秀吉が、もっとも恐れていた戦国大名であった。
それが……。
後年の〔関ヶ原の戦争〕において、毛利家は西軍（豊臣方）に味方をしたことから、周防・長門（山口県）の二カ国に領地をけずられてしまったのである。

徳川幕府の威風の下に、天下が統一されてのちも、長州藩では、毎年元旦の未明に、殿さまと家老が秘密のうちに向い合い、
「幕府の御追討は、いかがにござりましょうや？」
と、家老がいうと、殿さまは、
「まだ早かろう」
と、こたえる。
これが、長年の正月のならわしとなっていた、などとつたえられるほどに、徳川将軍と幕府に対して、つもりにつもったうらみがあるというのだ。
こうした〔歴史〕をもつ長州藩だけに、
〔尊王倒幕運動〕
が、特別に強く烈しく燃えあがったものであろうか……。
勤王革命派の、薩摩藩に対する人気がうすくなり、長州藩のそれが強くなると、長州藩は朝廷と強くむすびつき、皇居の警備をするまでになった。
これを……。
幕府と薩摩藩が同盟し、京都守護をつとめる会津藩と共に、武力をもって、
「長州藩を京都から追いはらってしまおう」
としたのが、この年八月のクーデターであった。
これは見事に成功をした。
長州の藩兵は、すべて京都から追いはらわれた。
礼子が、

「もう、大丈夫でございましょう」

というのは、このことなのである。

いま、幕府と薩摩藩はちからを合せて、政局を乗り切ろうとしている。

それなら、幕府の隠密であった礼子を、薩摩ざむらいたちがつけねらうこともあるまいではないか……。

「なるほど……」

虎之助も、うなずきはしたけれども、

（それにしても……？）

あまりにも池本茂兵衛が、礼子と自分に危急がおよぶことを心配しているような手紙の文面が、滓のように胸底へ沈み残った。

三

寝間で、礼子の裸身をかき抱いているときも、ふっと、虎之助の脳裡に、師の声がひらめくのである。

しかし、何もいうことはなかった。

生活の費用は、池本先生がたっぷりと送って下さるのである。

実際に……。

外へ出ようともおもわぬ。

朝夕に、礼子と共にいて語り合って、飽きない。

礼子は、日に日に豊熟しつつあった。

両腕に抱いていて、腰のあたりの充実した重味が、お秀のそれを想い起させるほどであった。

なんといったらよいのか……。

そのころの礼子は、虎之助をもとめてやまぬかたちであった。

いかにも烈しい。

烈しいといえば、お秀が、あの一夜に虎之助へあたえた愛撫も瞠目すべきものであったが、礼子のそれには、お秀のごとき余裕さえなかった。

ただもう、ひたむきに虎之助の躰をもとめてやまない。

たまさかに……。

もとめ合わなかった夜が明けて、虎之助が道場で真剣をふるったのち、井戸端で水を浴び、その躰を礼子がふききよめているときなど、

「痛い……」

虎之助が突然、礼子に肩の肉を、血がにじむほど強く嚙まれて、

「お前さんは、なんということをする……」

あきれることがあった。

「お怒りになっては、いや」

「だが、お前……」

「礼子を、いやな女房と思いなさる？」

「なぜだえ？」

「あまりに、はしたないことをいたしますから……」

笑いかける眼に、抗しがたい情熱がみなぎりわたり、喉もとのあたりの美しい血色に、虎之助がたまりかねて、

「おい……」

ぐいと抱きしめ、そのまま、朝の寝間へ入ることもあった。

「このごろの虎之助は、だらけきってしまい、始末におえないよ」

たずねて来た山口金五郎が、妻女に、

「いやむりもねえさ。甥の嫁ながら、あの礼子を見ていると、おれもむらむらっとなってくる」

などといい、

「なにをおっしゃいます。そのように、みだらなことを……」

めずらしく妻女のお浜が、強く金五郎をたしなめたほどであった。

それほどに、礼子の全身から発散する女の色気には特殊なものがあったのだろう。

「お前たち、あまりに烈しすぎるから、子も生まれねえのだ」

と、金五郎がずけずけと虎之助夫婦にいったことがある。

「はい」

そのとき礼子が、上眼（うわめ）づかいに金五郎をみて、

「叔父さま……わたくしに、子は生まれませぬ」

といったときには、山口金五郎も、

「実に、ぞっとした」

そうである。

礼子という女のいのちが、世の中もなく子もなく、ただ、杉虎之助という夫に向って燃えさかっている態（さま）が恐ろしいばかりに、そのくろぐろとぬれ光る双眸（りょうめ）に凝（こ）ってい、

「見ねえ、虎はすっかり痩せちまったよ。あのぶんではいまに、礼子に食い殺されてしまうのではねえか……」

たとえ冗談にもせよ、金五郎が妻女に向って声を低め、げっそりした顔つきで、いったというのだ。

もって、二人の夫婦生活がどのようなものであったか、知ることができよう。

「おもえば……」

と、のちに杉虎之助は、

「いまにして、わかるような気がします」

こう述懐している。

さて……。

この年の将軍上洛は、幕府にとって大成功であった。

というのも……。

孝明天皇が、若き将軍・徳川家茂と会われるや、

「よき将軍である」

ひと目で、気に入られた。

幕府の強硬なねがいにより、しぶしぶ皇妹の和宮を家茂の夫人として江戸へ送った天皇であるが、

（この将軍なれば、自分と共に、ちからを合せ、国難を乗り切って行けよう）

と、かたくおもいこまれたらしい。

幕府が先に、守護職として京都へ送った松平容保についても、
「まことに、立派な、たのもしい人物である」
と孝明天皇が容保へよせている信頼は厚く、深い。
「これで、何も彼もうまく行くのではないか……私も、そうおもいました」
杉虎之助も当時をかえりみて、そういっている。
「ところが……そうは問屋が卸しませんでしたがね」

旅　僧

一

杉虎之助は、
「ま、八郎さん。見て下さいよ」
こういって、池本茂兵衛がよこした手紙を伊庭八郎へ見せた。
すでに八郎は、将軍家の供をして江戸へ帰って来ている。
「なるほどねえ……」
手紙を読み終え、
「恩師のおことばに、そむくことはできない」
いつになく、まじめな顔つきで八郎が、
「われわれも、日ごとに講武所へ出て、剣術を教えるわけにはまいらなくなったことだし……虎さんのようなお人にやめられると、困るのだが、これも仕方があるまい」
と、いった。
これは、事実であった。

講武所の教授方が、
〔奥詰〕の役目について、将軍の親衛隊というべき任務をおび、京都へのぼったことはすでにのべた。
これが帰府してのちも、任務が解かれぬ。
八郎も、父・伊庭軍平も、何かと江戸城へ出仕することが多くなったようである。
「私はねえ、虎さん。京にいたときも父と語り合ったのだが……あんたも、われわれともども、公儀の御役目をつとめてもらいたい、こう考えて、いま、父もいろいろと、上のほうへはたらきかけているようなのですよ」
「とんでもない」
「なぜね？」
「私は、杉の家をついで御奉公するべき身が……ま、御承知のように、廃嫡となっているわけですから、この上に御役目なぞとは……」
「いや、そうではないのだ。これからはね、虎さん。われわれ若い者がはたらかなくては、どうにもならなくなる。今度、私は京へのぼってみて、これが身にしみてわかったのだが……」
と、八郎が語るには……。
若い将軍の徳川家茂を上にいただき、これをもって老中・若年寄などを中心とする幕府閣僚が、
「なにともして、天下の動乱をとりしずめようとしてはいるのだが……」
それが、
「歯がゆいこと、おびただしい」
八郎は、苦にがしげにいいはなったものだ。

これらの、幕府政治に関与している大名たちは、個々に見れば、なかなか立派な人物もいるし実力もそなえているように見えるのだが、
「いざとなると、責任をなすり合うばかりで、どうにもならねえのだ」
と伊庭八郎はいう。
内には、勤王革命の運動。
外には、外国列強の圧力。
こうした内外の困難に立ち向かい、
「いのちをすてて……」
国のためにつくそうとする大名は、
「一人もいねえのさ」
と、八郎はいいきる。
「そりゃあね、八郎さん」
虎之助は、微笑んで、
「人間、こうした時代にはそうなるものらしいよ。池本先生もいっておいでだったが……あまりに責任が大きいと、一人だけで、おもいきったまねもできなくなるという……」
「ばかな」
伊庭八郎は、舌うちをして、
「現にごらんな、虎さん」
「なにをね？」
「いま、京都守護職として、いえば将軍のかわりに天子様おわす都の治安をまもる会津侯をごら

んな」

会津侯……すなわち会津・若松二十八万石の城主、松平肥後守容保のことである。

松平容保は、美濃・高須の城主、松平義建の第六子に生まれ、のちに会津の松平家へ義子に入った人物だ。

会津の松平家は、徳川将軍と親類の間柄になる大名である。

将軍にとっても幕府にとっても、

「もっとも、たのみになる……」

大名の一人なのである。

ために、松平容保が京都守護職に任命されたのも、うなずけることだが、しかしこのとき、会津・松平家の重臣たちは、こぞって反対をした。

そのころの会津藩士で、殿さま（松平容保）のそば近くつかえていた山川重栄が書きのこしたものによると、

「西郷頼母、田中土佐などの御家老方は、殿さまに目通りをし、そのような重い御役目はおひきうけなさらぬほうがよろしかろう、と、申しあげた」

なぜならば、

「情勢を見ると、どうも幕府の形勢がよろしくない。このような難局に重い責任を負うことは、まるで、薪を背負って火を救おうとするようなものでありますから、おそらく労多くして功なし、ということになりましょう。ぜひにも、この御役目はおひきうけなさいませぬように」

必死に、いさめたそうだ。

このとき、松平容保は、

「……このような重大な難局に対して、安楽をむさぼることはなるまい。なれど、われ一人がそのようにおもうても、一同が味方をしてくれぬのではどうにもならぬ。ともあれ、いま一度、よくよく考え直してみてくれるように」

重臣たちにいった。

「そこまで、御覚悟があるのなれば……」

と、重臣たちも、殿さまと共に、京都安護の役目にはたらくことを決意したのだ、という。

二

伊庭八郎は、いまの幕府閣僚の中に、

「会津侯のようなお方が、あと三人もいてくれたなら、様子は、まったくちがってくる」

と、いうのだ。

現在、京都の情勢は、

「ぬきさしならぬもの」

であるそうな。

ところが、京都をまもっている松平容保が、

「これこれこのような情勢であるから、こうしたいとおもうが、いかが？」

江戸の幕府へ急使をさし向けると、すぐに返事が来ない。その返事が来るまでには、

「気が遠くなるような……」

月日がかかるのだとか。

これはみな、責任のある地位にいる大名が、責任を負うことをきらって、
「ぐすぐすと、のろのろと、返事を引きのばしているにすぎない」
のだそうである。
八郎が、京へのぼっていたときのはなしをきくと、さすがに杉虎之助も、
（そこまで来たか……）
と、おもわざるを得ない。
将軍・家茂は、京都において義兄にあたる孝明天皇と会見し、天皇と共に石清水八幡宮や加茂神社へ詣で、
「外国との交際を絶ち、彼らを、海の彼方へ追いはらうことができますように……」
と、いのったというのだ。
こんな、
「めちゃくちゃな、はなしはねえのだよ。虎さん。そうだろう」
と、伊庭八郎は、
「それはだれしも毛唐とのつきあいなぞはしたくねえ。けれども毛唐どものちからにはかないっこねえというので……」
幕府は諸外国と〔通商条約〕をむすんだわけであった。
それなのに……。
幕府の上におさまる将軍家は、外国ぎらいの天皇と共に、外国と外国人を日本から追いはらうための祈願をしたというのでは、
「とんと世間のもの笑いだ。だが、そうしなくてはならねえほどに、いまの徳川家は追いつめられ

ている。ですがね、虎さん……」
今度の将軍上洛によって、天皇も、若くて純真な将軍・家茂を大へん気に入られ、たしかに自分は外国ぎらいであるけれども、
「徳川には徳川の立場もあろう。いますこし、永い目で、見てやろうではないか」
というこころもちになられた。
やたらに、
「幕府と将軍に味方するものは、片端から暗殺してしまえ！」
などと叫ぶ勤王浪士たちの、血なまぐさいテロ事件は、京都の住民たちを恐怖の底におとし入れているといってもよい。
こうした連中の暴動を、天皇は何よりもおそれておられる。
「永い目で、徳川幕府を見まもり、ちからを合せ、血を流さずに、なんとか、この国難を乗り切って行こうではないか」
というのが天皇の御意志なのである。
「だからね、虎さん。天子様と、勤王浪人とはまったく別のものなのだよ」
と、伊庭八郎は断言をした。
ちからがおとろえたとはいえ……。
ともあれ幕府は、天皇の御妹を将軍夫人に迎えることを得た。
つまり、天皇と将軍とは、
〔親類〕
になったのである。

その上、天皇は義弟にあたる将軍にはじめて会われ、
「よき将軍である」
と、いわれた。
さらにまた天皇は、京都守護職の松平容保を非常に信頼なされているそうだ。
「……ここまで、うまくもって来たのだから、なんとしても徳川のものは、この機会（とき）をのがさず、天子様と天下の期待（のぞみ）にこたえなくてはならぬ。そのためには、才能と腕のある若者たちが、どしどし御役目について……」
責任のなすり合いをしている古くさい幕府閣僚の、
「尻をたたかなくてはいけねえのだ。もっともいのちがけだがね」
これが、八郎の持論であった。
にやにやしながら、これにきき入っている杉虎之助をながめ、伊庭八郎は、ふといためいきを吐き、
「ま、ひとつ」
盃を虎之助へさした。
例の〔鳥八十〕の二階座敷である。
「ありがとう」
うける虎之助へ酌をしてやりながら、八郎がこういった。
「もっとも虎さんに、こんなことをいってみても、はじまらねえことかな」
「なぜね？」
「だって、お前さんは礼子さんにぞっこんというやつだ。男が女を、真底（しんそこ）から可愛がっているときは、天下のことも世間のことも忘れきってしまうというからねえ」

三

たしかに、伊庭八郎のいうとおりやも知れぬ。
八郎のいうことは、わかりすぎるほどわかるのだが、どうにも実感がわいてこない。
金にも困らぬ。
のんびりと金杉の家で、愛する女と住み暮している幸福に、実は杉虎之助、酔いしれていたといってもよろしい。
〔鳥八十〕で八郎と別れてから七日目の朝になって、
「ちょいと、出かけてみるかな」
虎之助が礼子にいった。
「どちらへ？」
「講武所へ、さ」
「まあ……池本先生のおさとしにそむいても、よろしいのでしょうかしら」
「そういうな」
「でも……」
「ちょいと、のぞいてみるだけのことだ」
ふくみ笑いをして礼子が、
「わたくしよりも剣術がお好きなあなたさまゆえ……」

「皮肉をいうのじゃあない。のぞいて来る。ちょいとだ」
「はいはい。かまいませぬ。御遠慮なく……」
虎之助も、自分がこれまで手をとって教えて来た旗本の子弟たちと、急に別れてしまうことも、こころのこりであった。
情もうつってきていた。
（毎日のことではないのだから、池本先生も、おゆるしになるだろう）
ほんの一刻（二時間）ほど、稽古をつけてやるつもりで、虎之助は五ツ半（午前九時）すぎに、金杉の家を出た。
講武所は、神田・小川町にある。
虎之助の家からも、さして遠くはなかった。
講武所へ着くと、
「や……来なすったね」
めずらしく、伊庭八郎が稽古着をつけ、白皙(はくせき)の顔(おもて)を汗にぬらし、若者たちに稽古をつけていた。
「八郎さんもか……」
「さようさ。お前さんが、もう来てはくれねえいうので、私も気張っているところなのだ」
「は、はは……」
こうなると虎之助は、いやでも竹刀(しない)をにぎらざるを得ない。
一刻の予定が三刻（六時間）にもなってしまった。
時局がこのようになると、幕臣の子弟たちも、
（いつ、どのようなことが起るか知れたものではない）

という緊迫感が出て来て、このごろは講武所通いをする若者が増えるばかりなのだ。
そうなるとまた、教えるほうでも、
「仕甲斐がある」
ことになる。
たっぷりと汗をながして、稽古を終えた虎之助を八郎が待ちうけていて、
「鳥八十へ行こう」
と、いう。
「いいな」
すぐに乗った。
晩秋の夕暮れで、二人が講武所を出るころには、ぽつり、ぽつりと雨が落ちてきはじめた。
久しぶりで、おもうさまに稽古をつけた杉虎之助は、全身がこころよい疲れにみたされ、伊庭八郎と肩をならべ、傘もささず、駕籠へも乗らずに御成街道へ出ると、まっすぐに上野広小路へ……。
二人が〔鳥八十〕の二階座敷へ落ちついたころ、ようやくに雨が本降りとなった。
これより先……。
ということは、虎之助と八郎が講武所を出る半刻（一時間）ほど前に、金杉の家にいた礼子が、
（そろそろ、夕餉(ゆうげ)の仕度を……）
とおもい、台所に出てみると、
（あ、いけないことを……）
酒が、きれてしまっている。

そこで礼子が、虎之助の晩酌の酒を買うため、家を出て、金杉の表通りへ出た。
池本先生のいいつけをまもり、これまでは外出を絶っていた礼子だが、この半月ほどの間に、自然に外へ出て用事をたすこともあるようになった。
虎之助もこれを黙認していたのは、二人ともに、危機感も不安も、まったく消え去っていたからだろう。
表通りへ出て、〔遠州や〕という酒屋へ向う礼子と、三ノ輪の方角からやって来た旅の僧が、夕闇の中で、すれちがった。
礼子は、そのまま〔遠州や〕へ入って行く。
その後姿を見送り、道端に立ちつくした旅僧が、網代笠の内で、
「まさに、あの女……」
と、つぶやいたものである。
礼子は、なにも知らずに酒を買っていた。

強　雨

一

買物をすました礼子が我家へもどって行くのを、旅僧はさり気なくつけて行った。
それは、まことに大胆な尾行の仕方であった。
礼子のすぐうしろについて来ながら、一、二度ふり返った礼子の視線にたじろぎもしなかったのである。
礼子にしても、その旅僧を、
（あやしい男……？）
と見て、ふり返ったわけではない。
歩行者がだれでもする、何気ないものであった。
だが……。
もしも礼子が、網代笠にかくれた男の顔を見たら、どうしたろうか……。
礼子は、この旅僧の顔を見知っていたはずである。
その時刻には、まだ雨も落ちては来ず夕暮れ前のことで、人通りも多かった。

杉家のあたりまで来ると、まわりは百姓地が多くなって、まことにしずかなものだが、根岸の方から金杉の通りへ出る人影が絶えていたわけではない。

それに、このあたりには寺院が多く、旅僧が行くのをあやしむ人はない。

礼子も同様であった。

杉虎之助も、あの寺田屋騒ぎの折に、旅僧となって大坂へ乗り込んだものだ。

これは、いかに垢じみた旅僧でも、ともかく僧侶の姿かたちをしていることは、諸人の警戒を解くための、もっとも早い方法だったからだ。

礼子は、虎之助との愛情におぼれきっている。

女だけに、現在の生活へ適応するのが早い。

ということは……。

彼女の〔密偵〕としての感覚が、うしなわれつつあったことにもなる。

それでも礼子は、我家の小さな門をくぐるとき、あたりに眼をくばった。

根岸の方向から、牛をひいた百姓が、こちらへやって来る。

そして礼子は、自分のうしろから来た旅僧が、我家の前を通りすぎ、牛と百姓とすれちがって、道を曲がって行くのを見た。

礼子は、家へ入り、夕餉の仕度にかかった。

すると……。

道を曲がって行った旅僧がもどって来た。

杉家の門の前で、立ちどまり、笠をすこしあげて、門内をのぞきこむようにした。

僧の顔が見えた。

この男の顔なら、虎之助も見知っているはずである。

〔ひげ男〕の大山格之助と共に、中仙道・美江寺(みえじ)の茶店で、礼子と虎之助を襲撃した薩摩藩士の中に、この旅僧はいた。

そして……。

東海道・御油の宿場でも、大山格之助と共に、虎之助と斬り合った男なのである。

旅僧は、そのまま、またも金杉通りへ出て行った。

通りへ出ると、旅僧の足が俄然、速くなった。

見る見るうちに、彼は、上野山下の方角へ向って走り去ったのである。

そのころ……。

伊庭八郎と虎之助は、まだ講武所を出ていない。

「おもえば……」

と、のちに虎之助が語りのこしている。

「私はともあれ、あれほどに薩摩掛りの隠密として……いえ、たとえ、その下ばたらきをつとめていたにもせよですよ。礼子としたことが、あまりにもうっかりとしすぎていたものです。

それは、私もいけない。

あれほどに池本茂兵衛先生から念を押されていたにもかかわらず、つい、うっかりと……。

そこがそれ、なんと申しても、礼子と私は若かったのです。とてもその、薩摩藩などというものは、われわれが考えていたようなものじゃあなかったのでございますね。

なるほど、そのころの薩摩藩の〔大殿さま〕だった島津久光公は、幕府と共に政局の中心となってはたらき、薩摩の威風を天下にしめそうという……ただ、それだけのものであったやも知れ

ません。

けれども、西郷（隆盛）だの大久保（利通）などという人たちは、まったくちがう。

つまりその、いわゆる封建の世の、将軍と大名とのむすびつきが、もっともっとおとろえるまでは、ともかく逆らわずにいよう。しかし、勤王方のちからが一つの大きなものにふくれあがったときこそ、容赦なく徳川幕府の屋台骨を根こそぎたたきつぶす決意をかためていたのではありませんかね。

ですから、それ、池本先生をはじめ、幕府の薩摩掛りの隠密なら、やはり生かしてはおけないので……。

もっとも、これは、むかしからそうなのでしてね。世の中がさわがしくなるずっと前、どこの大名でも将軍と幕府にはあたまが上らなかったころから、幕府隠密が領国へ忍びこんで来たら、情容赦もなく斬り殺してしまったものですし、幕府としても、そのことについては、当然ながら文句をつけられなかったのでございます。

そうしたことを、おもい合せて見ますと……いや、まことに、私と礼子は人がよすぎました。いえもう、人がよすぎるということはつまり馬鹿だということなのでございましてね」

二

虎之助が、伊庭八郎と〔鳥八十〕で別れたのは五ツ（午後八時）をまわっていただろう。

八郎は、駕籠をよんでくれて、

「私は、もうすこし、のんでから帰る。お前さんは奥方がお待ちかねというやつだ。さっさとお

帰りなさい」

と、いう。

いつもなら虎之助、八郎にこういわれて素直に引き下るものではなく、

「何をいうのだ、八郎さん。最後まで、つき合せていただこう」

うごくものではなかったはずだ。

ところが、この夕……。

虫が知らせたとでもいうのか、八郎にすこしもさからわず、虎之助が、

「それでは、お先に」

「ほ……今夜は、ばかに素直なのだねえ」

「なんとでもいいなさい」

「ま、ともかく、もう一度、考えて見て下さいよ、虎さん」

「なんのこと？」

「これだ」

苦笑をして八郎が、

「講武所のことさ」

「あ……それなら、いけない」

「すっぱりといいなさるじゃあねえか」

「悪うござんしたかね」

と、虎之助もこのごろは八郎の伝法な口調が移ってきたようである。

虎之助は、よばれた駕籠に乗った。

上野の〔鳥八十〕から、金杉の我家までは、目と鼻の先といってもよい。
だが、雨はひどくなるばかりであった。
「遠慮なく、いただきますよ」
「奥方へよろしく」
「はい、はい」
雨の中を、虎之助が乗った駕籠は山下から坂本へ出て、金杉へかかる。
金杉上町の角から西口へ切れこみ、安楽寺の門前を通りぬけ、我家の前へ乗りつけた虎之助が、
「ここでいいよ」
こころづけを駕籠かきへわたした。
「こいつはどうも……伊庭さまから、ちゃんとしていただきましたのでござんす」
「ま、いい。とっておけ」
礼をいって、もどって行く駕籠を見送りもせず、雨の中を一気に、虎之助は玄関前へ走りこんだ。
「いま、帰った」
と、いいかけて虎之助が、どきりとした。
（こいつ、おかしい……？）
のである。
どこにも、屋内に灯がともっていない。
玄関前の左手の垣根ごしに、居間の灯が見えねばならぬはずであった。
まっ暗である。

玄関の戸には戸締りがしてあって、開かない。
「礼子……」
よびかけようとして、虎之助は声をのんだ。
虎之助は刀の鯉口を切り、垣根の戸を開け、庭へ入った。
「その一瞬に……こいつ、ただごとでない、という気がしました。つまりその、いまの流行（はやり）ことばでいう直感というやつ……。
たしかに、何やら異変があったとおもいました。
とにかく、まっ暗闇の中で、こっちは提灯も持っていなかったのです。うかつに礼子をよぶこともできない。こっちが声を出せば、こっちが帰って来たことを敵に知らせることになりましょう。そうなんでございますよ。まさに敵……敵が来て、礼子に危害を加えたことを、私はとっさに感じたので……」
虎之助が、身をかがめて、居間の前へ来ると、居間の雨戸は閉じられている。その雨戸の隙間から灯がもれていなかったのは、すでにのべたごとくだ。

三

そこで、虎之助は、
（よし。裏手から……）
と、おもった。
身をかがめたままで、井戸端のあたりへすすみ、そこで身を起こした瞬間であった。

ものもいわずに……。

井戸端の、向うの木蔭にひそんでいた黒い影が飛び出し、虎之助へ突風のように襲いかかって来た。

ゆだんなく身がまえていただけに、虎之助には寸分の隙もなかったといえよう。

左足を大きく引きざま、曲者の一撃をかわした虎之助が、腰間の一刀、ぬく手も見せずに、

「たあっ!!」

曲者を、すくいあげるように斬った。

「うわ……」

刀を振り落し、そやつが、のめりこむように転倒するのを見向きもせず、勝手口へ走り寄った虎之助が、はじめて、

「礼子!!」

と叫んだ。

すると……。

戸が開いた勝手内の暗闇の中から、得体の知れぬ咆哮を発して、刀を突きこんで来た者がある。

「む……」

あやうく身をそらして、この突きをかわし、飛び退った虎之助の背後から、別の曲者が、

「やあ!!」

猛然と打ちこんで来た。

身をひねってかわしたとき勝手口から躍り出した黒い影が眼もくらむような一撃を、虎之助の頭上へ打ちおろした。

早くも虎之助の腰は、完全に下りている。

うなりを生じて打ちおろされた敵の一刀を下からはねあげた。

刃と刃が嚙み合うすさまじい音がして、敵の刀ははね飛ばされ、

「うぬ!!」

すかさず飛び下って、差しぞえの脇差へ手をかけたそやつには追い打ちをかけようともせず、虎之助は振り向きざま、別の一人へ斬りかかった。

ただの一撃であった。

虎之助の刃に、深々と肩口を割りつけられたその敵が、泥しぶきをあげて倒れ伏した。

烈しい雨が、闇を白くしている。

雨音が、裏庭の闘争の響きをほとんど消してしまっていたほどだ。

虎之助は、身をひるがえし、居間に面した庭先へ……。

こうなると雨の闇の中だけに、勝手知った虎之助のうごきは俊敏をきわめた。

闇のどこかで、

「逃げろ!!」

と、叫んだ声を、たしかに虎之助はきいた。

それにかまわず、体当りに雨戸を外した虎之助が、縁側へ躍りあがった。

刀を小脇にすぼめて、気配をうかがった。

庭先の敵も、まだ二人三人はいたらしい。

しかし、斬りかかけて来る様子はなかった。

屋内の闇の中にも、殺気はない。

「礼子……」
　よびかけた虎之助の声に、こたえはなかった。
　大刀を鞘におさめ、虎之助は脇差をぬきはらった。
　もしも、屋内に敵が待ちかまえていて、これと斬り合うときには、脇差のほうが闘いやすかったからである。
　居間へ駈けこんだ虎之助は、行灯が倒れているのを知った。
　闇になれてきた眼に居間と台所の間にある部屋の襖がぼんやりと映った。
「どこだ、礼子……」
　立ちあがった虎之助の足が、畳に倒れた襖をふみつけた。
　そのときだ。
　向うの部屋の闇の底から、かすかなうめき声がきこえたのである。
「あっ……礼子」
　夢中で飛びこんだ。
　礼子は、台所の板敷へ半身を乗り出すようにして倒れていた。
「おい、どうした……」
　抱き起そうとした虎之助の左掌がべっとりとぬれた。
　礼子の血であった。
　虎之助は、とにかく灯をつけることにした。
　部屋の小戸棚から大蠟燭を取り出し、灯をつけた。
「あっ……」

　さすがに虎之助も、叫ばずにはいられなかった。
　倒れている礼子の顔の左半面から肩、胸にかけて、おびただしい血であった。
「しっかりしろ、おい……これ、礼子」
「あ……」
「気づいたか。だ、大丈夫だ。死にはしないよ。いま、手当をする。気をたしかに……」
「あ、あなた……」
「ここだ。おれだよ、礼子。やつらは逃げてしまったぞ」
　気がつくと、礼子は右手に懐剣（かいけん）をつかんでいた。
　のちにわかったことだが、この懐剣も血にぬれていた。
　襲いかかる敵を相手にして、礼子も必死で闘ったものであろう。
　となりの安楽寺の僧たちが、杉家でのさわぎに、まったく気づかなかったのは、強い雨音に邪魔されたためであった。
　礼子の傷は、左のこめかみから頰へかけて浅く切りつけられていたのと、左肩から背中へかけて……これは相当の深手である。
　そしていま一カ所。腰のあたりをなぎはらわれていた。
　虎之助は、医者をよぶ前にしておかねばならぬ傷の手当をすばやくおこなった。

泥鼈（すっぽん）の吸物

一

虎之助の知らせをうけ、安楽寺の僧たちが、おどろいて駈けつけて来た。

「な、なんということに……」

と、僧の英誉が、

「雨音にまぎれて、なにも、この耳へはきこえなんだ。ええもう、こんな雨夜にこそ気をつけねばならぬというに……わしとしたことが、わしとしたことが、なんという……」

歯がみをして、くやしがったものである。

僧たちが手わけをして、諸方へ走ってくれた。

一人が、浅草・駒形の鰻や〔中村〕へ走った。

亭主の房吉は、礼子の危難をきいて驚愕し、すぐさま店の者を、本所・石原の山口金五郎宅へ走らせた。

別の一人は、金杉からも程近い下谷・山崎町に住む外科医・福井宗伯のもとへ走った。

福井宗伯は、もと、出羽の国・秋田二十万五千石の佐竹侯の藩医であったそうだが、いまは養

子の福井意俊（いしゅん）にあとをつがせ、自分は七十の老齢を気楽な一町医として暮している。

駕籠で駈けつけて来てくれた宗伯老先生を一見目て、虎之助は、

（このお方なら……）

と、安心をした。

五尺そこそこの小柄な福井宗伯だが、

「怪我人は、どこじゃ？」

よばわりつつ、入って来た様子に、医者としての自信がみちあふれていた。

（わしが手をつくして助からぬものならば、他の、どの医者の手にかかったとて助からぬ）

この自信なのである。

「突然に、おはこびをねがいまして、おそれ入ります」

「杉さんとは、あんたかえ？」

「はい」

「ふうむ……かなりに、剣術をおつかいなさるね？」

宗伯先生にやりとして、礼子の傷口をしらべながら、

「こいつ、ただの盗賊の仕わざともおもえないなあ」

虎之助、一言もなかった。

宗伯は、もう虎之助へ何も問いかけようとはしなかった。

羽織をぬぐと、木綿・筒袖の身仕度で、すぐさま傷の手当にかかった。

英誉をはじめ五人の僧が、これを手つだううちに、〔中村〕の房吉夫婦が駈けつけて来た。

宗伯が、礼子の傷口を縫合（ほうごう）していた。

隠居してから長崎へ出かけて行き、西洋医学を研究し、手術をも勉強し直してきたというだけに、老先生の手さばきは実に見事なものである。

礼子は、苦痛のあまり気をうしなってしまっていたが、素裸で、うつ伏せになった礼子の白い躰が血にまみれている態を見て、

「ひえっ……」

房吉の女房・おかねが白眼をむき出して失神してしまった。

そこへ……。

山口金五郎も、駕籠で駈けつけて来る。

「虎之助。いってえ、これは……?」

「叔父上。あとで、くわしく申しあげます」

「礼子さんは、助かるかね?」

虎之助は、こたえなかった。

いかにも出血がひどい。

手術中に、息が絶えてしまいそうに見える礼子であった。

それにしても福井宗伯の手術は、いかにも敏速であった。

すべてを終り、礼子をうつ伏せにして新しい床へ寝かせ終えたとき、まだ夜は明けていない。

宗伯は手をきよめてから、

「酒はあるかえ?」

「ございます」

「冷で、いっぱいもらいたいな」

「はい」

虎之助が、冷酒を茶わんにくみ、

「どうぞ」

「ありがとうよ」

虎之助がさし出した盆の上から、茶わんをとって一息にのみほした宗伯が、

「ああ、うまい」

ためいきのように、いった。

行灯の灯が、宗伯の老顔をつややかに照らしている。

はじめ、この家へ入って来たときにくらべると、十歳は若く見える宗伯であった。

大きな手術のあとだけに、外科医として久しぶりの緊張が宗伯の老体を若返らせたのでもあろうか……。

「も、もし……」

たまりかねた金五郎が、

「せ、先生。礼子が傷は、いかがなものでありましょう?」

「さようさ……」

茶わんを盆の上へ置き、

「ここ三日が勝負じゃろ。なにしろ出血がひどい」

と、宗伯がいった。

「三日……?」

「うむ。わしもな、ここへ泊りこむ」

虎之助が躍りあがらんばかりにして、
「それは、まことでございますか？」
「あれほどの患者なら、いつでもそうしているわさ」

二

翌日も、雨がふりつづいている。
礼子の意識はもどらなかった。
このときの福井宗伯の手術は、完璧なものだったらしい。
当時、人体への輸血がおこなわれるまでに、医学は進歩していなかった。
宗伯は何も問わぬけれども、山口金五郎が、
「おれらから見ても、ただの盗人の仕わざにはおもえねえ。虎よ。いってえ、こいつはどうしたことなのだよ。え、え？」
執拗に問いかけてくるのに、虎之助も弱った。
〔中村〕の亭主・房吉はうすうす、礼子が以前、池本茂兵衛としていたことを察していたようだが、房吉とてもこれを口に出すわけにはいかぬ。
「さ……それが、私にもわからないのですよ、叔父上」
「うそをつけ」
虎之助は、そうこたえるよりほかに術はなかった。
「ですが、叔父上……」

「お前の面は、何も彼も知っている、という面だ」
「ばかなことを……」
さいわいに……。
虎之助が斬り殪した二人の刺客の死体は、昨夜、福井宗伯が駈けつけて来る前に、英誉の指図によって安楽寺の僧たちが墓地へはこび、埋めこんでしまっている。
翌朝……。
空は、まっ青に晴れあがった。
五ツ（午前八時）ごろであったろうか……。
虎之助が枕もとにいて、横向きに寝ている礼子を見つめていると、礼子の眼が開いた。
「あっ……」
おもわず声をたてて、
「気がついたか。おれだ。虎之助だ。ここにいるよ」
「あ……」
「わかるか、え？」
「はい……」
礼子が眉をしかめつつ、躰をうごかしかけた。
「いけない。うごくな」
「あ……」
「痛いか？」
「だ、い、じょうぶ……」

「おれがいけなかった。お前をひとりにしておいて……」
礼子が、かぶりをふって弱々しげな笑みをうかべ、
「わたくしが、いけなかったのです」
と、いう。
福井宗伯が、虎之助の声をききつけ、居間でねむっていたのが飛び起き、
「気づいたか？」
と、部屋へ入って来た。
房吉夫婦は、今朝早く、駒形へ帰って行き、山口金五郎は疲れきって、ねむりこけているらしい。
「礼子。福井宗伯先生だよ。あれからずっと、お泊り下すって……」
礼子がうなずき、
「お世話を、おかけ申し……」
「よしよし。痛むかな？」
「背中へ、重い板戸を、背負わされたような……」
「そうか、そうか。よし、よし……さ、眼をとじて、ねむってもよいのだよ。もう口をきくのではない」
「はい」
「着物を着せてあげなさい」
宗伯は、傷の薬をかえて、ていねいに礼子を診察した。
虎之助が、礼子の躰へ寝衣を着せかけたところへ、宗伯は薬湯を煎（せん）じて来た。

「さ、これをおのみ。気が安らかになって、よくねむれるはずだ」
なるほど、薬湯をのむと、礼子はまたしても昏睡（こんすい）状態に落ち入った。
「これで、よし」
うなずいた宗伯が、
「杉さん。ちょいと庭へ出ようか」
「は……？」
「大丈夫じゃ。ひとりで、ねむらせておきなさい。まあ、庭へ……」
「はい」
二人、肩をならべて庭先へ出た。
「今朝は、よう晴れたな」
「はい」
「おぬしには、あの青空も眼に入るまい。むりもないことよ。あれほどの美女を妻にされたのだものなあ」
「おそれ入ります」
「あの、な……」
「はい？」
「御妻女のことなのだが……」
「は……？」
「むずかしいよ」
「え……」

「覚悟しておきなされ」
「やはり……」
「おぬしが、わしの駈けつける前に手当をしておいたから、ここまで保(も)ったのじゃよ。斬られてすぐに、わしが手術をしていたなら助かったろうが……いかにせん、血が出すぎてしもうたわえ」
「……」
「だれぞ、御妻女の縁類の人がおられるなら、よんでおいたほうがよろしい」
いうや、宗伯は虎之助の顔を見返りもせずに、礼子の寝ている部屋へ去った。
虎之助は、もう、眼の前がまっ暗になったようなおもいであった。
(礼子が死ぬ……本当なのか……)
であった。
あまりにも、自分と礼子との愛のはかなさに、
「まるでそのとき……おはずかしいことですが、私が死んでしまったようなおもいがしたもので……」
と、のちに虎之助は語っている。

この日も、礼子はねむりつづけた。
夜がふけて……。

三

虎之助が、礼子の傍に添い寝のかたちで、とろとろしていたが、そのうちにはっと目ざめた。
礼子が右手をのばし、虎之助のうなじのあたりへふれてきたのである。
「あ……眼がさめたか?」
礼子がうなずいて、微笑した。
苦痛のともなわぬ、いかにも天真爛漫といった……童女にかえったかのような微笑であった。
「痛むか……苦しくはないか」
「いいえ……」
「そうだ。夕方に、中村の亭主が泥鼈(すっぽん)の吸物をこしらえてきてくれた。精がつくそうだよ。あたためてこよう」
礼子が、はっきりとうなずいてみせたので、虎之助は、
「そうか、食べてみるか……」
大いに、よろこんだ。
食慾が出れば、
(まだ、のぞみはある)
からである。
宗伯先生も、金五郎叔父も、居間の向うの、道場に接した部屋でねむっている。
台所には、晩秋の冷え冷えとした夜気がたちこめてい、裏庭のどこかで、生きのこった一匹の虫が絶え入りそうに鳴いている。
虎之助は、その虫の声をきいて、ぞっとするような寂寥(せきりょう)感に五体を抱きすくめられた。
虎之助は烈しくかぶりをふった。

なぜ、そうしたのかわからぬ。
雑念から逃れるがごとく、火をおこし、土鍋をかけ、すっぽんの吸物をあたためた。
「さ、口をあけてごらん」
散蓮華にすくいとった吸物を近づけると、礼子が微かにかぶりをふるではないか。
「食べたくはないのか？」
礼子が、眼でものをいった。
「あ、そうか……」
つまり、口うつしにのませてくれと、礼子はいっているのだ。
「よし、よし」
吸物を口にふくみ、礼子の、熱でかわいたくちびるへもってゆくと、おもいもかけなかったような烈しさで、礼子が虎之助の唇を吸った。
これには、おどろきもしたが、うれしくもあった。
これだけの力が出てきてくれたのなら、
(助かるやも知れぬ)
と、感じたからであった。
「もっと……」
「よし、よし」
また口うつしにのませてやった。
こうして礼子は、一椀の吸物のほとんどを、虎之助の口から摂取したのである。
「よく食べてくれたね。ありがとうよ」

こちらを見つめて、眼をうるませている礼子に、
「さ、ぐっすりとおやすみ」
頬をつたわり落ちる泪をふいてやると、
「あなた……」
「む？」
「これからも、気をつけて、下さいまし」
「なにを、だ？」
「あのとき、薩摩ざむらいたちは……」
「やはり、薩摩のものだったのか」
「はい」
「よし。もう口をきくな。傷が癒ってから、ゆっくりと……」
礼子が、かぶりをふる。
「どうした？」
「あの男たちは、私よりも、あなたを討つために、押しこんで来た、ようにおもわれます」
「おれを、ね……」
御油の宿の乱闘で、虎之助が斬って殪した薩摩侍の一人で、東郷井喜蔵という者がいる。
その井喜蔵の弟で、東郷直二というのが、これも御油で虎之助と闘ってい、直二は死んでいない。
金杉の通りで礼子に出合った旅僧が、この東郷直二であった。
もっとも、そのことが虎之助にわかったのは、ずっと後になってからだが……。

だから……。これも、そのときになって、はじめてなっとくがいったことだけれども、幕府隠密を討つということのほかに、東郷直二にとっては、

〔兄の敵（かたき）〕

であり、他の薩摩侍にとっては、

〔同僚の敵〕

である杉虎之助を討つ、という……その復讐の一念もこめられていたにちがいないのである。

夜が明けた。

礼子は、まだ生きている。

が、しかし……。

福井宗伯は手当を終えるや、虎之助を別の部屋へまねき、

「今日だよ、杉さん」

ささやいてよこした。

夫婦の墓

一

「やはり、いけませぬか？」

「残念だがねえ……杉さん。これからずっと、そばについていておあげ」

「はい」

この日も、よく晴れわたっている。

虎之助は、礼子のそばへ行き、ねむっている顔をながめた。

血の気が全く失せ、紙のように白い顔であった。

閉じた両眼のまわりに、隈（くま）が浮いて出ている。

かたちよく、ぷっくりとふくらんでいた礼子の小鼻が削（そ）げてしまっていた。

小鼻が落ちると死が近い、などといわれているが、

（やはり、いけないのか……）

虎之助は、げっそりとしてしまった。

四ツ半（午前十一時）ごろであったろうか……。

礼子が舌の先を口からのぞかせ、白くかわいたくちびるを、もどかしげにうごかしはじめた。
「水か……」
と、虎之助が水差しの水を入れてやりかけたが、おもいついて、これを口うつしにのませてやった。
と……。
礼子が、ぱっちりと眼をひらいたものである。
「どうだ。苦しくはないか？」
かぶりをふって見せたが、昨日のときのようなちからはない。
また、眼をとじて、
「あなた……これで、お別れなのですねえ」
と、礼子がいう。
「なにをいう。大丈夫さ」
「虎さまともあろう方が、そのように、気やすめをおっしゃるものでは、ございません」
「う……」
「夢と現（うつつ）の間をさまよいながら……あの、わたくし……あなたに、なにか、いいのこしたことはないか、と……ずいぶん、考えましたけれど……なにも、ございませんでした」
「礼子……」
「短い間でしたけれど……いまの礼子には、三十年、四十年も、あなたの妻として……生きてきたような、おもいがいたします」
「もういい。口をきくな。疲れてしまうよ」

「疲れもなにも、もう、ありませぬ」
「しずかに、やすめ。やすんでくれ」
「こうなってみますと、一年も三十年も、同じでございますよ」
「礼子……」
「抱きおこして下さいまし」
「いけない」
「早く……早く……」
何故か、礼子の眼の色に、必死なものが浮きあがっていた。
「おねがい、早く、早く抱きおこして……」
さからいきれなかった。
抱きおこしてやると、礼子が、
「庭の、障子を開けて」
「いけないよ、おい」
「だいじょうぶ。手をはなしても……」
「こうか……」
「もっと、いっぱいに、開けて下さいまし」
「む……こうか」
「はい。ああ…よい日和（ひより）ですこと」
あわてて礼子のそばへもどり、肩へ腕をまわしてやると、
「あ……よいきもち！」

ぐったりと、もたれかかって、
「あなたと共に暮した、この家のお庭、見たかったのです」
「そ、そうか……」
あまり、手入れをせぬのが好きで、木や草の生うるにまかせた庭の雑木紅葉の彼方に、安楽寺との境になっている土塀がのぞまれた。
土塀の向うに、安楽寺の大銀杏がまぶしいばかりに黄ばみつくし、その背景のまっ青に晴れあがった空には、雲ひとつない。
ひたと、庭に見入っている礼子のあたまが、虎之助の胸へもたれこんで、
「わたくし、しあわせでした……」
かすかにいった礼子の声が虎之助の耳へ、はっきりと入った。
虎之助は、異常を感じた。
「おい！　これ、礼子。礼子……」
もはや、こたえはなかった。
紙のように白い、すんなりとしたのどもとを見せ、礼子は息絶えている。
そこへ、入って来た山口金五郎が、
「虎之助。中村のご亭主が、すっぽんをもって来てくれ……」
いいさして、声をのみ、凝然と立ちすくんだ。

二

礼子を葬ったのち、虎之助はただもう、茫然と日々を送り迎えるのみであった。
実際に、
「おのれが啖う食物にさえも、気が向きませんで、ね」
というわけで、食事の仕度は、安楽寺の僧たちが交替でしてくれた。
というよりも、僧たちに食べるものを、はこんでもらい、これを味もわからずに、虎之助が口にしていたといったほうがよいだろう。
前に、虎之助が谷中・八軒町の石屋につくらせた実父・杉平右衛門の墓は、いまも裏庭の一角にすえ置かれてある。
この、小さな碑のような父の墓と同じような墓石を、またも虎之助は、八軒町の石屋にたのんでつくらせた。
それへ……。

杉虎之助之墓
礼子之墓

の文字を刻ませたものである。
礼子の歿年月日は裏側にきざみこまれてあるが、もちろん、虎之助のそれはきざまれていない。
のちに、虎之助は、
「申さば、まあ、比翼塚の出来損ないみたようなものでして……ずいぶんと気ざわりなまねをしたものですが、つまりそれ、私と礼子の間には子もございませんでしたし、夫婦の骨の始末を、いまのうちにとおもったのやも知れません。
いいえ、だからと申して、礼子のあとを追うなぞと、そんな殊勝な決心をいたしていたわけで

もございません」

　そう語っているけれども、そこにはやはり、二度と人なみな家庭生活をいとなめまい、という胸の内が看(み)てとれようというものだ。

　虎之助は、父・平右衛門の墓のまわりに植えこんだ南天と共に、父の墓と、自分と礼子の墓とを安楽寺へ移し、金五十両をそえて、

〔永代(えいたい)の供養(くよう)〕

を、たのんだ。

　安楽寺の老和尚は、

「よいとも」

　すぐに、ひきうけてくれ、

「江戸をひきはらうおつもりじゃな、杉どの」

「おわかりでございましたか……」

「そのような気がした。やはり、な……」

　虎之助としては、

（なんとしても、礼子を死なせてしまったことは、この、おれの口から池本先生へ告げねばならない）

と、おもいきわめている。

　池本茂兵衛が、あれほどに、執拗(しつよう)なまでに何度も、

（世の中が、すっかり落ちつくまでは、礼子を家の中から、一歩も外へ出してはならぬ）

きびしく、いいふくめられていたにもかかわらず、

（おれの手落ちから、ついつい、うっかりと気をゆるませ、礼子を死なしてしまった……おれさえ、先生の御ことばをおろそかにしていなかったら、礼子は死なずにすんだのだ）

なのである。

　そのことに、虎之助は強い責任を感じていた。

　また、恩師のいいつけにそむき、われにもない油断をして、取り返しのつかぬ事態をまねいたことを、手紙などで師に報告をしただけでは、すむはずがない。

　とにかく、虎之助は京都へのぼり、池本茂兵衛をさがし出し、

（ぜひにも、お目にかからねばならぬ）

と、これだけは、礼子が亡くなった直後から、胸におもっていたことだそうな。

　虎之助が安楽寺へ、二つの墓石を移し終えたとき、文久三年の年も暮れようとしている。

「おもえば、礼子と暮しておりました約(およそ)一年半の間、私は時勢のうごきなど、まったく気にかからなかったもので……。それは、いろいろと耳へ入って来ることもございましたが、もう右から左へ筒ぬけというやつ。

　ま、どちらにせよ、夫婦・親子の和(なご)やかな家庭(いえ)の暮しというものが人間には、いちばんたいせつなことなのでしょうけれども、天下の移り変りというものは、同じ人間たちがかかわり合っていることながら、これは別ものなのでございますね。

　天下の政権をうばい合う。それがためには双方がちからのかぎりをつくして叩き合い、たがいに叩きつぶし合おうという……そのためにはもう、ささやかな庶民の暮しなどというものが目に入らなくなる。

　前にも申しあげましたが……人間という生きものは、つまるところ、男と女がいて、子が生ま

れる。食べてねむる場所があって、日々を送る。これだけのことなので。
その、人間ほんらいの有様（ありよう）というものが、わかっていながらわからなくなってしまう。これが政治であり戦争であるのでございましょう。そして、こうしたことを人間たちは、飽（あ）きもせずに、むかしむかしからくり返してきているのですねえ」

三

この年の五月から七月にかけて……。日本のサムライたちと外国軍艦とが戦っている。
先ず五月の末には、長州藩が、下関の海にいたフランスとオランダの軍艦へ大砲を撃ちかけた。
これは、長州藩が、
「朝廷が、いかに攘夷決行をいいわたしても、幕府は承知しておきながら、ぬらりくらりといいのがれ、知らぬ顔をしておる。かまわぬから、先ず、われわれが決行しよう」
というので、下関海峡に停泊中のアメリカ商船を砲撃したのが、手はじめとなったのである。
「けしからんことである」
と、諸外国は激怒した。
「われわれが、日本国の代表である徳川幕府と通商の条件をむすんでおるのに、このような乱暴をされたのでは、もうだまってはいられない」
そこで六月になると、アメリカとフランスの戦艦が下関の海へあらわれ、長州藩・秘蔵の蒸気船二隻を撃ち沈め主砲台を砲撃し、これを破壊してしまった。
長州藩、攘夷どころではない。

さんざんな敗北であって、いまさらに、外国列強の武力のすさまじさを知ったわけだ。
そして、七月になると……。
今度は、イギリス艦隊が、薩摩鹿児島湾へあらわれた。
（このさい、薩摩藩もこらしめてやろう!!）
というわけだ。
すでにのべた〔生麦事件〕で、薩摩藩士に殺されたイギリス人、リチャードソンについて、イギリス政府は、幕府と薩摩藩へ合計十二万五千ポンドを支払うことを要求していた。
幕府はようやく工面（くめん）して洋銀四十五万元をさし出していたが、薩摩藩のほうは、
「何を申すか!!」
せせら笑っていて、相手にもせぬ。
イギリスにとっては、まことに憎々しい薩摩藩なのである。
「来たか、よし。かくなれば毛唐どもの肝を冷やしてくれる。薩摩は長州とちがうぞ」
と、鹿児島城下の砲台に藩士たちがつめかけ、人も銃も大砲も総動員され、イギリス艦隊を待ちうけた。
密貿易の利益によってたくわえた財力で、当時の日本の大名の中では、もっとも最新式の軍備をととのえていた薩摩藩だけに、
「来るなら来い!!」
相当に、自信をもっていたのであろう。
それだけのことが、なかったとはいえない。
風雨の中を鹿児島湾へ入って来たイギリス艦隊に向って、湾内の砲台はいっせいに火ぶたを切

り、旗艦〔ユリアラス〕号が先ず大破され、艦長と副艦長は戦死。さらに三十名に近い死傷者を出した。

イギリス艦隊は〔陸戦隊〕を上陸せしめんとしたが、こうなると薩摩ザムライ得意の白兵戦には抵抗すべくもない。

鹿児島城下も、イギリスの砲撃によって焼きはらわれ、沿岸の砲台も大破されたが、イギリス側も、旗艦をはじめ六隻が大破小破をこうむり、死傷者六十三名を出した。

そして……。

ついにイギリス艦隊は、鹿児島湾から逃げ去ったのである。

「どうじゃ長州藩とは、だいぶん違げもそが」

と、薩摩ザムライたちは大得意になったが、その反面に、

(なるほど)

外国の近代装備による武力のすさまじさを痛感し、反省もしたようだ。

(いざとなると、ニッポンはすごい)

というのである。

その日本を、アメリカ、フランス、オランダ、ロシア、イギリスなどが取り巻いている。

イギリス側も、あらためて薩摩藩の底力を見せつけられたおもいがしたらしい。

だからイギリスとしては、他の諸外国に先んじて、近き将来、日本の中心勢力となるであろう薩摩藩と、

「手をむすんだほうがよいのではないか。日本では、往古から皇室の存在が時の政権とむすびついている。だから、徳川幕府よりも、むしろ、勤王派の勢力の中で、もっとも大きいちからをそ

なえているサツマへ近づいておいたほうがよろしい」

との見込みをたてたようだ。

こうして、すこしずつ、イギリスと薩摩藩が歩み寄って行くようになるのである。

杉虎之助いわく。

「イギリス艦隊が鹿児島へ攻めかけたときは、幕府も、これはうまい。頭の高い薩摩藩をこらしめてやれ……などと思っていたようでございますが、その思惑は見事にはずれてしまいましてね。それればかりか、イギリスという大国を、うまうまと勤王方の薩摩へむすびつけてしまったもので……。

ですが、そのころの薩摩藩は威張っていながらも、まだまだ幕府と足なみを合せて行く、という態度だったのでございますよ」

さて……。

虎之助が江戸を発って京都へ向ったのは、年が明けた元治元年の一月末のことであった。

二十四歳になった虎之助は、これからの自分の生きかたを、どうしようと考えるゆとりもなく、ただ一つ、池本茂兵衛と会うことのみを目ざしていただけなのである。

京へ

一

虎之助は、安楽寺へ〔永代供養〕の金として五十両をわたしてしまったので、手もちの金が、いささか、こころぼそくなった。

京都までの道中に事を欠くことはないが、

(向うへ着いてから、池本先生とうまく会えるかどうか……?)

である。

とりあえず、三条・白川の旅籠〔津国屋〕へ旅装を解くつもりでいるけれども、だからといって、

(すぐにも、先生と会えるわけではない)

茂兵衛と会うことのできる日まで、ふところがさびしくてはどうにもならぬ。

そこで虎之助は、おもいきって、金杉の家を売ろうと考えた。

この家は、池本茂兵衛が買いとってくれたも同然の家だが、礼子とのおもい出が残る家に、もはや二度と住むこともあるまい。

いや、虎之助としては、もう住みたくなかった。

折しも、伊庭八郎が、

「どうしなすったね、虎さん」

なぐさめに来てくれたものだから、

「八郎さん。この家を買いとってくれるお人はいないかねえ」

「どこへ行きなさる?」

「京へ、ね」

「なるほど。池本先生のもとへかえ?」

「さよう。礼子は、私同様に、先生にとっては、わが子のようなものだから……」

このとき虎之助は、おもいきって八郎へ、茂兵衛と礼子との関係をのべ、自分も、寺田屋騒動のときには、

「一役買いましてね」

うちあけてしまった。

これ以上、こころをゆるした伊庭八郎へ〔かくし事〕をしていることは、虎之助の性格としてむりなことであった。

また、八郎なら他言をすまい。

「よく、うちあけておくんなすった」

八郎は、軽く両手をつくかたちをしてみせて、

「私を、そこまでたのみにして下さること、かたじけない」

と、いった。

「いや、とんでもないこと。これまでにも何度か……だが、いい出せなかった。私のほうこそ、あやまらなくてはならない」
「だがねえ、虎さん」
「む？」
「向うへ行くと、お前さんの身が尚更に危うくなりましょうよ。なにしろ、いまの京は、薩摩ざむらい共の天下だそうな」
「かまいませんさ」
「え……？」
「向うが来るなら、引きうけてやる。礼子の敵討ちだ」
「なるほどねえ」
「なんとしても、今度のことは、私の口から池本先生へはなさねばならない。わかってくれましょうね、八郎さん」
「それは、さむらいとして当然のことではあるがねえ」
「ところで、この家のことだが……」
「金は、いかほど要りなさるね？」
「ま、二十両もあればと……」
「それなら、私が出そう」
「そいつはいけませんよ、八郎さん」
「お貸ししようというのだ。そのかわり、この家は私があずかる。それならいいだろう」
「そうして下さるか。ありがたい。この家は、どのように始末してくれても結構なのだ」

「いいともね」
軽く引きうけてくれた伊庭八郎は、養父・軍平にはなして、金三十両を用立ててくれた。
しかし八郎は、虎之助の家をその後も手ばなさなかったのである。
江戸を発つ二日前に、虎之助は、本所・石原の金五郎叔父をたずねた。
「そうか。おれもな、きっと、お前は池本先生のところへ行くと、考えていたよ」
山口金五郎は、一昨日から風邪をこじらせ、発熱して寝込んでいた。
「実はな……」
二人きりになったとき金五郎が、
「五日ほど前に、久しぶりで深川の百歩楼へくりこんでね。悪友と騒いだのだが……どうも年甲斐もなく、素っ裸になって大酒をくらったむくいでこの始末さ。めっきりと躰にむりがきかなくなったよ」
「それでな、虎よ」
金五郎は四十四歳の新年を迎え、髪にも白いものがまじりはじめている。
「はい？」
「ほれ、以前に、お前が百歩楼でなじみだった歌山とかいった娼妓……」
「はあ……」
久しぶりに、虎之助は歌山の顔をおもい出した。
大柄で、ぼってりした躰つきの、
「肌身はぬけるように白いが、新地にはめずらしいほどの醜女」
などとうわさをされた人の善い歌山は、今年で二十九歳になっているはずだが、

「それが、去年の夏に、身うけをされたとよ」
「そうですか……」
それときいても、いまの虎之助には何の関心もわいてこなかったのである。

二

虎之助が江戸を発つ朝は、風も絶えた、おだやかな日和であった。
文久元年の春に、京へのぼったとき、房吉夫婦と別れの酒をくみかわした高輪の七軒茶屋——その〔亀や〕という休み茶屋で虎之助を待っていたのは、伊庭八郎である。
「これは、わざわざ……」
笠をとってあいさつをする虎之助へ、
「まげもすっかりもとどおりになったねえ、虎さん」
「まあ、ね……」
さびしげに微笑し、虎之助は彼方の品川宿の方向へ視線をうつした。
三年前の、あの朝……。
虎之助は、この〔亀や〕の前を通りすぎて行くひげ男の大山格之助以下三人の薩摩侍を見かけ、礼子を救わんとして、懸命に東海道を馳せのぼったものだ。
（まるで、あのときのことが十年も前のことのようにおもわれもするし……また、昨日のことのようにもおもわれる……）
ぼんやりとしている虎之助へ、

「ま、ひとつ……」
八郎が盃をもたせ、酌をしてやった。
「ほかに、見送りはないのかね？」
「うむ。ことわったのですよ」
「そうか……こいつは、私もよけいなことをしたかな」
「いや、八郎さんには送っていただきたかった」
「私もね、虎さん。おっつけ、京へのぼるやも知れない」
「ほんとうかね？」
「将軍（だんな）のお帰りも、どうやら長引きそうなのでねえ」
将軍・家茂（いえもち）は、去年の夏に京都から帰って来たばかりだのに、またしても新年早々、海路を大坂へ向い、この月の八日に大坂城へ入った。
なんとしても、いまの日本の政局が京都を中心にしてうごいている以上、徳川将軍が江戸におさまっているわけにはいかぬ。
天皇・朝廷との間を緊密にする一方、将軍家の威風を天下に誇示しなくてはならない。
京都には、勤王革命派の志士や浪士たちが、さまざまなかたちで充満しており、危険この上もないのだが、それを恐れていては何もできない。
そのためにこそ幕府は、守護職をおき、新選組のような浪士隊にも活動をさせ、薩摩藩とも同盟をむすんだ。
今度の将軍上洛は、海路のことでもあるし、伊庭父子は御供を免ぜられている。
だが、将軍護衛の必要あるときは、他の奥詰要員と共に、急遽（きゅうきょ）、京へ駈け向わねばならぬ。

「では、八郎さん。京で会えそうだな」
「うむ。たのしみにしている」
伊庭八郎は、このところ持病が軽快らしい。血色もよく、いくらか肥えてきたように思えた。
「私の居処は、例の三条・白川、津国屋できいていただけばわかる」
「うけたまわったよ」
「では八郎さん。大変に厄介をかけました。これで……」
「お元気でねえ」
「あんたも、躰に気をつけて下さいよ」
「ありがとう」
汐の香が、街道にただよっていた。
往来の人びとをぬって、杉虎之助が品川の方へ行くのを、伊庭八郎は、いつまでも見送っていた。

そして八郎は、
「まだ、虎さんには会えそうな気がする……」
つぶやいて、にっこりと笑った。
八郎も自分の健康に、このごろはすこし自信をもってきているようだったし、京へのぼる虎之助の身に、危急の予感をおぼえなかったものであろうか。
虎之助が、京都の津国屋へ到着したころには、京の町が、厳冬の衣をようやくにぬぎはじめ、どことなく春の気配が東山・西山の山なみからたちのぼってくるようにおもえた。
「これは、これは……」

よろこんで、虎之助を津国屋夫婦は迎えてくれた。
「つい、十日ほど前でござりました。ふいに池本先生がおみえになり、三日ほど……」
「え。ここにお泊りだったのか?」
「はい」
「しまった。ああ、なんということを……おれはすることなすことがこれだ。去年のうちに、こちらへ来ておれば、お目にかかれたものを……」
「そのときも池本先生は、さもさも、うれしげに……」
池本茂兵衛は津国屋長太郎に、
「いまごろ、虎之助と礼子は仲むつまじく暮していような。そのことを想うと、われ知らず、幸福なおもいが胸のうちへこみあげてくる。このごろはな、亭主。まったく、あの若い二人が、実の子たちのようにおもえてきたよ」
といったそうである。
虎之助は津国屋の主人にも礼子の死を告げなかった。

三

池本茂兵衛は、虎之助と礼子が江戸へ去って以来、一年半の間に、五度ほど津国屋へあらわれ、長いときは半月も泊っていたということだ。
これは、いまの茂兵衛が遠国へ出かけての隠密活動をしていないことを意味する。
虎之助は、

(先生も、京を中心にして御役目にはたらいているらしい)
と感じた。
(それならば、また近いうちに、先生は津国屋へあらわれよう。おれもここをうごかぬようにしなくては……)
虎之助にも希望がわいてきた。
礼子の死を報告し、深くわびることが、もちろんたいせつなことではあるけれども、虎之助としては、茂兵衛の口から、今後の自分のすすむべき道を指ししめしてもらいたいのである。
(今度こそ！)
と、虎之助は決意していた。
なんとしても、
(先生と共に、はたらきたい！)
このことであった。
それに……。
別の意味で虎之助は、幕府のために、
(自分なりの、はたらきをしたい)
と、おもいはじめている。
これは、礼子を殺した薩摩侍たちへの敵意が、そうさせたものといってよい。
薩摩藩は現在、幕府側についているのだから、この虎之助の考え方は矛盾している。
「さ、ですからそこが、おかしいのですね」
と、虎之助自身も当時をかえりみて、

「幕府のためにつくしてきた礼子を殺害した薩摩侍たちが、どうしても幕府の真の味方ではない、あるはずがないと、そのときの私はおもいはじめていたようでございますよ」
この虎之助の直感は、のちに適中することになる。
「理屈も何もない。ただ、そうおもえてならない。人間なぞというものは、そうしたものなのでしょうなあ。おのれが、もっともたいせつなものを、実に卑怯なやりくちで奪い取られた。取り返せるものではない仕方でうばいとられた……こうしたときには、男でも、血迷いますよ。
私の場合は、そのときの勘ばたらきが見事に当りましたが、あぶないことですねえ。時と場合によって、ひょんなことから薩摩藩は幕府の敵にまわらなかったやも知れない。なにしろ、ちゃんとした根拠があっての考えではなかったのですから……。
ま、一つには、礼子を討った薩摩侍を見つけ出して、こやつを討ちとってくれようというおもいが、われ知らず胸の底に在ったともいえましょう」
こういっている。
さて……。
虎之助は、十余日を津国屋ですごしたが、茂兵衛はあらわれない。
(お秀は、いまも、あの小松谷の庵室に住んでいるのだろうか？)
ふっと、おもった。
薩摩侍の一人で、お秀の使者となり、江戸の虎之助宅へたずねて来た中村半次郎という若者は、いまも、お秀と交渉をもっているのだろうか……。
もし、そうだとしたら、お秀のまわりに眼をつけていれば、中村半次郎を見出すこともできよう。半次郎は、

（おれの家が薩摩侍どもに襲われ、礼子が斬られたことを知っているだろうか……？）

薩摩侍も二人、虎之助に斬られ、その死体はお上へとどけ出ることもせず、安楽寺の墓地へ埋めこんでしまってある。

逃げて行った他のものたちは、薩摩屋敷へ帰って、そのことをどのように処理したのだろう。

こちらへ来るまでは、虎之助も日夜じゅうぶんに気をくばっていたが、その後、怪しいものが江戸の家のまわりに出没することもなかったようだ。

（ともかく、あの中村半次郎に会ってみよう。あぶないことだが、何か手がかりがつかめるかも知れぬ）

そこで或日の午後……。

杉虎之助は編笠に顔をかくし、津国屋を出て、小松谷へ向った。

どんよりと曇った、あたたかい日であった。

妙見堂の木立の下の坂道を右手へ切れこみ、この前、お秀を見た松林の中へ入って、彼方の庵室をながめやったとき、

（あ……まさに……）

虎之助は、す早く屈みこんだ。

そのとき丁度、庵室の障子が開き、もつれ合うようにして庭先へ下りたのは、お秀の〔法秀尼〕と中村半次郎だったのである。

再会

一

人気ない小松谷の庵室である。

庭先へあらわれた中村半次郎とお秀の〔法秀〕は、たがいに何やらささやきかわしては口を吸い合ったり、耳を嚙み合ったりしている。

（いやどうも、大へんなものだな……）

松林の中に屈みこんでこれをながめている杉虎之助も、あまりにも天真爛漫な両人の交歓に、ただもう瞠目するばかりであった。

お秀などは、しどけなく躰にまとった法衣のえりもともゆるやかにひろげられたままで、丸まるとした左肩の一部さえのぞいて見えるほどなのだ。

「では、これで……」

と、中村半次郎がようやくお秀から身をはなし、

「名残りな、つきもはんが、そろそろ帰らぬと……」

歯の浮くようなことを、平然という。

「あ……もう当分は、来んといてほし」
お秀が、なんともいえぬみだらな笑顔を見せ、
「半どのに会うていたら、身がもたぬ」
「ふ、ふふ……そげなこつ、申されると、帰れなくなりもす」
「さ、帰りなされ。もう、たくさんじゃ」
と、さいげんもない。
ようやくに、半次郎は胸を反らせ、たくましい両肩をふりふり帰って行った。
木蔭に消えるまで、何度もふり返っては手を振って見せる中村半次郎を苦笑まじりに見送っていたお秀が、大きなまあくびを一つもらすや、腰おもたげな足どりも物倦げに庵室へ入った。
(さて……どうするか?)
半次郎のあとを追って行き、市中へ出てから、偶然に出合ったかたちで声をかけてみようか、とも考えたが、
(もしも、金杉の家が襲われたことを中村半次郎が知っているとなれば……うかつに声はかけられぬ)
用心をするにこしたことはない、と思い直した虎之助が、それでも松林の中でかなりの時をすごしてから、お秀の庵室へ近づいて行った。
庭へまわり、先刻、お秀と半次郎があらわれた縁先へ来て、
「もし……」
声をかけてみると、ちょっと間をおいてから、
「だれじゃ」

なんともいかめしいお秀の声が返って来た。
「杉虎之助」
「ええっ……」
おどろきの叫びがきこえ、あわてて部屋の中でうごきまわる気配がした。
「障子を開けてもいいかね?」
「あ……あの、ちょっと、お待ちを……」
やがて……。
障子が開き、お秀が顔を見せた。
すっかり肥って、あごがくくれた顔が上気している。
「なんとまあ……おもいもかけぬ……」
「そのせつは、わざわざ……たしかに、金はうけとりましたよ」
「さ、どうぞ、おあがりを……」
「かまわないかね」
「なぜでございますか?」
と、お秀が妙に切口上でいったものである。
虎之助が、くすりと笑った。
「あれ……」
お秀が横目に虎之助をにらんで、
「杉さま……」
「なんです?」

「ごらんなさいましたか？」
「なにを？」
「あの男を……」
「どの男を？」
「中村半次郎を……」
「いや、なにも見ない。私はいま、ここへ着いたばかりさ」
部屋の中に、うすく酒の香がただよっている。
「ま、お腰の刀は……」
と、お秀がうれしげに、すわりかけた虎之助の腰へ両手をさしのべるようにした。
「いかにも、お前さんにちょうだいした兼房だよ」
濃州・関の住人・兼房作一尺一寸余の脇差は、お秀が金杉の家を去ったとき、虎之助へ贈ったものである。
「杉さま。うれしゅうございます」
先刻、中村半次郎とふざけ散らしていたときのお秀とは別人のようなはにかみを見せ、肥体をよじらせ、すこしうつむいた上眼づかいに虎之助を見やるところなぞ、とてもとても三十女のする仕ぐさではない。
さらに、尼僧の風体をした女には、あまりにも似つかわしくない。
いそいそと、茶の仕度にかかるお秀へ、
「どうせいただくなら、冷たい酒をもらおうか」
「あれ……」

と、またしてもお秀は、顔を赤らめて恥じらうのであった。

二

「京へは、また何の御用で？」
とか、
「半どのからききました。金杉のお屋敷には、若い女の方のにおいがただよっていたとか……」
なぞと、お秀がいい出すところをみると、どうやらお秀は、金杉の家の異変を知っていないらしい。
ということは……。
(半次郎も、あのことを知らぬと考えてよいのだろうか……それとも、知っていながら、お秀に洩らしていないのだろうか……？)
酒の仕度ができた。
香の物と、梅干がさかなである。
「お前さんも、やったらどうだね？」
「かまいませぬか」
「冷酒をあおる尼さんを、はじめて見るがね」
「ま、いや……」
白衣の袖で顔をおおい、お秀がはにかむ。
こうしたお秀の仕ぐさを、どう、うけとめたらよいのか……。

（女というものは、どうも、わからぬ）

であった。

「私が来る前に、中村さんが来ていたようだね」

「ま、いやな……」

「なにもいやなことはない。お前さんの色男だ」

「あれ、もう……あのような手紙を、なぜ私は、半次郎に持たせてやったのでございましょう」

中村半次郎は、いまもお秀に、

「杉虎之助どんな、いま一度、会うてみたいと思もす」

といい、

「あげなよか男を、お前さァが放っておくはずなごわはん」

しきりに、嫉妬して、虎之助との関係を根掘り葉掘りきき出そうとするひたむきな態が、

「おかしゅうて、おかしゅうて……」

語りつつ、法秀尼お秀が今度は笑いころげるのである。

今日は法秀尼、だいぶんに昂奮している。

（これはやはり、あのことを中村半次郎は知らぬらしい）

ついに虎之助は、そうおもいこむようになってきた。

京都へ出て来たことを、虎之助はお秀に、こういっておいた。

「こちらにいた親類のものが亡くなったので、急に上洛した。ついでに、ゆっくりと京見物をしてから、江戸へもどるつもりでね」

そして、

「いや、おもわぬ邪魔をしてしまった」

腰を浮かした虎之助へ、

「あれ、もう……」

「間もなく、日も暮れますよ」

「あれ、これから夕餉の仕度して、ゆるりと酌みかわしましょうと存じましたのに……」

「とんでもない。そんなところを、お前さんの半どのに見られたら、私の首が飛んでしまうよ。

あは、は、は……」

「ああ、もう……」

そのとき、お秀が、

こらえかねたように虎之助へ抱きついてきた。

「どうした？」

「ああ、もう……ゆ、ゆるして下さいませ。杉さまと、こうして、お目にかかれることを知っていたなら、中村半次郎ごときと、あのようなことをいたすものではございませんでしたのに……」

すすり泣きつつ、ふとやかな双腕に恐ろしいほどのちからをこめて虎之助を掻き抱き、あまりにも見事な量感をそなえた躰を狂わしげにもみたて、

「ゆるして……ゆるして下さいまし」

「ゆるすもなにも……私にわびることはない」

「いや、いやいや、いや……」

「お秀……いや法秀尼どの」

「いや、いや……」

「私は、三条白川の旅籠・津国屋にいる。今度は、そっちからたずねておいで」
するりと、お秀の腕をのがれて大刀をつかむや、早くも虎之助は庭へ下りていた。
「杉さま……」
「水でもおかぶりよ」
にっこりと笑って見せ、たちまちに虎之助が去ったあとで、障子につかまってこれを見送っていたお秀が、けもののごときうめき声を発し、その場に打ち倒れるや、両手で畳をたたいて泣きむせんだ。
翌々日の昼下りに……。
「ちょっと、その、暇なできもしたので……」
と、あらわれた中村半次郎へ、
「お帰り!!」
切りつけるように、お秀が、
「お帰りいうたら、お帰り!!」
「法秀さァ。なんでまた、そげなこつ……?」
「このごろは、なれなれしくつけあがり、ゆるさぬ」
「は……」
「お帰り。今日は、お帰り。さもなくば、二度とふたたび会わぬ」
きめつけられた中村半次郎が、巨躰をすくめ、すごすごと帰ってゆくまでには、さほどの時間は要らなかったようだ。

三

虎之助は、お秀に「京見物を……」といったけれども、それは京都の風物を愛でることとは別の意味で、
(なるほど、すさまじい世の中になったものだ)
と、虎之助はこちらへ来て見て、江戸にいては、
(はかり知れぬ……)
動乱の世相を見ることを得たのであった。
いまや、政局は京都を中心にうごいている。
先に、大坂城へ入った将軍・徳川家茂も京へ来て、孝明天皇と対面をし、協力をちかい合ったそうな。
天皇は依然、若き将軍に好意を抱いておられるらしい。
だが、なんといっても天皇は、徹底的に異国の人を、文明を、嫌悪しておられる。
このため、外国列強の日本への介入を、一時も早く押しとどめるようにとの、幕府への要求を撤回なされぬのだ。
しかし……。
去年の初夏のころから、孝明天皇の胸の内も、以前のように強固な攘夷の思想が、いくぶんは揺らぎはじめてきた。
これには、理由がある。

去年の初夏まで、朝廷の〔国事参政〕に任じていた姉小路少将公知という公家がいた。

姉小路卿は、長州藩を先頭に押したてた〔勤王過激派〕と、かたく手をむすび、

「神州を異国に侵されてはならぬ。夷狄をわが国から追いはらい、一時も早く、天皇を中心とした新政権を打ちたてるべきである」

その一事に、二十五歳の情熱をかたむけ、朝廷と公家たちの、ともすれば幕府へかたむきがちな言動を、

〔倒幕攘夷〕

の一点に結集せしめんとして活動をつづけていたのであった。

その姉小路公知が、である。

去年の春ごろから、俄然、心境に変化をきたした。

その、きっかけとなったものは……。

幕臣・勝安房守（海舟）の案内によって、大坂港内に停泊中の、幕府所有の洋式軍艦を見学したことによって、であったという。

勝安房守は、

「この軍艦は、西洋から幕府が買い入れた最新式のものでございます。ごらんのごとく、この軍艦ひとつを取ってみても、西洋諸国の科学文明が、いかに恐るべきものであるか、よくおわかりのことと存じます。

かような文明と、かような軍備をもつ西洋諸国を、ただ単に、追いはらえと申されても、相手がこちらの申すことをきき入れぬとなれば、事態はいかがに相なりましょうや。

われらがいかに刀槍をつかんで手向かったとて、とうてい歯の立つ相手ではございませぬ」

噛んでふくめるように説いてきかせた。

姉小路卿は年齢が若いだけに、勝のいうことを素直にききとり、

「なるほど……たしかにこれは、自分の不明であった」

と、いった。

外国の武器ひとつ、軍艦ひとつ見ずに、声をからして、

「外国を追い退けよ!!」

と叫んでいた自分の不明に、姉小路公知は、この軍艦見学の一日で気づいた。

姉小路は京都へもどるや、すぐさま孝明天皇へ、このことを奏上した。

以前の自分とおなじに、何も知らず、

〔尊王攘夷〕

を叫んでいる人びとにくらべると、勝安房守のような人物が、

（幕府にもいたのか……）

と、姉小路は愕然としたものである。

（勝のごときすぐれた人物がいる幕府と争うて何になる）

なのである。

（いまは幕府とちからを合せ、国内の争いを取りしずめて、一日も早く、外国の文明に追いつかねばならぬ）

と、おもった。

孝明天皇も、姉小路からつぶさに事情をききとられ、あらためて西洋諸国の文明に眼をみはられたようである。

外国ぎらいが、すぐにあらたまったわけではないけれども、天皇も、
（これは、よくよく考え直さねばならぬ）
と、おもいはじめられたようだ。
この後……。
姉小路公知は、先に幕府との協力に活躍したため、勤王派からしりぞけられ、洛北の岩倉村に謹慎をしている前中将・岩倉具視や、京都守護職の松平容保をひそかに訪問し、いろいろと今後のことを相談しはじめた。
こうなると、過激派がだまっていない。
「どうも姉小路卿は、おかしい」
「幕府の口車にのせられ、われらを裏切ったのではないか」
「姉小路を敵にまわしたなら、大変なことになるぞ」
勤王の浪士や志士たちが、いろめきたった……。
そして去年、五月二十日の夜ふけに……。
姉小路公知は、何者とも知れぬものの刃にかかって暗殺されたのだ。

紛乱の都

一

その夜。
姉小路公知は、御所での会議を終えてのち、公卿門から退出をした。
月のない夜で、暗かった。
三名の家来につきそわれた姉小路が、徒歩で、朔平門のあたりへさしかかった。
突如、三人の覆面武士が闇の幕を割って飛び出し、姉小路へ襲いかかったのはこのときである。
姉小路の屋敷は、そこから程近いところにあった。
だが、逃げきれなかった。
曲者たちの襲撃は、実に手なれたものであって、
「あっ……」
という間に、姉小路へ致命的な重傷を負わせ、逃走してしまった。
家来の中条某にたすけられ、ようやくに、わが屋敷へたどりついた瀕死の姉小路公知は、間もなく息をひきとったのである。

これは……。

勤王過激派の活動について、批判的になりはじめた姉小路が、

「もはや、邪魔になるばかり」

となったので、過激派の手によって暗殺がおこなわれた、と見ることもできる。

だが、事態はおもいがけぬ方向へひろがっていった。

姉小路卿を暗殺したのは、なんと薩摩藩の田中新兵衛だということになった。

それは、暗殺現場に、田中新兵衛の愛刀・和泉守（いずみのかみ）忠重が落ちてい、その柄（つか）の一部には新兵衛の名がしるされてあった。

ために新兵衛は、守護職の手によって捕えられたけれども、

(これは、どうもおかしい……?)

こころある人びとは、みなくびをかしげたものだ。

第一に、現在は幕府側と歩調をあわせ、勤王派の長州藩の勢力を京都から追いはらったほどの薩摩が、幕府側へ歩みよって来た姉小路を、

「暗殺する理由がないではないか……」

なのである。

第二に、田中新兵衛は薩摩でもそれと知られた剣客であって、それほどの男が人を暗殺したばかりの自分の刀を現場へこれ見よがしに残しておくものだろうか……。

田中新兵衛は、捕えられて町奉行所へ連行されるや、

「おいどんな、下手人（げしゅにん）ではごわはん。おいどんの刀な、磨（と）ぎに出してあったのでごわす。十日も前から別の刀差しちょる」

と叫んだ。

そこで、尚も奉行所がきびしく追及しようとすると、新兵衛は、

「ええ、めんどうな……」

舌うちをもらしたかとみると、小刀を引きぬいて腹へ突き立て、役人どもが飛びかかって押える間もなく、一文字に引きまわした小刀で、わが頸動脈（けいどうみゃく）をはね切り、自殺をとげてしまったのである。

自分が犯人でないのなら、じゅうぶんに取り調べをうけて無実のあかしをたてればよさそうなものだが、新兵衛はあっさりと、みずからのいのちを断ち切ってしまった。

これでは却って、犯行をみとめたかたちになってしまう。

薩摩藩でも狼狽したが、むろん、新兵衛に姉小路の暗殺を命じたわけではない。

去年の、この事件について、津国屋へ杉虎之助をたずねてきたお秀の〔法秀尼〕が、こうもらしている。

「中村半次郎が申しますには、田中新兵衛どのが下手人であるはずがない、とのことでございますよ」

それは、虎之助がお秀をたずねてから七日ほどのちのことだ。

お秀は尼僧姿に似つかわしい緊張をたたえた、しずやかな物腰で、

「こちらに、江戸の杉虎之助様がおいででござりましょうか?」

と、津国屋へあらわれたのであった。

先日の狂態など忘れきったかのように、お秀はつつましやかに、礼儀正しく、虎之助と一刻(二時間)ほど語り合った。

「これほどに京が物騒な都になっていようとは……こちらへ来て、はじめてわかった。一昨年、こちらに私がいたときとは、まるで様子がちがってきた」

虎之助は、お秀にそういった。

小さな暗殺事件などは、すこしもめずらしくない。

潜入し、暗躍をつづけている志士や浪士たちと、幕府側の役人や、新選組などとの斬り合いが諸方でおこなわれる。

灯が入るころになると、町家でも表戸をおろし、じっと家の中で息をつめている。

そんなことから、去年の姉小路暗殺のことへ話題がうつっていったのである。

お秀は、

「半どのは、姉小路さまが殺害された当日に、田中新兵衛どのと会うたそうでございますよ」

と、いった。

二

そのとき、中村半次郎は三条大橋の東詰で、田中新兵衛と出合った。

七ツ（午後四時）をまわった時刻であったという。

立ちばなしをするうちに半次郎が、新兵衛の腰の大刀がいつものとちがうのに気づき、

「今日は、刀なちげもすな」

いうと新兵衛が、ぱっとつばを吐き捨て、にがにがしげに、

「だれにもいうてもろちゃ困るが……実は昨夜、新地の茶屋で酔いつぶれていた隙に、盗まれた」

「だれに、でごわす？」

「そいがわかっちょるなら、苦労はせぬわい」

愛刀でもあるし、自分ほどの剣士が刀を盗まれたのに気がつかなかった口惜しさとで、この日も新兵衛は朝から酒をあおりつづけていたらしく、足もとがふらふらしていた。

とても同じ夜に、人を暗殺するような様子ではなかった。

捕えられた新兵衛が、

「刀を磨ぎに出した」

と、申したてたのは、武士の表道具を盗まれたことが、

（はずかしかったものか……）

虎之助は、そう解釈した。

（これは、長州藩の陰謀ではないか……？）

虎之助ばかりではなく、幕府側も薩摩藩も、

（これは、姉小路卿暗殺の罪を薩摩側へなすりつけ、その評判を落さしめ、同時に、朝廷と幕府との間を離反させようと、たくらまれたものにちがいない）

と、おもっている。

だが、長州藩も負けてはいない。

「薩摩の勤王の正体が、あれで、はっきりとわかった」

「新兵衛が腹切ったのは、おのれの罪をみとめたからではないか！」

猛然と、弾劾の叫びをあげた。

孝明天皇は、

「長州の仕わざにちがいない」
と、おもわれ、寵臣（ちょうしん）の姉小路の生命をうばった暴力に激怒しておられる。
けれども……。
別の犯人がついに捕えられず、田中新兵衛が自殺をとげてしまった以上、薩摩藩も責任をとらねばならぬ。
長州藩とひそかに手をむすび、幕府と薩摩藩を憎む少壮公卿（くげ）たちが結束し、
「薩摩をしりぞけよ！」
と叫び出し、このため薩摩藩は、それまでまかせられていた御所の乾門（いぬいもん）の警備を、
「免（めん）ずる」
と、申しわたされた。
これからは、みだりに天皇おわす御所の内へ、
「入って来てはならぬ！」
ということにもなるわけであった。
もしも、姉小路暗殺が長州側の陰謀であったとすれば、その目的を達したことになる。
「なれど……」
と、虎之助はふかいためいきをついて、
「このように、激しい動乱の世になってくると……なにごとにつけ、真相をつかむことがむずかしくもなろうし、つかめなくなってくるのではないかね、お秀さん……」
「ほんに……」
「今日は、ばかにおとなしいのだね」

「……」
お秀が、ちらっと虎之助をにらみ、無表情な声で、
「さぞ、あつかましい女と、おもわれましょう」
「いや、別に……」
「杉さまへ申しあげます」
「あらたまったね」
「はい」
「なんだえ？」
「中村半次郎を……」
いいさして、お秀が尚更に強張（こわば）った顔つきになり、
「あのときより、一度も庵の内へ入れてはおりませぬ」
実に、お秀は、この帰りぎわの一言を虎之助へいいたいがために、津国屋をおとずれて来たらしい。
この日の対談で……。
虎之助は、おぼろげながら、お秀の過去を知ることができた。
お秀は、ほんのわずかではあったが、
「……私の亡き夫は、稲葉家につかえしものにて……」
とか、
「長らく、京の屋敷に詰めおりまして……」
とか、ことばの端々（はしはし）にもらした。

稲葉家といえば、京都から南へ四里。淀藩十万二千石の大名である。

子が生まれぬままに、結婚後三年で夫が病歿してしまい、お秀は婚家の跡目を夫の実弟にゆずりわたし、

「このように、気ままな暮しをはじめるようになりました」

と、お秀はいった。

それにしても、武家に育った女ならば、お秀のすることなすことが奔放をきわめている。

尼となって情人とたわむれることなどは、

（まだしもだが……）

と、虎之助は、はじめてお秀に出合ったときのありさまを、いまさらに想起せざるを得ない。

あのときのお秀は、町家の女房のような風体がぴたりと身につき、中ノ郷の河岸道で無頼どもと喧嘩をはじめていた。しかも、近くの不動堂の博奕場のもつれからであった。

（あの女の、生得のものなのか……）

杉虎之助は、お秀が帰ったあとも、しばらくはぼんやりとして、部屋の中に淡く残るお秀の肌の香に、こころをとられていたようである。

三

伊庭八郎が、

「虎さん。元気かえ？」

ふらりと津国屋へ顔を見せたのは、それから八日目のことであった。

「や、八郎さん。とうとう来なすったね」

「急のお召しでねえ」

「さ、あがって下さいよ」

八郎たち〔奥詰〕の士は、先に上洛している将軍・家茂を警護するため、急遽、上洛したのであった。

八郎はいま、二条城・御組屋敷にいる。

二条城は、京都における徳川幕府の〔城〕だ。

ここに将軍がいるときは御組屋敷にとどまるけれども、将軍大坂へおもむくときは、これにしたがって大坂城の組屋敷へ入ることになる。

「どうもね、私どもがよばれたのも、あまりに京が物騒なものだから……と、いうことらしい」

「そりゃあ八郎さん。そのとおりだ」

「なさけねえことだが、虎さん。先に御上洛あそばされた将軍は、軍艦で大坂へ御着きになった。いうまでもねえが陸をやって来るよりは船で来たほうが日数もかからぬし、行列の費用もかからぬというやつさ」

「なるほど」

「つまりはその、威儀を正し、堂々たる将軍の行列をつくって上洛なさるだけの金が、いまの幕府には無いということなのだ」

「ふうむ……」

きいて虎之助は、

「そうか。そういうことだったのか……」

おどろいたものだ。

それほど、幕府の財政が詰まってきているとは考えてもいなかったからである。

「今日は、ゆっくりとしていられない。いずれそのうち」

八郎は、茶を一杯のんだきりで、すぐに腰をうかせた。

「なんだ、つまらない。久しぶりで腰がぬけるほどに飲もうとおもったのに……」

「なあに、そのうちにゆっくりと来るよ」

江戸にいるときとちがい、伊庭八郎も好き自由な時間が、なかなかに持てないとみえる。

「この津国屋にいるかぎり、虎さんの身は安心だ。父がこちらの役向きへはなしを通しておいてくれたからね」

「まことにすまぬ。御父上もこちらへ……？」

「いや、今度は来ていない。ちょっと病気でね」

「そりゃあ、いけない」

「なあに、いのちにかかわるほどのものじゃあねえから……ま、御放念下さい」

いって八郎が、情のふかい眼ざしで凝と虎之助を見つめ、

「まだまだむりのようだねえ、虎さん」

「え……？」

「御妻女のことは、なかなかに忘れきれまい。むりもないことだが……」

「ふ、ふふ……そんなに、なさけない顔をしていますか？」

「なさけない、といっているわけじゃあねえ。むりもない顔をしているといったのさ」

「こいつはいい。あは、はは……」

虎之助は笑って八郎を送り出したが、まさに八郎が指摘したとおり、一夜として、礼子のことをおもわずにねむったことはない。

それに、礼子の死を池本茂兵衛へ告げるための上洛なのだから、茂兵衛のことをおもえば、必然、礼子のことがおもい浮ぶのだ。

あのような死ざまをさせてしまったことが、くやしくてたまらない。年齢は若くとも何事にも執着をもたず、おもいきりのよい杉虎之助であったが、礼子の死に対しては、

「われながら、なさけないほどに……」

あきらめきれなかったそうな。

八郎も、それとなく池本茂兵衛のことを、その所在をさぐってくれているらしいが、なにぶん公儀隠密のことだから、

「手がかりをつかむのは、まことにもってむずかしいことだよ、虎さん」

と、八郎はいっていた。

八郎と会った翌日。

虎之助は、はっとおもい立ち、大坂へ出かけた。

というのは、寺田屋騒動の折、礼子や自分と共に隠密活動をしていた山田慎三郎が、大坂の野田に住んでいたことをおもい出したからである。

公儀隠密の山田は、野田の家に住み暮しつつ、甘酒の屋台をひいて大坂の町に出没していたものだ。

野田の家に、山田はいなかった。

近辺の人びとによると、

「去年の暮に、甘酒屋もやめ、どこかへ行ってしまった」

とのことであった。

虎之助は、その夜。

礼子が女中として住みこみ、自分も旅僧に化けて泊ったことがある中ノ島の旅籠〔魚屋太平〕方へ泊ってみることにした。

金三十両

一

杉虎之助が、中ノ島の北面から玉江橋をわたり、魚屋の前へ立ったとき、すでに夕闇は濃かった。

気が遠くなるような、なまあたたかい春の暮れなのである。

旅籠〔魚屋太平〕方の奉公人たちは、すっかり姿が変ってしまった虎之助に気づかぬようであった。

この前、ここに泊ったときは、女中に化けて住みこんでいた礼子が虎之助につききりであった故もある。

虎之助が通された二階の部屋は、前のときの河岸道に面した小部屋のとなりの八畳間だ。

虎之助のほかに、泊り客もあまりいないようである。

となりの小部屋にも、客は入っていない。

夜ふけてから……。

虎之助は寝床から起き出し、境の襖を開け、となりの部屋へ入ってみた。

そのとき、
(なぜに、おれは、この旅籠へ泊ろうとしたのか……)
が、はっきりとわかるような気がした。
(この部屋で、おれは、はじめて礼子の肌身を抱いたのだ……)
であった。
まだ、虎之助には礼子の死が実感としてうけとめられていない。
あの、若い女ちからがみなぎりわたっていた礼子の肉体が、いまは僅かな骨と化して、金杉・安楽寺の墓の下の土に埋めこまれてしまっていることが、はっきりと自覚できない。
いつであったか、池本茂兵衛が、
「人の生死は、仮の姿なのだよ」
と、いったことを虎之助はおぼえているが、まことに、
(そのとおりだ……)
と、おもった。
小部屋の闇の中にすわりこみ、いつまでも時をすごしているうちに、
「……なにとはなしに、礼子をうしなった悲しみが、うすらいでゆくようにおもわれてきました」
のちに虎之助は、そう語っている。
「人の生死は、仮の姿、か……」
声に出して、つぶやいてみた。
つまり、

「私が、この世に生きてあるうちは、礼子も私の胸のうちに生きているのだ……そうおもいました。私が死んだときに礼子も死ぬのだ、とね」
であって、
「知人の死ぬということは、喪が深くなるにつれ、年ごとに、こちらの胸の中へ、その人のおもかげというものがつよく根を下ろし、こちらが、この世に別れを告げるまで生きつづけている。これはね、たしかにそうだということが年齢をとってくるにつれ、いよいよ、はっきりしてまいりましたよ。
このごろの私はね、あなた。
知人が亡くなっても、その葬式へも出かけませんので。
凝と、この私の胸の内へ、その亡くなった人のおもかげをたたみこむ。それだけでもう、私にはじゅうぶんなのでございますよ。
いえもう、これも何です。老人のわがまま勝手というやつなので、あまり、ほめたことじゃあございませんがね」
と、五十をこえてからの虎之助の述懐は右のごとくであるが、当時は虎之助も、さとりきったようにおもうかと見れば、またも礼子のなまなましい声や肌身をうしなった口惜しさ、わが手から礼子をもぎとっていったやつどもへの激怒に、夜もねむられぬことがたびたびであったらしい。
だが魚屋での一夜は、久しぶりで、ぐっすりとねむれた。
めずらしく、礼子の夢も、池本茂兵衛の夢も見なかった。
翌朝、目ざめたときには四ツ(午前十時)に近かった。
女中が来て、何度も起したのだけれども、虎之助が「かまわぬ、かまわぬ」と寝床の中でいう

ものだから、いままで寝かせておいた、という。
「そんなことをいったかね？」
「はい」
「おぼえていないな」
熱い茶をいれてくれて、女中がいったん階下へ去った。
そのとき、
河岸道のあたりで、
「ええ、煮豆ぇ。にしん、昆布巻ぃ」
煮豆やの売り声がきこえたものである。
虎之助は、はっとした。
この煮豆やの売り声を、
「甘酒ぇ。飴湯ぅ……」
に変えれば、公儀隠密・山田慎三郎その人の声になる。
（山田さんではないか……？）
となりの小部屋へ走り、窓を開けて、下の河岸道を見ると、まさに、山田が煮豆屋になって通りすぎようとしている。
「おい、煮豆屋」
声をかけると、こっちをふり仰いだ山田慎三郎が、ぽかんと口をあけた。
「うまそうだな」
「へ、へい、へい……」

たがいに見かわす眼と眼。それで二人の間はたちまちに通じ合った。
笠をかぶった山田は、荷台をかつぎ、筒袖の半天に股引。素足にわらじばきの姿の背を見せ、玉江橋を北へわたって行く。
虎之助は部屋へもどって出立の仕度にかかりながら、あらわれた女中に、
「飯はいらぬよ」
と、いった。

二

小半刻のちに……。
虎之助と山田は、天満天神宮の境内で、あらためて顔を合せた。
ゆっくりと足をはこび、しかも煮豆を売りながらここまで来た山田の後から、虎之助はついて来たのである。
天満天神は、かの菅原道真をまつり、毎年夏の〔天満祭〕は、大坂神事の随一と称され、神輿を乗せた諸舟がいっせいに大川へくり出し、松島へ渡御する景観のすばらしさは、
「神田祭どころのさわぎじゃあありませんよ」
いつか、山田もいっていたものだ。
鳥居筋の通りから宏大な境内へ入ると、正面が本社で、境内は土塀と石垣によってかこまれ、石垣の上には梅、松、桜などが植えこまれ、その桜がいまや満開であった。
空は、どんよりと曇っていたけれども、参詣の人びとが境内にたちならぶ茶屋へ吸いこまれる

ように入って行く。
「どうです、山田さん。久しぶりに一杯やりましょう」
　虎之助が茶屋へさそうと、山田はかぶりをふって、石垣の下へ荷台をおろした。
「今度は、手のこんだ仕事ですねえ」
「杉さん、好きでしていることではありませんよ」
「これは失礼をした」
　前の荷台の上部に小七輪（かんてき）を置き手鍋をかけ、これへ乾鯡（ほしにしん）の切片を巻きこんだ昆布巻を入れてあたため、煮豆といっしょに売っている山田慎三郎であった。
「おどろきましたよ、杉さん」
「実は昨日、野田へ行ってみたのですがね」
「あそこは、去年の暮に引きはらってね」
「そうですってね」
「ゆっくりと、こうしてはいられません」
と、今日の山田はすこぶる緊張の態（てい）だ。
それでも山田は、小皿を出して昆布巻をとり、これを虎之助へ、
「いかがです、杉さん」
「ちょうだいしましょう……や、こいつはうまい」
「なんでまた、こっちへ？」
「ね、山田さん。池本先生がどこにおいでか、御存知ではありませんか？」
しゃがみこんで笠をかたむけ、煙管（きせる）に火をうつした山田のこたえはなかった。

「いえませんか、山田さん」
「いえませんねえ」
「強いてとは申せぬが……」
「私や池本先生の御役目のことを考えてみて下さい。いまはね、杉さん。大変なさわぎなのだ。
私だって、池本先生がどこにいるのか、はっきりとしたことはわからないのですよ」
「なるほど……」
「京や大坂（こっち）においでではない。これだけを申しあげておこう」
「ふむ……」
「何か、急用ですか？」
「山田さん。実は……実は、礼子が亡くなりましてね」
「えっ……」
これには、山田もおどろいた。
「ほ、本当ですか？」
「殺されましたよ」
「なんですと……」
「薩摩のやつどもに、ね」
「薩摩に……」
うめくがごとく山田慎三郎が、
「畜生め……」
「で、そのことを池本先生へ、ぜひとも、私の口から申しあげたく、こうして出て来たのです

よ」

「いま、どこにいます」

「京の、三条白川の津国屋です」

「わかりました」

「池本先生へお目にかかることがありましたら、虎之助はいつまでも津国屋で待っております、と、おつたえ下さるか」

「よろしい。いつのことか、わからぬが……」

「山田さんは、いま、どこにいなさる？」

「そいつも、いまは申せませんよ」

山田は、察してくれと、いわんばかりの眼の色になって虎之助を見やった。

三

虎之助は、山田と別れるや、すぐさま京都へ引き返した。

山田慎三郎も、いまは決死の探偵をつづけているらしい。

現在の京都は、朝廷と幕府、天皇と将軍がむすびついて、これを守護職の兵力がまもり、薩摩や土佐の雄藩も藩兵をそなえ、さらには新選組のような機動隊がきびしく勤王派の蠢動を警戒している。

そこで……。

尊攘派の志士や浪士たちは、京に近い大坂へ潜入しはじめた。

さらに……。

幕府勢力に京都から追いはらわれて国もとへ引きあげた長州藩が、

「ふたたび、京都をわれらの手に……」

まなじりを決して、暗躍を開始しはじめたというのだ。

この正月。

長州藩は、

「いまや、われわれは西洋諸国と交戦中なのである!!」

といい、正月の行事もとりやめ、殿さまの毛利侯父子は武装で御殿にあらわれ、正月早々、軍事教練をおこなったそうな。

もっとも殿さまは、このところ、幕府には負けるし、外国艦隊の砲撃でひどい目にあうしで、

「しばらくの間は、凝とこらえて、実力をたくわえよう」

というつもりらしい。

しかし、血の気の多い長州藩士たちは、諸方の志士・浪士たちと連絡をたもちつつ、

「こうなれば、脱藩をしてもかまわぬ」

殿さまなどのいうことをきいてはいられない。一時も早く、京都をわがものとし、幕府と外国勢力を日本から追いはらってしまおうと色めきたってきている。

「近いうちに、長州の連中が大坂へあらわれて来ようかとおもいます」

と、山田慎三郎もいっていた。

前の寺田屋事件ではないが、こうした連中は、

「何を仕出かすか、知れたものではない」

のである。

しかも、いまは将軍・家茂が上洛中であるし、山田ばかりではなく、公儀隠密は血眼となって彼らの動静をさぐりまわっているらしい。

山田が、前の甘酒やから煮豆やに変り、野田の隠れ家を捨てたのも、

「やつらに感づかれたらしいからです」

と、いった。

虎之助に自分の居所を教えぬのも、虎之助を信用していないからではなく、

「この道は、いろいろとむずかしい。杉さんが不用意にあらわれたりすると、困るのですよ」

山田は顔をしかめて、そういったのである。

「それにね。長州のやつらは、水戸藩とも連絡をとっているらしい。水戸は水戸で兵をあげる。そのすきに、長州が乗り出して来るという……うまく行くはずはないとおもうが、こうなるとすこしの油断もならないのですよ、杉さん」

虎之助は、

（池本先生は、長州へ出張っていなさる……）

と、直感をした。

薩摩から長州掛りへと、池本茂兵衛も、きっと多忙をきわめているにちがいない。

「だからといって、薩摩も安心はできない。いまこそ、こっちへ味方をしていますが……いざ、大丈夫となったら、いつでも乗り出して来ましょうよ」

山田が語ったところによると、薩摩藩は近頃、イギリスから軍艦二隻と大砲六十門を買いつけたそうだ。

去年、戦闘をまじえたばかりのイギリスから早くも軍艦を買いもとめるなどとは、薩摩藩のすることも、実に端倪すべからざるものがあるではないか……。

山田慎三郎と別れた翌日の午後になって、杉虎之助は津国屋へもどって来た。

大坂へ出かけて行っただけのことはあった。

なんといっても、山田につたえておけば、かならず池本茂兵衛の耳に通じることは間ちがいない。

いつ、あらわれるか知れたものではない茂兵衛を津国屋で待つよりも、虎之助は、

（一歩だけ、先生に近づくことができた）

と、おもった。

「いま、帰った」

津国屋へ入って行くと、主人の長太郎が走り出して来て、

「一足おそうございますな、杉さま」

と、叫んだ。

「せ、先生が、お見えになったのか？」

「いえ、池本先生からお金がとどきました。金三十両、江戸のあなたさまへ送るようにと……」

「なに……」

その金を津国屋へとどけて来たのは、旅姿の町人ふうの中年男であったという。

津国屋長太郎も、なんとか、その男から池本茂兵衛の消息をききとろうとしたが、

「いえいえ、私はただ、このお金をここへとどけるように、いいつかりましただけで」

金を置くや、その旅の男はさっと戸外へ飛び出し、走り去ってしまったという。

四条・木屋町

一

だが、そこは津国屋長太郎、ぬかりはなかった。

「これ、三吉。早う早う……」

若い下男の三吉をよびつけ、腕をつかんで通りへ飛び出し、三条大橋の方へ遠ざかって行く旅の男を指ししめし、

「あのお人のあとをつけなはれ。見とがめられぬように気ィつけて」

「へ……」

「早う、早う……」

その三吉は……。

むろん、まだ津国屋へもどって来てはいない。

「そ、そうか。それは、よくして下すった……」

虎之助は、がっかりとした中にも、津国屋のすばやい処置に一縷(いちる)ののぞみをつなぐことを得たわけであった。

二階の部屋へ、金三十両にそえられた恩師の手紙をもって駈けあがり、呼吸をつめて、開封して見た。

池本茂兵衛の手紙は、例によって簡潔なものである。

　相変らず、仲むつまじくおすごしのことと存じ候
　国事いよいよ多難なれども、かまえて颶風(ぐふう)の去るをお待ち下さるべく、その時期も遠からずと存じ候
　巷間(こうかん)やかましき異国の侵略など当分はあるまじきことに候。いまは尊王・佐幕、開港・攘夷の争いにて、おもい見ればまことに下らぬことにて候。一日も早く、丈夫な子をおもうけ下されたく、その日を待ちかねおり候
　礼子へもよろしく御鳳声(ほうせい)下さるべし

茂

虎之助殿

読みすすむうち、虎之助の両眼からは、とどめようもない泪(なみだ)があふれ、

「せ、先生……」

と、一言。

われにもなく恩師の手紙を抱きしめ、虎之助は畳に突伏し、男泣きに泣いた。

虎之助と礼子を、このすさまじい動乱の時代の外において、平穏の世が来るまで、

「ぶじにしておきたい」

とねがう茂兵衛の深い愛情が、行間にあふれている。

なるほど、茂兵衛のいうとおり、来るべき新時代にそなえ、日本人が共にちからを合せて国力の充実をはかるのが当然であるのに、政権の争奪こそが只ひとつの打開だと双方がおもいつめ、それがためにはおびただしいむだ金をつかい、武器をふるい、殺傷を事もなげにするなどということは、

「まことに下らぬことにて……」

に、ちがいはない。

だから池本茂兵衛は、一命をかけて、その「下らぬこと」にはたらいていることになるのだ。

それはつまり、人の世に生きる人である以上、この「下らぬこと」は避けようとして避け得られぬことだからなのである。

それにつけても、茂兵衛がこれほどまでに自分をたいせつにおもってくれていたとは……。

あらためて虎之助は、師の愛の深さをおもい知った。

それだけに、いまだ礼子の死を知らぬ師に対して、こころが責められる。

「もし、杉さま。三吉がもどってまいりました」

廊下で、津国屋長太郎の声がした。

「そうか。ここへ通して下さい」

長太郎と共にあらわれた三吉は、二十一歳。若狭（わかさ）の生まれで、もう五年も津国屋へ奉公をしてい、実直で気ばたらきのすぐれた若者である。

三吉が語るには……。

後をつけて行くと、旅の男は三条大橋をわたり、何度もまわり道をしながら、鴨川沿いの先斗（ぽんと）

町の細道へ入ると、そのまま南へ下って行き、四条通りへかかったところで、ふいに見えなくなった。

せまい道すじではあるし、このあたりは茶屋や料亭がたちならぶ花街（いろまち）だし、折しも夕暮れどきで人通りもすくなくない。

三吉は、間隔をせばめようとしてあせったが、一瞬の間に、旅の男は消えてしまった。

先斗町の道には、いくつもの路地があって、その一つへ切れこんだものとおもわれる。

（しもうた……）

三吉はくちびるを嚙みしめ、尚も、あたりを入念（にゅうねん）に歩きまわってみたが、ついにふたたび、男を見出すことはできなかった。

「どうも、あの辺の、どこぞの家へ入ったのやないか、おもいますのや」

と、三吉はいった。

道を歩きつづけていたなら、きっとまた、自分が見つけ出したにちがいない、と三吉はいうのである。

「あの辺の家へ、な……」

「はい」

「よし、わかった。ありがとうよ。このことはだれにもいってはいけない」

「わかりました」

「さ、これを……」

虎之助は、三吉へ紙に包んだ金（もの）をやって、

「ありがとうよ、三吉、おかげで、私にはたいへんに役立つ」

「はい、はい」
三吉のいうように、池本茂兵衛の使いの旅の男が、四条通りに近い先斗町で姿をかくしたことは、その近くに、茂兵衛たちの連絡所のような隠れ家があるのではないか？……と虎之助は感じた。

二

池本茂兵衛の手紙と金三十両を、津国屋へとどけに来た旅の男というのは、これまでに数度、江戸・浅草の鰻や〔中村〕へ、茂兵衛から虎之助あての手紙や金をとどけてくれた〔公儀隠密・井関忠右衛門〕ではないか……。
虎之助は、そうおもった。
虎之助は、井関を見たことがない。
しかし、中村の亭主・房吉から、その旅の男の顔かたちをききとった礼子は、
「そのお方は、池本の小父さまと共に御役目をつとめておられる、井関忠右衛門さまだとおもいます」
と、いっていた。
もしも井関に会えれば、
（かならず、池本先生との連絡をつけてくれよう）
虎之助はそうおもうと、居ても立ってもいられなくなってきた。
山田慎三郎から、

「いまのところ杉さんは、かまえて、津国屋からうごいてはいけませんよ」
何度も念を押されていたけれども、三吉の報告をきいた上は、旅籠の二階で凝としてはいられない。
翌日。
朝から雨になった。
その霧のようにけむる京の春雨の中を、虎之助は津国屋を出て、三条大橋をわたり、京都市中へ入って行ったのである。
今日の虎之助は、別に変装をしていなかった。
折よく雨のことだし、傘が恰好の〔かくれ蓑〕になってくれた。
大橋をわたって、瑞泉寺沿いの道をまわり、先斗町の道を、虎之助はゆっくりと南へすすむ。
このあたりは、鴨川と高瀬川にはさまれた細長い町なみが、四条・五条までつづいている。
この高瀬川は、慶長のころに角倉了以が開削したものであった。
かつて虎之助が、はじめて京の地をふんだとき、池本茂兵衛が、
「角倉了以という人物はな、太閤殿下（秀吉）から朱印状をゆるされ、南蛮諸国と貿易をおこなったほどのえらい男でこの高瀬川を切りひらいてのち、京と大坂に舟便が通じるようになったのだ」
と、語りきかせてくれたものだ。
高瀬川のほとりにたちならぶ柳は、いまや青々と芽吹き、川を往来する荷舟は、日に百をこえる。
この荷舟が、いわゆる〔高瀬舟〕だ。

高瀬川の東畔の町なみが木屋町で、木屋町の東、鴨川べりの町なみが先斗町である。
先斗町は三条から四条までで、このあたりはむかし、鴨川の州であったという。
それを約二百年ほど前に埋めたてて宅地とした。
この地に〔水茶屋〕がもうけられはじめたのは正徳二年だそうだが、文化のころになって、これらの茶屋に、
〔芸妓渡世〕
が許可された。
先斗町を南北につらぬく一すじの道は、きわめてせまい。
通りの両側には紅がら格子の茶屋がびっしりと軒をつらね、両側の路地は五十におよぶ。
いかにも京の町の、なまめいた情趣のただよう町すじで、春雨にけむるこの町へ入って来た虎之助は、まさに、
〔相ふれて、春雨傘や先斗町〕
の句のままに、行き交う人びとの傘をよけるのに一苦労しながら、
（かえって、このほうがよい）
両側の路地へ、傘の内から眼をくばりつつ、
（三吉が、旅の男を見うしなったというのは、四条通りへ出ようとするあたりだと言っていたが……）
そのあたりへ、虎之助は近づきつつあった。
前方に、四条通りがわずかに見える。
先斗町の右側の路地をぬけた杉虎之助は、木屋町すじへ入って、

（このあたりだな……？）
わずかに傘をあげ、あたりを見まわしたが、
（あっ……）
急いであわてて、傘をかたむけた。

三

四条の方向から木屋町すじへ入って来た若いさむらいは、まさに中村半次郎であった。
場合が場合だけに、虎之助も、
（顔を合わせては、まずい）
とおもい、路地の中へ身を引き、高瀬川辺りの道の向うの細道へ入って行く半次郎の後姿を見まもった。
金杉の家へ、お秀の使いにあらわれたころにくらべると、いまの中村半次郎は身なりも立派になり、青々とそりあげた月代が、男くさい彼の風貌をきわ立たせている。
半次郎は傘もさしていなかった。
高下駄をはいた、たくましい体軀を雨になぶらせ、悠々として西木屋町の小道へ入って行ったかとおもうと、すぐに出て来た。
今度は二人づれになっている。
半次郎のつれは若い町人であった。
この町人、半次郎に劣らぬ立派な体格なのだが、色白の顔を見たとき、虎之助は、

（女か……？）

と、おもったほどに秀麗な美貌であった。

それでいて、おかしがたい気品をそなえている。

細道を出たところで、町人が半次郎へ傘をさし出し、自分も傘をひろげた。

そして二人は、四条通りへ向って行く。

（あの男、町人ではあるまい）

虎之助はとっさに感じた。

態度物腰は一点の隙もないほど、町人になりきっているけれども、虎之助の眼から見ると、

（そうではない）

ことになる。

とすれば、武士ということになろう。

武士が町人姿に変装し、中村半次郎と待ち合せ、どこかへ出かけて行く。

細道を出て来た様子から見て、町人は、すぐ近くに住んでいるらしい。

しかも……。

人通りの多い四条通りへ出た二人は、間隔をあけ、同行のかたちをとらず、先へ行く中村半次郎のうしろからさりげもなく、町人ふうの男がついて行く。

半次郎は、ふり向こうともしなかった。

吸いこまれるように、後をつけて来た虎之助は、いよいよ、

（妙な……？）

と、おもわざるを得ない。

かの町人が、目ざす井関忠右衛門と関係があると、はじめのうちはおもっていなかったけれども、虎之助は虎之助で、礼子を殺害した薩摩ざむらいのことも気にかかっているし、

（薩摩藩だとて気はゆるせぬ、と、山田さんもいっていた。公儀隠密が彼らのすることを見張っていないとはかぎらぬ）

のである。

（とすれば……？）

虎之助の脳裡に、ひらめくものがあった。

（井関殿は、もしや、あの町人を見張るために、京へ来たのではないか……？）

このことであった。

さ、こうなると捨ててはおけない。

虎之助は、二人の後をどこまでもつけて見る気になった。

四条通りをこえた二人は、またも下木屋町の道へ入って行った。

四条と五条の中ごろあたり鴨川辺りに〔俵駒〕という料亭があり、ここへ、二人が入るのを見とどけた。

何やら、密談のにおいが濃い。

一足先きに〔俵駒〕へ入って行った中村半次郎の後から、入りかけた町人が電光のようにあたりを見まわした。

さいわいに虎之助は、半次郎が〔俵駒〕へ入った瞬間、町家の軒下へ傘をすぼめてかくれたので、あやうく町人のするどい視線からのがれる事を得たのである。

二人が〔俵駒〕へ消えたのち、

(さて、どうするか……?)

虎之助は〔俵駒〕の周囲をたしかめたのち、すじ向いに〔万(よろず)川魚・御料理〕ののれんをかけた〔平長〕という料亭へあがった。

うまく、通りに面した部屋がとれた。

仲居へ〔こころづけ〕をはずみ、障子を細目にあけ、酒をのみながら虎之助は、二人が出て来るのを持つことにした。

夕暮れには程遠い時刻だが、ふりけむる雨の午後ゆえ、せまい道の両側に軒をつらねている木屋町はうす墨をながしたようにほの暗い。

約一刻(二時間)のちに、先ず中村半次郎があらわれ、道を南へ去った。

雨は、いつしかやんでいて、半次郎は傘をさしていない。

ちょっと間をおいて、かの町人が〔俵駒〕から出て来た。

町人は、遠ざかる半次郎を見返りもせず、たたんだ二本の傘を小脇にして、半次郎とは反対に、もと来た道を四条通りへ向う。

虎之助は腰をあげた。

すでに、勘定はすませてある。

道へ出て、町人の後を追った。

町人は四条通りを突っ切り、先刻、半次郎と共にあらわれた西木屋町の細道へ入って行った。

桝屋喜右衛門

一

杉虎之助は、町人が小路の左側の家へ入ったのを見た。

雨がやんでいるので、虎之助は傘をさすわけにもゆかなかったが、悠々(ゆうゆう)として小路へ入り、その家の前を通りすぎた。

さりげなく、その家を見やると、町人が女中に傘をわたし、土間の奥へ消えた。この家に住んでいるにちがいない。

家の戸口には、

〔新古御道具・桝屋(ますや)喜右衛門〕

と、そめぬいたのれんが掛けてある。

(ふうむ。道具屋か……)

行きすぎて、いったん河原町通りへ出た虎之助だが、もう一度、道を引き返してみた。

〔桝屋〕のある小路の両側は、小間物屋・旅籠・酒亭・菓子屋などが、ものしずかにならんでいる。

(今日は、これくらいにしておこうか……)

そのまま、虎之助は津国屋へもどった。

だが、この夜はなかなかに寝つけなかった。

どちらにせよ、池本茂兵衛が京都か、その近くにいることはたしかなようにおもえる。茂兵衛の使いとして津国屋へあらわれた井関忠衛門？　が、桝屋の近くで姿を消したことといい、その桝屋から出て来た男と中村半次郎が他の場所で密談をかわしたことといい、

（これは、なにかあるな……？）

と、直感せざるを得ない。

朝になった。

虎之助は、この日。外出をせずにいて、大坂の山田慎三郎からの知らせを待つつもりであったが、昼すぎになると、どうも桝屋のことが気にかかってならぬ。

（出かけて見るか……）

大刀を取って腰へ帯びたとき、津国屋の女房が、伊庭八郎の来訪を告げた。

八郎があらわれたのなら、これはこれでよい。鬱積した気分も、まぎれようというものだ。

「酒の支度をたのむ」

「はい」

女房と入れかわりに伊庭八郎が入って来て、

「虎さん。昨日、木屋町のあたりをうろつきなすったね？」

と、いう。

「どうしてそれを、八郎さんが……」

「今朝、所司代のほうから私に知らせがあってね」

〔京都所司代〕は、皇居の守護をはじめ、皇室や公家に関する幕府の事務を代行し、合せて、西国三十三カ国の諸大名を監視する役目をおびている。

上方における幕府の密偵たちも〔所司代〕とは密接な関係にあるらしい。

伊庭八郎は、父・軍平を通じて〔所司代〕にも〔奉行所〕にも、杉虎之助の身もとを明かし、保護をたのんでくれている。

「虎さん。昨日ね、木屋町・四条上ルところにある道具屋の桝屋という店の前を二度、通りなすったそうだね」

「見ていなすったか？」

「いや、私ではない」

幕府の密偵が、それを見ていて、虎之助のあとをつけ、津国屋へ入るのをたしかめ、これをしかるべきところへ報告すると、

「その人物なら、伊庭軍平から届出のあった杉なにがしではないか」

ということになり、所司代から八郎のところへ照会があったのだという。

「それもこれもね、虎さん。あの桝屋喜右衛門というのは、かねてから目をつけられているらしい。そこへお前さんが出て来て、いわくありげに……というよりも、お前さんは外出から帰った桝屋のあとをつけて来なすったというのではありませんか」

すべて、幕府の密偵に見張られていたことになる。

「これは、おどろいた……」

「私も、くわしくはきかせてもらわなかったが……あの桝屋というのは、店は小さくとも、もと筑前侯（福岡五十二万石・黒田家）の御用達をつとめていたほどで、前の主人が先年亡くなった

のち、あとつぎの子がないため、店がつぶれかかったという……そこへね、いまの主人がどこからかやって来て、跡目をついだのだそうだが、この男が臭いらしい」
「臭い？」
「まだ手がかりはつかめていないらしいが、どうも怪しい。攘夷派の志士らしいというのだね」
「ははあ……」
それで、絶えず密偵が桝屋のまわりを見張っているのだ、と、虎之助にもわかった。
「はじめは虎さんを、勤王浪人だとおもったらしい」
「これは、どうも……」
もしも、桝屋喜右衛門が〔暴動過激派〕の志士の一味だとしたら、彼と密談をかわした中村半次郎は薩摩の藩士である。
そして……。
薩摩藩は現在、幕府と手をむすんでいるのだ。
これは、いよいよもって、
(妙なことだ……)
であった。
だが虎之助は、半次郎のことをわざと伊庭八郎へ語らなかった。
酒が、はこばれてきた。
「将軍も、やがて江戸へお帰りなさる。したがって私も帰るが、虎さんもいっしょにどうですね？」
「御好意は、うれしいが……」

「やはり何ですかえ、池本先生へお目にかかるまでは、か……？」
「そういうことになりますねえ」
虎之助と八郎が、桝屋の正体を知ったのは、いますこし先のことになるが、ここで一足先きに、桝屋喜右衛門についてのべておきたい。

二

〔桝屋喜右衛門〕は、近江・守山町古高の出身で、名を古高俊太郎という。
佐々木源氏のながれをくむ郷士の出であるが、俊太郎の父・古高周蔵は、のちに京都へ出て、山科の安国院の家士となった。
この寺は〔毘沙門堂・門跡〕といわれ、皇室とは非常に関係のふかい寺である。
少年のころから父と共に、京都へ移り住んだ古高俊太郎は、父がつかえる安国院との関係もあって、強烈な尊王思想のもちぬしとなったのである。
父が亡くなったのち、俊太郎が父のあとをついで安国院の家士となったころには、幕府の〔勤王志士〕への弾圧が頂点に達したときで、
「日本は、このままでいてはほろびてしまう。天皇と皇室を中心とした新しい日本をつくりあげねば、外国の侵略をふせぎきれぬ」
というので、俊太郎は勤王運動へ身を投じ、以後は、民間から出た志士として、その活動ぶりは実に目ざましいものがあったという。
あの〔安政の大獄〕の弾圧にも、彼は捕えられなかった。

父・周蔵の代から、安国院につかえていた俊太郎だけに、諸方の公家方へも親しく出入りをゆるされている。

長州藩の有志たちが、有栖川宮をはじめ、朝廷の人びとと接近することを得たのは、古高俊太郎の、

〔取りもち〕

に負うところが多かった、とさえいわれているほどであった。

これほどの男に、幕府が目をつけぬはずはない。

「古高を捕えよ」

と、所司代も奉行所も、新選組も血眼(ちまなこ)になって探索をつづけているのだが、一度も彼は幕吏の目にふれてはいない。

四条・木屋町の道具屋〔桝屋〕の跡をついだのも、桝屋の親類すじにあたる湯浅五郎兵衛の斡旋によるものだ。

湯浅五郎兵衛も、古高家とおなじ豪農の出身である。

この人も、民間から出た志士といってよいだろう。

こうして古高俊太郎が〔桝屋喜右衛門〕となってからは、尚更に彼の所在をつきとめることがむずかしくなった。

だからいま、幕府の密偵が〔桝屋〕方をひそかに見張っているのは、

(よくはわからぬが、どうも臭い。もしや古高俊太郎ではないか?)

との、うたがいがあるからだ。

俊太郎の父・周蔵は、以前、安国院につかえながら、堺町通り丸太町南入ルところで、骨董(こっとう)商

をいとなんでいたこともある。

こうしたところから、

(どうも怪(あや)しい)

と、目をつけられはじめた。

俊太郎は容易に証拠をつかまれぬが、それでも、桝屋へ何気なく出入りをする男たちや、旅姿の武士などが、このごろ、密偵の眼につきはじめたものらしい。

古高俊太郎は、

「薩摩藩が幕府と手をむすんだ以上、これからはどこまでも長州藩のちからをたのみにし、長州の勢力を、ふたたび京都へ引き入れ、幕府勢力を、天皇おわすこの都から追いはらってしまわねばならぬ」

それが先決のことだ、と、決意をかためていた。

そのための潜行運動をつづけてきた彼が、こともあろうに薩摩藩士である中村半次郎と密談をかわしているというのは、いったい、どういうことなのか……。

このとき……。

杉虎之助も伊庭八郎も、桝屋が古高俊太郎であることを知ってはいなかったけれども、

「どちらにしても、あの辺をうろうろなさらねえほうがよござんすよ」

と、八郎が、

「それとも、いっそ虎さん、どうです?」

「え……?」

「おもいきって御公儀の味方になっては、どうですね?」

「私は、御公儀の敵ではない」
「ないがしかし、御公儀の家来ではありませんよ」
「さよう」
「家来におなんなさい、どうです？」
「ふうむ……」
「それならそれで、虎さんがちからいっぱい、はたらけるようにたのんでみようではないか、いかが？」
「いま急に、そういわれても、ね……」
「ま、じっくりと考えておいてもらいたい」
「わかりましたよ、八郎さん」

三

それから三日ほどは、虎之助も津国屋から出なかった。
しかし、津国屋の二階で、凝としていることはたまらないことであった。
一時も早く、
（先生に、お目にかかりたい）
この一念である。
池本茂兵衛へ、礼子の死を告げ、わびをすることが先ず第一。
さらに虎之助としては、

（先生に、これからの私がどう生きて行くか……？）
を指ししめしてもらいたい、これが第二。
第三には、
（なんとか先生を説きふせて、私、先生のお手つだいをさせていただくようにしたい）
のであった。
伊庭八郎のいうことをきけば、八郎から軍平、軍平から幕府要路へはなしがつけられ、しかるべき役目をあたえられよう。
いまの幕府は、たしかに若い人材を登用することにやぶさかでなくなってきている。
身分や家柄にこだわらず、人材を抜擢して、苦難の政局を乗り切ろうという意欲がみてとれる。
微禄の御家人の家に生まれた勝麟太郎（海舟）が、その卓抜した学識と政治感覚を買われ、海軍奉行にまで立身をしたのも、そのあらわれといえるだろう。
もっとも……。
それから先は、勝のように図ぬけた人材を幕府はなかなかつかいきれない。
利害関係や権勢欲、日和見主義で凝りかたまった幕府の政治機構は、せっかくにのびはじめた新しい芽をつみとってしまうことが多い。
勝にしても、何度、役目からしりぞけられたか知れたものではない。
そうして、また困って来ると、勝を引っ張り出す。
勝が手腕をふるいはじめると、遠ざけてしまう。
勝のみではない。
勝のような人材のつかい方については、似たりよったりなのである。

こうしたところに、幕府政治のぬきさしならぬ腐敗があった。
幕政の最高指導者にしても、かつての井伊大老や、老中・阿部正弘のような実行力のある人物が絶え切ってしまった。
元治元年の、この時点まで、井伊や阿部が生きていたなら、天下の様相は全くちがったものになっていたろう。
さて……。
杉虎之助にとって、幕府に奉公し、身を立てるとか出世をするとかいう気持は全くない。
これは、少年の彼をここまで育てあげた池本茂兵衛の影響が、虎之助をそうした男にしてしまったのである。
茂兵衛を助けて、密偵の助手をするもよし。
茂兵衛が密偵をやめるなら、共に江戸へ帰り、以前のごとく師弟水入らずの暮しに入りたい。
虎之助が、もっとも熱望するところのものは後者のそれであった。
四日目。
たまりかねて虎之助は、津国屋を出た。
どんよりと曇った空が、生あたたかくおもたげに、京の町をおおっている。
「長くはかからぬ。だから、先生なり、大坂の山田慎三郎さんなり、おれに使いの者が来たら、かならずとめておいてくれ、たのむぞ」
と、虎之助は津国屋主人に強く念を入れ、浅めの編笠に顔をかくし、三条大橋へかかった。
昼下りのことで、橋上の人通りは多い。
橋の中ほどまで来たとき、西詰から橋をわたって来る中村半次郎を、虎之助は見た。

例のごとく、胸を反らして両腕を活溌に打ち振り、この天下に怖(こわ)いものは一人もない、とでもいいたげな半次郎の風貌のたくましさに、橋上を行く人びとが振り返って見たりしている。
(や……あらわれたな)
虎之助がにやりと笑い、そのまま、すれちがって行きすぎた。
半次郎は虎之助を一瞥(いちべつ)したが編笠をかぶっているのでそれと気づかぬ。
すれちがって五、六歩西詰へ向ってすすむ虎之助の向うから二人の武士が血相(けっそう)を変えて、こちらへ駈け寄って来た。

敵（かたき）

一

その二人の武士が、

（おれに、斬りかかってくる……）

と、虎之助は感じた。

で……。

わずかに左足を引き、刀の鯉口を切った。

二人の武士の視線が、あらぬ方へ転じたのはこのときであった。二人とも、こちらを見向きもせず、虎之助の眼前三間のところで、さっと、橋上をななめに駈けぬけて行ったのである。

橋上を行き交う人びとの間にざわめきが起り、ついで、女の悲鳴があがった。

振り向いた虎之助の眼に、いま、すれちがったばかりの中村半次郎の立ちはだかっている姿が、逃げまどう人びとの間からちらりと見えた。

二人の武士は、なんと半次郎目がけて肉薄して行ったのだ。

二人は、引きぬいた刃（やいば）をふりかざし、すさまじい勢いで半次郎へ襲いかかった。

「斬り合いじゃ」

「早（は）よ、逃げ……」

人びとがわめきたてたときには、刃と刃が嚙み合うすさまじい響（とよ）みがきこえ、武士の一人が大刀を放り落し、橋板へ転倒している。

人びとが逃げ散った橋上の空間に、残る一人が気合を発して中村半次郎へ斬りこむ姿がはっきりと見えたが、

「わあっ……」

どこをどうされたものか、つぎの瞬間には絶叫をあげ、両ひざを橋板へ突き落し、両手を突張り、そのまま、くずれ折れるように倒れ伏している。

ぴいん……と鍔鳴りの音がして、半次郎がぬいた刃は早くも鞘（さや）へおさまってい、

「二人とも死んじゃおらぬ。峰打ちじゃ、峰打ちごわす」

と、半次郎がほがらかにいいはなった。

「ふうむ……」

虎之助は、おもわずうなった。

なんとも、すばらしい中村半次郎の手のうちであった。

またしても大手を振り振り、三条大橋をわたりきった半次郎へ追いつき、

「もし、中村さん」

むしろ衝動的に呼びかけてしまったのは、さすがの虎之助が、あまりにも見事な半次郎の手練（しゅれん）を見て、昂奮を押えかねたものと見える。

「いやもう、手のうちにもおどろきましたが、二人を打ち倒してのちの、中村さんの態度という

ものが、まさに……さよう、まさに元亀・天正のころ（戦国時代）の豪傑そのものなのでしてね。逃げ散った人びとが、一瞬、しいんとしずまり返ったかとおもうと、えもいわれぬ感嘆のどよめきが起ったものです。

私はもう、われにもなく駈け寄って声をかけたのだが……かけてから、しまった、とおもいました。いまここで、中村さんと出合ってしまっては、ちょいと工合がわるいこともある。私がさぐってみようとしている木屋町の道具屋・桝屋喜右衛門と中村さんは、何やら怪しむべき関係にあるらしいので……。

しかし、声をかけてしまったからには、どうにもならない。向うもおどろきましたがね。とにかく人なつこい男ですから、もう私をはなそうとしないのです。どうも中村さんは、私が京へ来ているということを知ったとたんに、このごろ、お秀に冷たくあしらわれることとむすびつけて……お秀に会ったのか、と、いやもう眼の色を変えて問いかけてくる。それがまた、私を憎んでいるのでも怒っているのでもない。ただひたすらに、お秀の法秀尼が、私に近づくことを恐れている様子なのでしてね」

と、そのときのことを、のちに虎之助が述懐している。

こうなっては仕方がない。

虎之助は、おもいきって津国屋へ半次郎を案内した。酒肴を出して語り合ったが、虎之助は、

「お秀さんには、まだ、会っていませんよ」

と、いいきっておいた。

それで半次郎も、やや安心をしたようだ。

「杉どんな、お秀さあとは何でもない間柄ごわすな」

「さようですとも」

「そりゃ、まことにまことごわすな？」

「お秀さんが何といおうとも、大丈夫、何でもありませんよ」

「実はその、近いうちにちょと京をはなれもす。その間が心配で……」

「どこへまいられます？」

「いや、それは……」

と、中村半次郎が苦笑し、

「そいは、杉どんにもいえもはん。天下国家の大事ごわすから、めったには口外できもはん。お察し下はれ」

こういうのである。

「なるほど、だいぶんに遠方へ？」

「ま、遠方……でごわす」

「ふうむ……」

「杉どんな、ずっとここへ御滞留ごわすか？」

「ま、当分は……」

いいさして虎之助が、とっさに、

「亡くなった伯父の墓が、こちらにあるもので、それを今度、江戸へ移そうとおもい、その始末にまいったので……」

うそをいった。

中村半次郎は、津国屋へ腰を落ちつけるや、何やら手紙のようなものをしたため、虎之助へ、
「これを錦小路の薩摩屋敷へ、だれぞにとどけてたもはんか」
といったので、虎之助は三吉へ手紙をわたし、使いに出した。
その三吉が、一人の薩摩侍を案内してもどって来たのは、八ツ（午後二時）をまわっていたろうか……。

二

「ちょいと、ごめん下はれ」
と、中村半次郎が階下へ行き、津国屋の土間に立っている薩摩侍へ、
「おう、東郷どん。すみもはんな」
と、声をかけたのが、二階の部屋にいる虎之助の耳へ入った。
虎之助は廊下へ出て、階段口の手すりのそばへ屈（かが）みこみ、下をのぞいて見た。
半次郎と語り合っている三十がらみの薩摩侍の顔を見て、虎之助がはっとした。
（御油（ごゆ）のときの……）
であった。
あのとき、礼子と共に旅籠へ入って来た中年の公儀隠密へ組みついた薩摩侍なのである。あれから乱闘になり、御油の宿場の道で、虎之助はこやつに傷を負わせたものだ。
（もしや……あの男が、礼子を襲ったのではないか？）
虎之助の胸がおどる。

半次郎と薩摩侍との会話は、ごく簡短（かんたん）に終った。
もしこのとき、半次郎が「江戸の杉虎之助という人に出合って……」などと、その東郷とやらいう薩摩侍にはなしたら、東郷もそれと気づき、大変なことになったろう。
しかし半次郎は「ちょいと知り合いに出合うたので……」といい、すぐ要件へ話題を転じた。
東郷は、半次郎がたのんだ用事を引きうけ、津国屋から出て行った。虎之助はす早く部屋へもどった。
半次郎が入って来て、
「あれから、あの二人な、すぐに気づいて起きあがり、こそこそと何処（どこ）かへ消えてしもたらしい。いま藩邸から来た男と、この旅籠の若者（にせどん）が三条大橋の近くできいてきてくれもしてな」
「それは、よござんした。しかし、あの二人は何者です？」
「さあて……」
中村半次郎がにやりと、
「いまは、うるさい世の中ごわす。あげな事（こつ）めずらしくごわはん」
「ほほう……」
「土佐か、長州か……いずれにしても脱藩の志士とやら申す連中ごわしょ。いまの薩摩な、いやもう、がっつい憎まれもんごわしてな」
「なるほど」
うなずいて虎之助は、さりげもなく、
「用事は、もうすんだので？」
「はあい。いまの男な、つい先ごろ江戸からこちらへまいった東郷直二（とうごうなおじ）ちゅ者（もん）ごわす。あ、そう

じゃ。おいどんな、京をはなれている間に、もしも何ぞ御用事なごわしたら、藩邸の東郷な呼び出し、なんなりと申しつけて下はれ。なんぞ不自由な事など、ごわしたら……」
「ありがとう、中村さん」
半次郎の親切によって、あの男の姓名がわかった。これだけでも虎之助にとっては大きな収穫であったといえよう。
断定はできないけれども、東郷直二なら、礼子と自分を襲ってふしぎはないはずである。
しかも東郷は、つい先ごろ、江戸藩邸から京都藩邸へ転勤して来たというではないか。
「中村さん。実は私、京都（こちら）では山本平三郎という名でいます。何か御世話になるやも知れませんからその東郷さんにも、山本とおつたえねがいたい」
「ほ、そうごわすか、半次郎しかとうけたまわりもした」
と、すこしもうたがう様子がない。
お秀という女を間にして親しくなっただけに、はじめから半次郎は虎之助への警戒を解いているらしい。
（だが、ゆだんは禁物だ）
であった。
もしも半次郎が、虎之助の本名を東郷へうちあけてしまえば、こちらの正体はたちどころに割れてしまう。だが、そこまで神経をつかってみたところで仕方がないのだ。
虎之助が念のため〔山本平三郎〕の偽名のことを、津国屋の人びとへつたえておいたことはいうまでもない。

三

中村半次郎は、それからしばらくして津国屋を去った。
藩邸へはもどらず、急な用事で何処かへ出かけるらしい。それで東郷を呼んだのであろう。
夕飯の膳の酒をのみながら、虎之助はいろいろ考えてみた。
（どうも、東郷は薩摩藩の命令をうけての上で、金杉の家を襲ったのではないらしい）
もしも藩命令の襲撃なら、当然、中村半次郎の耳へも入ってよいのではないか……。
というのは、半次郎もどうやら藩の隠密の役目に、
（はたらいているらしい）
からであった。
とすれば東郷直二。おのれ一個の憎悪によって、虎之助と礼子を襲ったことになる。しかしこのとき虎之助は、東郷の兄・井喜蔵を自分が御油の宿（しゅく）で斬り殺したことを知っていなかった。
金杉の家を襲った刺客たちの中には、
（まだ、東郷と同じに、おれと御油で斬り合った者がいたのか……？）
どちらにせよ、
（あの東郷は生かしておけぬ!!）
と、このとき虎之助の胸中は、礼子を殺した敵（かたき）への憎しみが、あらためて燃えあがってきたのである。
愛するものを殺した敵への憎しみ、恨みを、その敵を殪（たお）すことによってはらそうという、その

強烈な情熱だけでも、

「人間というものは、こころを張りつめたまま、一生を送れるものなのですねえ。もっとも、これは東郷直二にしてもおなじことだったので……」

　と、虎之助の述懐にもあるように、東郷は東郷で、あの夜、討ちそこねた杉虎之助を兄の敵として、

「いつかは、きっと斬る!!」

　と、決意していたことになるのだ。

　金杉のときは、暗闇の中での斬り合いだったので、どれが東郷だったか、おぼえていない。

　だが、こうなったら、

(おもいきって東郷と……)

　対決をしてみようと、虎之助は考えはじめた。

　当然、向うは斬ってかかるにちがいない。そのときの相手の剣さばきで、金杉のときには彼がいたかどうかが、虎之助ならわかるはずだ。

　闘って、負けるつもりはない。

　現にあの夜。敵は虎之助に抗しきれず、逃げてしまったのである。

「三吉を、ちょっと呼んでおくれ」

　と、膳を片づけに来た女中へ、虎之助がいった。

　すぐに、三吉があがって来た。

　虎之助は三吉から、東郷直二について、こまかくききとった。

　東郷は、錦小路の薩摩藩邸にいるらしい。

　三吉にいわせると、薩摩なまりがほとんどなく、江戸ことばに近い歯切れのよい口調で、

「よし、いっしょに行こう」

　と、中村半次郎からの手紙をたたみ、すぐに出て来たのだという。

　おそらく東郷直二は、長く江戸の薩摩屋敷にいて、藩の隠密をつとめていたにちがいない。

「三吉。このことは、だれにもしゃべってはいけないよ」

「はい」

「これからも、私が特別な用事をたのむことがあるやも知れない。やってくれるかえ?」

「はい、はい」

　三吉は、武士でありながら、下男の自分に対しても、まったくわけへだてのない虎之助へ非常な好意を抱いている。

「よし、たのむぞ」

　と、虎之助は、細かくくずした二両余を、三吉にあたえ、

「これは、お礼だ」

「いいえ、そりゃ困りますがな」

「いいから、とっておいてくれ。急に、おれがたのんだことで入用(いりよう)になることもあるとおもう」

「へ……それなら、おあずかりを……」

「たのむ」

　この夜は、さまざまなおもいにさいなまれて、よくねむれなかった。

　日中の三条大橋で、薩摩藩士の中村半次郎へ斬りつけた二人の武士のことを考えただけでも、いかに京都が血なまぐさい世相にぬりつぶされているかがわかる。

（それにしても、薩摩藩というのはどうにも妙な……）

虎之助も、不気味になってきた。

幕府に味方をしている薩摩を憎んだ長州藩が、関門海峡を通った薩摩の船を砲撃し、その責任を問われて、長州藩士二名が切腹したという事件が、つい先ごろあったばかりだ。

幕府も、このさい、長州藩を徹底的に押えこんでしまおうと考え、紀州藩をはじめ十三の諸藩に、

「長州へ進軍の準備をせよ!!」

と、命じたりしている。

もっとも、どこの大名たちも、

（いつ、どうなるかわかったものではない）

世の中に、莫大な金と人とを投入してはたらくこともないと尻ごみをしているので、その準備は、ほとんど進行していない。

さて、翌日。

虎之助は昼前から津国屋を出た。

この日、雨である。

雨は虎之助にとって、まことに好都合だ。ごく自然に、傘で顔を隠すことができるからである。

四

ずっとのちになってわかったことだが……。

そのころの中村半次郎は、名を〔宮原弥吉〕と変え、薩摩脱藩の志士として、長州側の動向をさぐっていたらしい。

そのような変名などが通らぬほどに、彼の本名と顔かたちが京都の敵味方に知れわたるまでには、いますこしの月日を必要としなければならない。

とにかく、当時の半次郎が薩摩藩の〔密偵〕であったことはたしかで、彼は薩摩側の情報を長州側へながし、そのかわりに相手方へ近づくことを得たものであろう。

半次郎が〔桝屋喜右衛門〕こと古高俊太郎に接近したのも、古高へ情報を売り、そのかわりに古高の信頼を得て、

「ともかく、いまの自分は、徳川の走狗に成り下った薩摩藩を見かぎっている。なんとかして、みなさんと共にはたらきたい」

と、いい出て、古高俊太郎はこのことを同志たちへも告げ、

「気性の烈しい、なかなかに立派な男です。ともかく中村のような男は、薩摩のうごきを知る上にも、たいせつにしなくてはならないとおもう」

と、長州側にも、斡旋をしていた。

のちに中村半次郎は、杉虎之助へこう語っている。

「それでも長州側は、あまりに薩摩な憎むのあまり、脱藩の士といっても信用せず、どこまでも古高を間に立てて、こちらの売りこむ情報をききとるばかりで、なかなかに自分を近づけようとはしなかったものじゃ」

それでも古高から得た情報をもとにして、半次郎は単身、長州まで出かけて行き、探索をすすめることになった。近いうちに「京をはなれる」と、虎之助へもらしたのは、このことであった。

「ですから、いえば中村さんも、池本先生や山田慎三郎さんとおなじことをしていたわけなので……」

と、虎之助が当時をかえりみて、

「けれども、同じ長州をさぐるにしても、薩摩藩と幕府とでは、それぞれに目的がちがうのですな。ま、そのころの薩摩は、長州と手をにぎり、いずれは、共にちからを合せ、幕府の屋台骨をゆさぶろうという……そこまでは考えていなかったでしょうけれども、これからの長州が、どこまで幕府を相手に闘えるものか、それを先ず知っておきたい。もちろん、これは長州のみではないので……他の大名たちのうごきに対しても、薩摩の隠密方の目は、ずいぶんとするどく光っていたようでした」

と、語っている。

中村半次郎を古高俊太郎へ引き合せたのは、土佐脱藩の大瀬亘という志士で、これは翌慶応元年の二月に、小田原町の隠れ家から出たところを新選組に襲われ、斬死をとげたそうな。

さて、その日……。

津国屋を出た杉虎之助は、錦小路の薩摩屋敷の門前を二度、三度と通りすぎてみたが、だからといって、目ざす東郷直二があらわれるものでもない。

(どうしてくれようか……?)

いつまでもうろついているわけにもゆかぬので、薩摩屋敷に近い蛸薬師通りにある「重六」という饂飩屋へ入り、腹ごしらえをすましてから、酒を一本のんだ。

熱い酒を口にふくみ、外の雨音をきいているうちに、

(よし!!)

虎之助は、勃然となってきたものである。

(やるなら、早いほうがよい)

と、おもった。

勘定をすませ、すぐに饂飩屋を出て、まっすぐに三条白川の津国屋へもどると、

「あ、もどっておいやした、もどっておいやした!!」

主人の長太郎が飛んで出て、

「大坂からの、お使いが見えてでござりますよ」

「大坂……山田慎三郎さんからか?」

「さ、それは……」

階下の一室には、商人風の男が迷惑そうにすわっていた。これは、あくまでも煮豆屋としての山田からたのまれたもので、京へ行くついでに、津国屋の杉虎之助さまというお人へことづけをしてくれと、

「知り合いの煮豆やからたのまれましたので」

と、商人はいった。

その伝言とは、こうである。

「おさがしの人が、四、五日うちに大坂へまいられるゆえ、どこへも出ずに宿で待っていて下され」

おさがしの人とは、いうまでもなく池本茂兵衛をさしている。

茂兵衛が、数日中に大坂へあらわれると、山田へ知らせがあったものか……どちらにせよ、虎之助にとっては、待ちに待った知らせであった。

虎之助から〔こころづけ〕をもらい、山田の伝言をとどけに来た男は、よろこんで帰って行った。訪問者は自分が帰るまでとどめておけ、と虎之助にいわれただけに、津国屋では懸命になって男を引きとめておいてくれたのである。

（いよいよ、先生にお目にかかれる）

その昂奮が高まれば高まるほど、先刻、饂飩屋〔重六〕で酒をのみながら考えついた計画を、

（先生が、おもどりになる前に、仕てのけておきたい）

虎之助は、そう決意するにいたった。

「三吉に、あとで私のところへ来てもらいたい」

と、主人にいいおき、虎之助は二階の部屋へあがると、すぐに硯箱を引きよせた。

五

虎之助が、薩摩屋敷にいる東郷直二へしたためた手紙は、およそ、つぎのようなものだ。

「……昨日、御藩の中村半次郎殿からおききおよびでもありましょうが、私は、江戸の山本平三郎という者です。半次郎殿が申されますには、こちらで何か困ったことあらば、貴所に相談をするように、とのことで、そのお言葉にあまえ、お願い申したきことがありますので、まことに御足労ながら、明日六ツ半ごろ、四条木屋町の平長までおこしねがいとうござる。もし御承知のよしを使いの者に申しきけ下さるならば、明日、時刻に合せ、お迎えの駕籠をさし向けます」

これを、三吉にもたせて、薩摩屋敷へとどけさせたのである。

三吉は、しばらくして帰って来た。

東郷直二は、虎之助の手紙を読むや、三吉が待っていた門番の詰所まで出て来て、

「山本さんにつたえてくれ。迎えの駕籠などいらぬ。中村半次郎の知人のたのみというなら、かならず参上する、とな」

と、いったそうだ。

半次郎と東郷とは、よほどに相ゆるした間柄らしい。

四条木屋町の〔平長〕という料亭は、先日、半次郎と古高俊太郎が近くの〔俵駒〕で密談をかわしたとき、虎之助が見張っていた店である。

とにかく〔平長〕へ東郷直二をさそい出す。それからのことは、ぶつかってみなくてはわからぬ。

もしも東郷が、礼子を殺した男たちの中の一人であるなら、

（池本先生へお目にかかる前に、斬っておきたい）

のである。

茂兵衛に会ってしまえば、それからの自分がどうなるか、虎之助には予想がつかぬ。なにごとも茂兵衛しだいである。

「江戸へ、すぐさまもどれ!!」

と、きびしくいわれたら、やはり抗しきれぬようにおもわれる。それは、虎之助にとっては最悪の事態になるわけだが……。

（礼子のいない江戸へもどって、これからのおれに何をせよ、というのだ？）

であった。

この夜。

虎之助は、恩師ゆずりの肥前忠広二尺五寸一分の愛刀に入念な手入れをした。

何故か、この夜はぐっすりとねむれた。

それは、京都へ来て以来、つかみどころのない虚な日夜を送りながら、それでいて自分が一歩も踏み出し得ぬ焦燥にさいなまれていた虎之助が、

（東郷直二を討って、池本先生にお目にかかり、先生と何処までも……以前のように御供をして行こう）

はっきりと、目標が定まったからだ、といえよう。

ただひとつの気がかりは、池本茂兵衛が同行をゆるさぬときのことなのである。

翌朝も、空模様がよくない。

雨はやんでいたが、いつまた降り出してくるか知れたものではなかった。

午後になってから、虎之助は湯を浴びて下着を替え、袴をつけた。

津国屋長太郎に来てもらい、

「おそくも五ツ半までにはもどる。まさか、とはおもうが、もしも何処からか私のところへ使いの者でも来たら、よくよく気をつけて、しかるべくたのむ。お前さんに何事もまかせる」

「いったい、どちらへお出向きになりますので？」

「む……」

「お出向き先をきいておきませぬと……」

「ま、そのことはいいさ。とにかく、今夜だけのことだ。明日からはもう、此処を出ない」

「はい……」

「とにかくまかせる。たのみましたよ」

夕暮れになっていたが、雨は落ちてこない。

虎之助は雨仕度なしで、編笠をかぶり、津国屋を出て行った。

ときに、七ツ半をまわっていたろう。

東郷直二が〔平長〕へあらわれるのは六ツ半（午後七時）である。

その前から、虎之助は薩摩屋敷を見張るつもりでいた。〔平長〕へ入ってからでは、まずい。

東郷は迎えの駕籠を遠慮したので、出来れば東郷が、藩邸から出て来るところをたしかめたかった。

六

虎之助が津国屋を出て半刻もすぎたころであったが……。

江戸から着いた商人が四人、雨あがりの街道を近江の水口から急行して来たとかで、泥まみれになった足を土間で洗っているとき、これも旅姿の町人が一人、ふらりと入って来て笠もとらず〔通り庭〕を台所の方へさっさと行きかけた。

三吉がこれを見て、

「もし、あんたはん。どこへ行きなさるのや？」

あわてて飛び出すのへ、

「わしだよ」

町人が笠をとって、顔を見せた。

「あっ……」

三吉は仰天し、

「い、池本先生……」
「ここからあげてくれ。いま着いた旅人は？」
「おなじみさんどす」
「よし。あるじはいるか？」
「へえ…へえ……」
まさに、池本茂兵衛である。
小柄な体軀ながら、以前の茂兵衛にくらべると、だいぶんに肥ってきたようだ。
道中差を腰にさしこんでいるけれども、茂兵衛の姿はどう見ても、これが武士……すぐれた剣客のそれとはおもえない。町人まげも温和な顔だちにぴったりと似合い、
「三吉。すぐにまた出るから、履物をたのむ」
足を洗い、階下の主人の居間へ行き、
「ごめんなさいよ」
入って来た茂兵衛を見て、長太郎夫婦がびっくりした。
「この荷物をあずけに来た。一刻ほどでもどる。今夜は泊めてもらうよ」
「せ、先生。まあ、あんたはん、どこにおいやしたので……？」
「どこもここもない。いつものようにあっちこっちさ」
「先生。杉さまが江戸から見えておいでどすがな」
「なに、虎之助が……」
「はい、はい」
「なにをしに？」

「そりゃもう、先生にお目にかかりたい、なんとしてもお目にかからぬうちは、江戸へ帰れぬ……と、こういうておいでどすがな」
「二階か？」
「へ……さっき、ちょいと外へ……五ツ半までにはもどると……」
虎之助は津国屋夫婦に、まだ、礼子の死を告げていない。
だれよりも先に、茂兵衛へ報告しなくてはならぬし、礼子の死を告げて、津国屋夫婦に気の毒がられては尚さらに、たまったものではなかったからだ。
「いつから、京へ？」
「もう、二十日にも」
「おれに会わぬうちは、江戸へ帰れぬ、と、そういうていたと？」
「はい、はい」
津国屋の内儀がさし出した茶をのみつつ、池本茂兵衛は両眼をとじ、何やら黙考の態であったが、それもごく短い間のことで、
「それなら、わしがもどるころには虎之助も帰って来よう。あるじどの。何か着替えと、それに髪をなでつけてもらいたい。足袋もたのむ」
「どちらかへ、お出向きになりますので？」
「む。すぐにもどる」
長太郎夫婦が、いそがしく立ちまわり、茂兵衛は長太郎の着物、羽織を身につけ、提灯の用意をさせるや、
「では、ちょいと出て来る」

さっと、夜の闇の中へ出て行ってしまったものだ。
「急ぎの御用やろか？」
「はあ。けど、お荷物ここにあるよって、きっと帰ってみえますやろ」
津国屋夫婦は、それでもほっとした面もちになったのである。
「杉さまも、いままで、よう辛抱して、待った甲斐があったというものや」
「ほんになあ」
津国屋を出た町人姿の池本茂兵衛が白川橋をわたり、三条大橋に向って足を速めて行くと、左手の寺院の三門の下にうずくまっていた乞食の男が飛び出して来て、
「池本先生」
「お……どうした？」
「やつは四条木屋町の道具屋、桝屋喜右衛門方へ入りました」
「やはり、な」
「どういたしましょう」
「いっしょに来てくれ。おれのうしろから、な……」
「はっ……」
乞食は、すぐに茂兵衛から飛びはなれた。
そして、先を行く茂兵衛の七間ほどうしろから、歩みはじめる。
この乞食も公儀隠密の一人であろう。
茂兵衛と乞食は、だれかを尾行しつつ、京都へ入ったものと見てよい。
京都へ入って、茂兵衛は乞食の男に、そのだれかを尾行させておき、自分は津国屋へ急行し、

旅衣装を解いて姿を変え、ふたたび、乞食姿の隠密と共に行動を起したわけだ。
二人が三条大橋をわたって木屋町すじへ入ったころ……。
錦小路の薩摩屋敷・表門の潜門から、東郷直二があらわれた。

春雷

一

妙に、なまあたたかい夜であった。

風もなく、おもたげな、ねっとりとした闇に京の町がつつまれている。

藩邸を出た東郷直二の足どりは、ゆったりとしたものであった。

今朝早く、中村半次郎が錦小路の藩邸へあらわれ、

「おいどんな知人で、江戸から来た山本平三郎ちゅ人が、ほれ、あの白川の津国屋に泊っちょる。なんぞ、いうてくるやも知れぬから、そげなときは相談に乗ってやって下はれ」

と、東郷にたのみ、すぐにまた、何処かへ出て行った。

このごろの半次郎は、武士の姿になったかとおもうと、うす汚い百姓に化けたりして藩邸へ入って来ることもある。

薩摩藩の〔大殿さま〕の怒りを買い、西郷吉之助（隆盛）が沖永良部島へ押しこめられたのは〔寺田屋騒動〕が起る直前であったが、ようやくにこのほど、西郷は罪をゆるされ、

「近く、京へみえなはるそうじゃ」

藩士たちは、西郷帰還のよろこびにわき返ったものだ。

政局が、いよいよ困難なものになってくるにつれ、

「どうしても、西郷どんに帰ってもらわにゃならぬ!!」

京都藩邸は、この期待と希望一色にぬりつぶされたといってよい。

しかし〔大殿さま〕の島津久光は、依然、西郷の帰還をよろこばない。

そこで、高崎佐太郎という藩士が、決死の覚悟で〔大殿さま〕へ直談判をやってのけた。

西郷は、人も知る先藩主・島津斉彬の寵臣である。

その西郷を〔島ながし〕にして、いつまでも罪をかぶせておいては、

「先君（斉彬）のお目がねちがい、ということになりましょう」

と、高崎がいった。

久光も亡き兄・斉彬のことをもち出されると、もっとも弱い。斉彬の偉かったことは、だれよりも久光がよくわきまえているのだから……。

それに、家来たちのほとんどが西郷吉之助の赦免を熱望している。この事実を無視するわけにはゆかないではないか。

「ゆるす……」

と、いったときの島津久光が、口にしていた煙管をぎりぎりと口惜しげに嚙みしめ、その歯の痕が銀の吸口に残った……といわれるほどに、この〔大殿さま〕は、西郷がきらいであった。

西郷吉之助は、数日前に京都へあらわれ、島津久光は仕方なく、

「軍賦役を申しつける」

と、いった。

西郷も久光をきらっているが、このときは素直にこれをうけ、いまは錦小路の藩邸に起居している。

西郷吉之助という薩摩の〔指導者〕が返り咲いたということは、薩摩藩のみならず、諸方に緊張をよんだ。

西郷は、あれほどに熱烈な勤王運動を展開した人物だけに、現在は幕府をたすけようという姿勢をしめしている薩摩藩へもどって来て、

「いったい、どのようなうごきをしめすか……？」

であった。

いまのところ、西郷はのんびりと藩邸内に日を送っている。

だが、密偵の中村半次郎を呼び寄せては、彼の報告もきくし、西郷自身が、新しい指令を半次郎へあたえたりしている様子が、東郷直二にもよくわかった。

東郷も、江戸から転勤したばかりだし、それだけに、近ごろの江戸の情勢をよくわきまえているので、何度も西郷吉之助に呼ばれて質問をうけた。

西郷は、

「藩のお庭方（情報部）な、以前と変らずに、ようやっていなはる。けっこうなことじゃ」

さもうれしげに、中村半次郎や東郷直二へ、

「これからは、もっと気張ってもらわにゃならぬ。おいどんの耳と目になって、おはんたちがはたらいてくれぬと、おいどんな、何もできもはんで……」

そういったものだ。

（杉虎之助を討たぬままに、京へ来てしまったのは残念だが……これからは西郷先生のおそばで

はたらける。これはうれしいことだ。やって、やり甲斐がある）

と、東郷も、このところ昂奮気味なのである。

江戸で、金杉の杉家を襲ったのは藩命ではない。

旅僧に変装し、江戸市中を密行しているとき、偶然に礼子を見かけて住居をつきとめ、美江寺と御油で、虎之助と礼子に煮湯をのまされた男たちのみへはたらきかけ、襲撃にふみきったのだ。

さて……。

寺町すじへ出た東郷直二は〔祇園御旅所〕の境内へ入った。

ここは、祇園会の神輿三基がおさめられてい、四条・京極の辻にあって、境内を東へぬけると、河原町通りへ……さらに四条の橋へ道がつづいている。

神燈が明るく灯っている境内をぬけた東郷は、河原町通りをすぎ、高瀬川へかかる小橋をわたってから右へ曲がった。

「しばらく……」

杉虎之助の声が、

と、東郷の背へ投げかけられたのは、実にこのときであった。

二

下木屋町すじへ、足をふみ入れた東郷直二が、声にふり向くや、

「あっ、す、杉……」

驚愕の叫びを発し、飛び退った。

「おしずかに……」
と、杉虎之助がすすみ出て、
「ここではまずい」
「な、何……」
春の夜も、まだ更けてはいない。
木屋町の灯火が紅色になまめいてい、女たちの笑い声がどこやらできこえている。
人通りも多かった。
「どちらにせよ……」
いいさして虎之助は、すいと東郷の左脇へ身を寄せた。
東郷は、ぴくりと肩のあたりをふるわせただけで、一歩もうごけない。しかし彼もさすがに刀の鯉口は切っていたようだ。
「どちらにせよ、斬り合わねばなるまいな、東郷さん」
「う……」
「場所は？」
「く、くく……」
「四条河原ではいかが？」
「よ、よし!!」
ついに、東郷も決然となった。
見合す眼と眼。
二人がぱっとはなれ、申し合せたように走り出した。

そのころ……。
町人に変装した池本茂兵衛と、乞食姿の密偵は、すぐ近くにいたのである。
虎之助が東郷に声をかけた場所の、すぐ北面が四条通りで、それをこえると中木屋町になり、古高俊太郎の〔桝屋喜右衛門〕方は、目と鼻の先であった。
二人は、どこからか或人のあとをつけて来て、その人が京の町へ入るのを見とどけ、乞食の密偵があとをつけ、その間に茂兵衛が姿を変えた。そして、密偵が告げた場所（桝屋）へ、二人してあらわれ、見張りをつづけていることになる。
茂兵衛は、桝屋方のすじ向いにある〔よろずや〕という酒亭へ入って、しずかに酒をのんでいる。
乞食の密偵は〔よろずや〕の表口を外れたところへ、菰をかぶってながながと寝そべりつつ、桝屋を見張っていた。
まだ早いのに、桝屋の表戸は堅く閉ざされている。
と……。
桝屋の潜戸が開き、黒い人影があらわれた。旅姿の武士である。この男を茂兵衛たちはつけて来たのだ。
旅の武士は、あたりを見まわし、人通りがないのをたしかめてから、細道を高瀬川辺りのほうへ去った。
乞食が身を起し、咳ばらいをした。
〔よろずや〕の中で、これをきいた池本茂兵衛が勘定をすませ、戸外へ出た。
乞食がうなずいて見せ、先に立って旅の武士が去った方角へ歩き出し、茂兵衛はこれにつづい

茂兵衛たちの姿が消えたとき、またも桝屋の潜戸が開き、背の高い、たくましい男の影が路上へ浮かび出た。

ちょうど、そのころ……。

杉虎之助と東郷直二は、鴨川の中洲を五条へ寄ったあたりに立ち、向き合っている。

安政三年に四条の橋が架かるまでは、この、ひろい中洲の間に鴨川が何条にもわかれてながれてい、見世物小屋や茶店が軒をつらねていたものだ。

それが、八年前の架橋の折に、すっかり整理され、川のながれも二つに分けられた。

夏ともなれば、以前のような「盛り場」の景観が見られるけれども、この夜は中洲に人ひとり通らぬ。

両岸の家々の灯がつらなる中に、この鴨川の中洲は一種の谷間にもおもえた。

「よいか……」

虎之助が呼びかけると、

「応!!」

東郷は、電光のごとく大刀をぬきはらい、

「兄の敵!!」

と、叫んだ。

三

「なに?」

虎之助は先手をとられたかたちで、

「お前さんの兄だと……?」

「おれの兄・東郷井喜蔵は、御油で、きさまに討たれた」

「お……そうか、あのときの……」

「来い!!」

「待て」

「なにを、おのれ……」

「私にとっても、お前さんは妻の敵だ」

「めんどうな。くどくどいうな!!」

「では……」

刀の柄へ、虎之助の手がそろりとかかった転瞬……。

「たあっ!!」

東郷直二は、大刀を垂直にかまえ、これを顔面の右側へ押しつけるようにして、猛然と突進して来た。

薩摩名物の示現流、独自の突撃である。

虎之助は声もなく身をひねって東郷の初太刀をかわしざま、三間を後退し、腰を沈めて刀を低くかまえる。

「む……」

突撃につぐ突撃。皮を切らせて肉を切るの剣法ながら、東郷直二が右ひざを曲げ、八双にかま

えた刀を正眼にうつして、

「くそ!!」

わめきながらも、突進しきれなかったのは、やはり技倆のちがいであったろう。

虎之助は、低い姿勢のまま、音も声もなく、吸う息、吐く息も消してしまった。

「う、うぬ……」

正眼から上段へ……さらに、一歩出て正眼へと、かまえをうつしながら、東郷は歯がみをしている。

両岸の灯あかりをうけているので、中洲は真の闇というわけでもない。

すぐれた剣士たちが闘い合うために必要なだけの視界は、あたえられているはずであった。

しかし……。

東郷は、虎之助の呼吸をはかることができなかった。

虎之助は完全に夜の闇へ同化してい、呼吸をしてはいても、それを見せない。

それにひきかえ、東郷の呼吸は次第にあがってくる。

こらえようとして、こらえきれず、

「むう……う、う……」

東郷は呼吸をはずませ、じりじりと、闇の中の虎之助へ吸い寄せられて行きそうになった。

これでは、

(いかぬ!!)

と感じたのであろう。

東郷は、あらためて飛び退り、最後の突撃を敢行するつもりで、呼吸をととのえようとした。

と……。

虎之助は微風のように、東郷が退っただけの距離をせばめてきているではないか。

東郷の全身からあぶら汗がふき出してきた。

どこかで、春雷が鳴った。

東郷が、たまりかねて、

「やあっ!!」

一気に虎之助へ肉薄したのは、このときだ。

東郷の打ち落す刃が、夜気を割って虎之助の頭上へ襲いかかった。

刃と刃が嚙み合い、火花を散らした。

撃ち合って、飛び退って、……その間合が不充分だと直感した東郷が、さらに飛び退ろうとするとき、杉虎之助がするすると間合をつめ、

「あっ、あっ……」

もう夢中で、東郷が太刀を打ち振ったとき、虎之助がななめに東郷の躰をすりぬけざま、肥前忠広の銘刀を横なぎに東郷直二の胴をはらった。

「うわ……」

よろめいて、それでも必死に刀をかまえかけた東郷直二のくびすじの急所を、虎之助が躍りあがるようにして切りあげた。

東郷が、どっと中洲の土と石の中へのめりこんだ。即死である。

虎之助は、もう見返りもせぬ。

刀身の血をぬぐった懐紙が、虎之助の手から落ち、忠広の一刀はたちまちに鞘へおさめられて

いる。
　中洲づたいに、虎之助は四条の橋下をくぐった。
　この中洲は、間もなくつきる。
　つきたところから先斗町(ぽんとちょう)すじへあがり、そのまま、三条大橋へ出るつもりの虎之助であった。
　また、春雷がきこえ、それきりになった。
　鴨川の瀬音が、急に耳へつきはじめた。
「礼子、東郷を斬ったよ」
　虎之助は、声に出してつぶやいてみた。
　ともあれ、礼子の殺され方が尋常でなかった。東郷らは闇夜に潜入して、卑劣(ひれつ)にも女ひとりへ奇襲をかけたのである。彼らは虎之助がいるものとおもって、ああした襲撃の仕方をしたのであろうが、結果はおなじだ。
　それだけに、
「いくらかは、東郷を斬って、いささかは私も救われたおもいがしたものです」
とのちに虎之助は、正直に語っている。
　中洲がつきたところで、虎之助は、左手の先斗町すじへあがろうとおもい、細流の中へ足をふみ入れた。
　そのとき、すぐ前の、鴨川のながれの中で人のうめき声がした。

わが父

一

　その人は、鴨川の細流へ下半身をひたし、仰向けに倒れていた。
　町人姿の男である。
　それだけに虎之助は、見すてておけなかった。
　男は、先斗町の石垣へあたまをつけるようにして、わずかにうめいている。
　気をうしなってのうめき声であることが、虎之助にはすぐわかった。
　浅いながれをわたって、
「これ、しっかり……」
　男を抱き起して見て、さすがの杉虎之助が、のけ反(ぞ)るばかりに、
「ああっ……」
　驚愕の叫びをあげた。
「せ、先生……、池本先生……」
　まさに、池本茂兵衛その人なのである。

虎之助は、もう無我夢中で茂兵衛を抱きあげ、細流の中を走って、三条大橋・西詰の下から道へあがった。

惑乱(わくらん)の中にも、

(こうしたときには、気絶したままにしておいて、介抱(かいほう)のできる場所へはこんだほうがよい)

と、虎之助は直感した。

茂兵衛は左の脇腹から胸もとへかけて切り割られている。

傷は、この一カ所だが、すさまじいばかりの出血であった。

虎之助は、いったん恩師の躰を地面へ横たえ、双肌(もろはだ)ぬぎとなった。

先斗町の小路から出て来た二人づれの女が、このありさまを見て悲鳴をあげ、駆け去って行く。

肌襦袢(じゅばん)をむしりとるようにぬいでこれを引き裂き、虎之助は手ぬぐいと合せて、茂兵衛の傷口へ当て、応急の血どめをした。

手をうごかしつつも、

「せ、先生……先生……」

うわごとのように、虎之助は声を発している。

血どめが終るや、虎之助は両腕に茂兵衛を抱きあげた。

背負って行くよりも、このほうが茂兵衛のためによい。

まだ、夜ふけというわけでもないが、このごろは物騒(ぶっそう)なので、暗くなると人通りがきわめてすくなくなっている。

それでも、茂兵衛を抱えた虎之助が三条大橋をわたりきるまでに、三人ほどの通行人がすれちがい、

「何や、何や?」

「うわぁ……」

叫び声をあげ、逃げ散って行ったものだ。

大橋を東へわたりきった、そのとき、橋のたもとから提灯が走り出して来て、

「あっ。杉さまやおへんか?」

声をかけてよこしたのは、津国屋の下男・三吉であった。

「おお、三吉……」

虎之助が、ほとばしるように、

「先へ行って迎えを……戸板か何かを、早く……」

「そのお人は?」

「池本先生だ」

「ひえっ……」

三吉が一瞬、茫然(ぼうぜん)と立ちすくんだのへ、

「早く行け。あるじに医者をたのんでもらってくれ」

「あ……」

三吉は、身を返すや、まっしぐらに駆け去った。

三条・白川の津国屋までは、ごく、わずかな道のりであるが、虎之助にしてみれば百里にも千里にも感じられた。

走ったりしては、茂兵衛の傷にさわる。

「せ、先生。し、しっかり……しっかりして下さい」

低く呼びかけつつ、あぶら汗にまみれて白川橋のところへ来たとき、津国屋長太郎が、戸板を持った下男たちをしたがえ、走り出して来た。
「と、とんだことに……」
長太郎が泣きわめくように、
「だれや!!……先生を、こんなにしたのはだれや……」
と、いった。
津国屋では、内儀が先に立ち、階下の部屋へ床(とこ)がのべられてい、近くにすむ池田道順(どうじゅん)という医者を迎えに、三吉が走って行ったそうな。
池田道順は、間もなく駈けつけて来てくれた。
奥の間に横たわっている池本茂兵衛の傷口から、血どめの布を取りのけつつ、
「これは、どなたがなさった?」
と、問うた。
「私です」
と、虎之助。
すると、まだ三十そこその道順先生が大きくうなずき、
「みごとでしたな」
ほめてくれた。
そのとき、様子を見ていた津国屋の内儀が、すとんと倒れた。茂兵衛の傷口のすさまじさに失神したのである。長太郎が、舌うちをもらし、これを抱きあげて廊下へ去った。
池田道順は、手早く、応急処置を終えたが、手術にかかろうとはしなかった。

「縫合(ほうごう)を……?」
と、問うた虎之助へかぶりを振って見せ、
「縫合をしたら、そのまま、息絶えてしまいます」
道順が、毅然(きぜん)としてこたえ、
「御子息ですかな?」
反問されたとき、ためらいもなく、本能的に、虎之助が、
「さようです」
と、こたえている。

二

池田道順は、
「御子息に申しあげる」
「は……?」
「御父上は、助かりませぬ」
とっさに、虎之助は声が出なかった。
だが、ややあって奮然と
「先生。助からぬと無下(むげ)に申されては、私も返すことばがありません」
「ごもっとも」
「それよりも、出来得るかぎりの手当をしてみていただきたい」

「それは、いたしましたよ」
「いまのが……？」
「さよう」
「しかし……」
「あれがもっともよい。間もなく御父上は気がつかれましょう。別れを惜しみなされ」
いうや、池田道順が立ちあがり、
「となりの部屋に、私はひかえています」
しずかに、去った。
「むう……」
うなり声を発し、虎之助は袴を両手につかみしめ、顔面蒼白となり、茂兵衛を見つめたきり、身じろぎもしなくなった。
どれほどの時間(とき)がすぎたろう。
津国屋長太郎は、隣室にひかえている池田道順の傍についているらしく、部屋へは入って来なかった。
「う、うう……」
微(かす)かに、池本茂兵衛がうめいた。
すかさず、虎之助が顔を寄せて、
「先生。池本先生!!」
呼びかけた。
茂兵衛の両眼が、ぽっかりと開いた。

「せ、先生……」
「う……虎之助か……」
「は、はいっ」
「おれを……？」
「お……」
「鴨川のながれに、おられました。ちょうど私、通りかかりまして……」
わずかにうなずいた茂兵衛が、
「そうか。うれしいことじゃ」
と、いった。
「先生。どこのだれが、先生を、このような……？」
「恐ろしいほどの手練(てだれ)者であった。わしも、老いたものよ」
灰色の茂兵衛の面(おもて)へ、微笑が波紋のようにひろがっていった。
「だれです、だれが、先生を……」
「わしの配下(した)の者とな、長州からある男をつけて来た。すると……わしたちのうしろからつけて来た男に、斬られた。わしの配下の者も殺(や)られた……」
「せ、先生」
「いうな」
「は……」
「これでよい……いずれは、こうなる身であった」
虎之助は、両眼へふきあがってくる泪(なみだ)をぬぐおうともせぬ。

「虎之助よ……」
「はい」
「礼子は、いかがしておる？」
　こういわれたときに、虎之助は、どうにも礼子の死を告げることができなかった。
　虎之助の眼から見ても、茂兵衛は息絶える寸前であった。その恩師を、いまさら悲しませることはできない。
「ぶ、無事に、暮しております」
「そ、そうか……」
「は、はい……」
「なれど、礼子ひとり、江戸に置いて、お前は……」
「礼子は……礼子は、しかと、本所の叔父のもとへあずけおきました」
「そうか……」
「せ、先生に……先生に、ひと目……」
「む。わしも会いたかった……」
「ああ……先生……」
「そして、会えたなあ」
「は……」
「よかった、よかった……」
　いったとき、突然に茂兵衛の顔が強張った。
「せ、先生……」

「仲よう、暮せ……」
　これが、池本茂兵衛の最期のことばであった。
　隣室から、池田道順と津国屋長太郎が入って来たとき、池本茂兵衛の面上を、早くも死の静謐がおだやかにおおっていたのである。
　虎之助の慟哭が起った。

三

　虎之助が、二条城と濠をへだてて西側にある〔定番組屋敷〕へ伊庭八郎をたずねたのは、翌朝のことだ。
　宿舎にあてられている鈴木重兵衛方から出て来た八郎が、
「虎さん、どうしなすった？」
「眼を泣き腫らしていなさるね」
「八郎さん。昨夜、池本先生に出合いましたよ」
「そうか、そりゃあ何より……」
　八郎は、虎之助が泣いたのはうれし泣きか、と思ったらしいが、事情をきいて、
「と、とんだことになったものだ」
　顔色が変った。
「先生は、ともあれ御公儀、御役目にはたらいておられた。私一存にはからうこともならぬとおもい、あんたのところへ来たのですよ」

「そ、そうか、そりゃあ……」
八郎の声も、しどろもどろである。
青ぐろくむくんだ顔をうつむけたままでいる杉虎之助の、このように悄然（しょうぜん）とした姿を、これまでに伊庭八郎は見たことがない。
「では、八郎さん。しかるべくたのみましたよ」
「はい」
八郎も、かたちをあらため、
「おっつけ、私も津国屋へ……」
「たのみます」
虎之助が去ると、八郎はすぐさま身仕度をととのえ、組屋敷を出て、二条城の東面にある〔所司代屋敷〕へ、このことを知らせた。
昼前に、所司代の役人たちが津国屋へ駈けつけて来て、池本茂兵衛の遺体と遺品を一応は検分したが、それから後は実にていねいな取りあつかいであった。
所司代と虎之助との間には伊庭八郎がたち、いろいろと世話をしてくれた。
茂兵衛の役目が役目であったためか、所司代では直接に、虎之助と交渉事をせぬ。
これも一つには、茂兵衛の役目とはまったく無関係な虎之助ゆえ、警戒をしたというのではないが、あくまでも部外者としてのあつかいになるのであろう。
しかし、茂兵衛の遺体については、虎之助がおもうままにしてもよい、とのことで、
「八郎さん。父の遺体は、京都（こちら）で荼毘（だび）にし、骨を江戸へ持って帰り、礼子の墓とならべて……」
「そうしなさるか」

「うむ……」
「虎さん。いま、池本先生のことを、父といいなすったねえ」
「え……？」
とっさに、わからなかった。
「私が、そういった……？」
「いいましたよ」
「そうか……では、おもわず……」
「おもわずも何もない、虎さんにとっては池本先生が、ほんとうの父親なのですよ」
「む……」
「私もね、軍兵衛という実父と、軍平という養父と……二人の父親をもった男だ。よい父親なら一人よりも二人のほうがいい」
「なるほど、ね……」
この夜は、茂兵衛の通夜（つや）となった。
なにぶん、京都には茂兵衛の縁者もいないし、知人とても虎之助が知るはずはない。
津国屋の人たちの他には、伊庭八郎がつめていてくれるだけであった。
だが、夜ふけてから……。
それと名乗りはせぬが、立派な服装（みなり）の武士が入れかわり立ちかわり、二十余人も津国屋へあらわれ、池本茂兵衛の遺体に焼香をした。
八郎が、その中の何人かにあいさつをしているところを見ると、それらの人びとは幕府要路の人たちらしい。

あとになって八郎が、別の部屋へ虎之助をよび、
「彦根の井伊侯からも、福山の阿部侯からも、内密に人が来て焼香をすませ、香典を置いて行きましたよ」
と、いった。
近江・彦根の井伊直弼は大老として、備後・福山の阿部伊勢守正弘は老中として、いずれも幕府政治を主宰し、初期動乱の最中に殪れている。
この両家からの弔問があったのは、とりも直さず、池本茂兵衛が、かつての大老や老中直属の隠密であったことをものがたっているといってよい。
翌朝になって、そなえられた香典を数えて見ると、なんと百二十余両におよんだのである。
いまさらながら虎之助は、茂兵衛が生前、いかに重く幕府の機密に参与していたかが、わかったようなおもいがした。
この日に、池本茂兵衛の火葬がおこなわれたのだが、その遺体が骨になって、津国屋へ帰って来て間もなく、どこからきいたものか、町人姿の山田慎三郎が大坂から駈けつけて来たものだ。
「杉さん。どうも、とんだことに……」
「よく、わかりましたね」
「今朝、明け方に、知らせが入りましてな」
「なるほど……」
「池本先生と一緒にいた男も、殺られましたよ」

四

当夜。池本茂兵衛と行動を共にしていた乞食姿の密偵が、三条と四条の間の、
「ちょうど、土佐屋敷のあたりの、高瀬川へ、くびを半分突っこんで斬られていたそうです」
と、山田慎三郎は虎之助へ語った。
「それは山田さん。やはり、公儀隠密の……？」
「さよう。去年のいまごろから、池本先生について、何度も長州と京・大坂を往復していたものです」
「そうでしたか……」
「それにしても……」
いいさして、山田は沈痛な表情となり、池本茂兵衛の骨壺の前で長い間、黙念としていたが、ややあって、
「それにしても……池本先生を斬ったやつは、いったい、どこのどいつなのか……先生ほどのお方が、いかに刀を持っていなかったからといって、あまりにも、むざむざと……」
うめくがごとくいったものだ。
その山田慎三郎の声をきいたとたんに、
「はっと、なったのです。私の躰へ火がついたようにおもえましたので……」
と、のちに杉虎之助が語るには、
「そのときまで私は、ただもう先生をうしなった悲しみに、茫然となっていたわけなのだが……

その山田さんの声をきいたとき、むらむらと胸の底からこみあげてきたものは、池本先生を殺害した男への憎しみだったのですね。
あの夜の先生が、何人もの、つまり多勢の敵を相手にして闘われて、しかるのちに斬死をなすった……こういうことなら、さほどの憎しみもおぼえなかったろうとおもいます。
けれども……。
あれほどのすばらしい手練のもちぬしであられた先生が、只、一太刀で命をうばわれた。これがなんとも私にとっては口惜しかったのです。ま、これも何でしょうな、剣術をやったものでないと、わからぬ気もちかも知れませんが……。
とにかく、鴨川のながれの中から先生を運びあげたとき見た左脇腹から胸へかけてすくい斬りに切り割られていた傷口からおしても、相手はその、実に端倪すべからざるやつだ、とおもいました」
虎之助は、
(なんとしても……)
池本先生を自分の手から奪い取っていった男を討とう、と決意した。
池本茂兵衛と虎之助の過去をふり返ってみるとき、この虎之助の決心は当然のものであったといえよう。
「いわば、父の敵でございましたからね」
と、虎之助が述懐しているように、実父の杉平右衛門が病死したときのそれとは、くらべものにならぬ悲歎と痛憤であった。
「山田さん?」

「なんです……」
「先生を殺害したやつの、手がかりはつかめませんか?」
「むずかしい。このところ先生は、ずっと、私とは別にはたらいておられましてな。先日、私があなたに使いの者に手紙をことづけたのは、その前の夜に、京から大坂へ来た所司代の探索方の人が先生のことづけをもって来てくれたからです」
「なるほど……」
「数日のうちに京へもどる。そうしたら、大坂へ出て、久しぶりに酒をのもう、と、このように……ですから、あなたへ知らせたようなわけでした」
「実は、山田さん……」
と、虎之助が、前に茂兵衛の手紙と金を津国屋へとどけにあらわれた中年の旅の男のことを語り、
「それは、この前に大坂で山田さんと会い、ここへもどって来た日のことなのですが……もしや、そのお人は、公儀隠密の井関忠右衛門殿ではありませんか?」
「杉さんは、御存知なので?」
「いえ、礼子からきいた姿かたちが、よく似ているような気がしたものですから……」
「む……」
と、山田はちょっとうなり、上眼に虎之助を見つめて、
「おそらく、そうでしょう」
「それで、私がもどっていなかったものだから、ここの下男の三吉というのが井関さんのあとをつけてくれた。すると、三条・木屋町、先斗町あたり……あの辺で姿を見うしなってしまったと

いうのですよ」

「ふうむ……」

俄然(がぜん)、山田慎三郎の両眼にちからが加わり、光が増すのを虎之助は見た。

五

それから虎之助は、自分が目撃した道具屋・桝屋喜右衛門と中村半次郎の密会の件を山田へ語ったのである。

もっとも……。

中村半次郎の名は告げなかった。

それというのも、

「はじめて中村さんを見たときから、私は、あの人が好きになっていましてね。京都でまた会って、そのさっぱりとした、男らしい気性と、そのくせ細(こま)やかな親切ごころを知って尚更に、また好きになってしまいました。

そればかりか、中村さんと私との間には、お秀という、これまた、まことに奇妙な女が入っている。それだけに、どうも妙な……つまり何です、おなじ女郎を買った客同士が妙に仲よしになるというやつ。ね、そちらさまにもおぼえがございましょう？

そう、それなのですよ。こんなことを申すと、あの世にいるお秀に叱られましょうな。

いいえ、女郎どころではない。以前のお秀はね、京都とは目と鼻の先の淀十万二千石・稲葉侯の御家来で遠藤主税(ちから)という人の妻女だったのです。その御主人が亡くなったとき、子がなかったので、お秀は亡夫の実弟を養子にして家督(かとく)をつがせたのち、われから家を出て、あっちこっちとへめぐり歩いたものらしいので……これも、のちになってわかったことでございますがね」

と、こういうことになる。

で……。

中村半次郎のかわりに、東郷直二を桝屋喜右衛門の相手にしてしまった。

それというのも、東郷も半次郎と同じ薩摩藩士であるし、薩藩の密偵であることはあきらかなのだから、要するに、桝屋が薩摩のさむらいと密会をしていたことを山田慎三郎に告げれば、

(はなしのすじは通る)

と、考えたまでである。

「ふうむ……ふむ、ふむ……」

山田は、しきりにうなずき、

「よく、おきかせ下すった」

「先生が斬られていなすった場所からいっても、もしや、先生も、その桝屋をさぐっておられたのではないか、と思いましてね」

「なるほど、なるほど」

「そしてね、山田さん。私は、先生が斬られなすったすこし前に、東郷直二を斬ったのですよ」

「な、なんですって？」

「礼子の敵でしたからね」

「ふうむ……」

さすがに、山田慎三郎もおどろいたようである。

山田は、ゆっくりとしていられないらしかった。
「いろいろとうかがって、ありがたかった」
「何か、お役に立ちましょうか？」
「むろんです。京（こっち）のほうは私のうけもちではないが、役向きへしかと申しつたえておきましょう」
「先生を手にかけた男のことも、ついでながら山田さん、こころにかけておいて下さい」
「むろんです。ですが、杉さん。これからどうなさる？」
「そやつをさがしたいとおもいます」
「先生の敵を？」
「さよう」
山田は何かいいかけて、やめた。
虎之助の決意が、尋常でないことを看（み）てとったからであろう。
いつの間にか、雨になっていた。
あたたかく、霧のようにけむる春の雨の中を、山田慎三郎は津国屋から去って行った。
白川橋のたもとまで、山田を見送ってから宿へ帰って来ると、虎之助はもう、全身のちからというちからがぬけきってしまったようなさびしさに抱きすくめられた。
（もう、おれには、礼子もいなければ、池本先生もいない……）
このことであった。
二階の自分の部屋へ、池本茂兵衛の骨壺を置き、その前にすわったまま、虎之助は一夜を明かした。

万感こもごもにいたって、ねむれるものではなかったが、それでも明け方に近くなってからとろとろとまどろんだものらしい。
眼がさめると、虎之助は畳の上に横たわってい、だれが掛けてくれたものか、躰が夜具に包まれていたのである。
茂兵衛の骨壺を、このままにして置くわけにもゆかなかったけれども、いますぐに、京都を去る気もちにもなれぬ虎之助であった。
なんとしても、木屋町の桝屋喜右衛門方をさぐってみたい。
茂兵衛があの夜、桝屋方をさぐっていて斬られた……そうおもえてならなかったら、事実、そのとおりであったことが、後になってわかった。
虎之助が目ざめたのは五ツ（午前八時）ごろであったろうか。
窓を開けて、まだ、ふりけむっている雨をながめていると、津国屋の女中が熱い茶と梅干を盆にのせて入って来て、
「先生（せんせ）、お茶を……」
「あ……ふとんを片づけてくれ」
「旦那はんが、下でごいっしょに……」
津国屋長太郎が、いっしょに食事をしようといっているそうな。
「そうか。よし、行く」
虎之助が、そうこたえたときである。
明け方に大津を発った急飛脚（きゅうびきゃく）が、江戸からの手紙を虎之助にとどけて来た。

六

手紙は、叔父・山口金五郎の妻女・お浜からのものである。
金五郎が、急に倒れ、中風(ちゅうぶう)になったというのだ。
いまのところ、いのちには別条ないらしい。
しかし、まんぞくに口もきけぬし、右半身がまったく自由をうしない、寝たきりのありさまで、金五郎はしきりに虎之助に会いたがっているという。
これは、
(捨ててはおけない)
ことであった。
池本茂兵衛が虎之助の〔育ての親〕なら、山口金五郎も〔育ての親〕といってよい。
冷たい実家に育った少年の虎之助の只ひとつのなぐさめは、本所の叔父の家へあそびに行くことであった。
蔭になり、日なたになり、金五郎叔父は、痩せこけた甥をかばってくれ、あたたかくいたわってくれたものだ。
池本茂兵衛という人があらわれなかったら、虎之助は、叔父の家へころげこみ、叔父の養子にでもなっていたやも知れぬ。
虎之助は、すぐに、
(よし。江戸へもどろう。そして、叔父を見舞い、できるだけの孝養をつくし、池本先生のお骨

をほうむり、できるだけ早く、京へ引き返し、先生の敵をつきとめよう)
と、きめた。
虎之助がもしも、このとき江戸へもどらず、夏ごろまでとどまっていたなら、二度とふたたび見ることのできぬ騒乱の京都を、わが眼にたしかめることを得たにちがいない。
津国屋長太郎へ叔母の手紙を見せ、
「仕度をたのみます。昼すぎまでにはもどるから……」
「どちらへ？」
「伊庭さんにも、あいさつをしておかなくては、ね」
「なるほど」
「駕籠を呼んで下さい」
「へ。すぐに……」
朝飯もとらずに虎之助は、伊庭八郎の宿舎をたずねると、八郎は朝早く京都を発ち、公用で大坂城へ向ったという。
そこで虎之助は筆紙をたのみ、八郎へ簡単な手紙を書き置いてから〔定番組屋敷〕を出た。
そのまま、すぐに津国屋へ帰るつもりであったが、駕籠へ乗ったとたんに気が変った。
「三条、木屋町すじへ」
と、虎之助は命じた。
駕籠から下り、木屋町すじを南へ……あの桝屋喜右衛門方の前を通って見た。
軒下にのれんが掛けてあったけれども、うす暗い店先にはだれの姿も見えない。
河原町の通りへ出てから、もう一度、引き返して見た。

しかし、いまは、どう仕様もないことである。
虎之助は、四条の橋を東へわたった。
縄手（なわて）の道を三条へ出て、津国屋へもどるつもりだったのだが、四条縄手へ出たとき、
（お秀に会って、中村半次郎へのあいさつをつたえておいてもらおう）
と、おもった。
これは、虎之助が自分で自分をなっとくさせるための理由であったやも知れぬ。
やはり、虎之助は京都を去るにあたって、お秀の顔を見ておきたかったのであろう。
見て、どうしようというのでもない。
お秀は、ふしぎに、こころをひかれる女なのであった。
縄手の傘屋で傘を買い、これで雨をさけながら、祇園石段下まで来た虎之助は、そこの菓子舗〔笹屋理右衛門〕で〔住之江（すみのえ）〕という菓子をもとめ、これをみやげに、お秀をたずねることにした。
すでに、桜（はな）も散っている。
小松谷のあたりは、雨に洗われた木々の早緑（さみどり）のにおいがたちこめていた。
妙見堂の下の坂道から、松林の中へ入った虎之助は、
（いるらしいな）
彼方の庵室に、お秀が昼餉（ひるげ）の仕度でもしているのか、けむりが立ちのぼるのをみとめた。
雨は、ほとんどやみ、こころなしか空も明るんできたようであった。

大根鍋

一

松林をぬけ、竹林にかこまれた狭い庭へ入って、
「法秀（ほうしゅう）どのは、おいでか？」
虎之助が声をかけると、
「はい」
障子を開けたお秀が、
「あれ、いやな……」
「なにがいやなのだね」
「法名（ほうみょう）を、およびなさるのですもの」
と、今日のお秀は、京ことばをつかわぬのである。
「うれしいこと。杉さまのほうから、おたずね下すって……」
「別れのあいさつをしに来ましたよ」
「あれ……」

おどろいたお秀が、双腕をさしのべて虎之助の肩口のあたりを、しっかりとつかみしめ、
「いや、いや、……いやいや……」
よい年齢をして、童女のごとくかぶりを振って見せる。
「先日、中村半次郎さんと出合ってね」
「あれ……」
「津国屋で、酒をくみかわしたが……どうも、あの人はなかなかに良い男だ。好きになったよ」
「それは、いつのことでございます？」
「四、五日前だったが……」
「あ……」
うなずいたお秀が、
「きっと、その日でございます。夜になって、ここへ、半どのがまいりました」
「ほう……二、三日うちに京をはなれるといっていなかったかね？」
「申しておりました。けれど、すぐさま追い返してしまいました」
「おやおや……」
「ま、杉さま、いつまでも、そのようなところに立っておいでになっては、いやでございますもの」
「いやでございますもの」
お秀が豊満な躰をひねって、虎之助の手をとり、庵の中へ引き入れた。
という、そのいいまわしも妙なものなのだが、それだけに、お秀の情感があふれるばかりにきこえてくる。

虎之助のほうから自分を訪問してくれたことによって、お秀は自信を得たものらしい。
「別れに来た」
という虎之助のことばも、一つの口実だとおもっていたようだ。
わらぶき屋根の、この庵室の内部は小さな二つの部屋と台所から成っている。
庭に面した部屋が、お秀の法秀尼の居室で、奥が仏殿というわけか……。
仏殿といっても、簡素な仏壇に高さ二尺余の釈迦像が安置され、その下に、二つの位牌がならべられてあるだけのものであった。
「昼飯は？」
と、お秀がきく。
「いや、まだ……」
「では、ごいっしょに」
「かまわぬでくれ」
「お顔の色がすぐれませぬ。さっきから見ておりましたが、すっかり、おやつれになって……」
「いや、そうでもない」
「うそ、うそ」
「なぜね？」
「どこぞの女ごはんと、ええことしていやはるのや」
「ばかをいいなさい」
いまの虎之助は、それどころではない。こうして、お秀と語り合っているうちにも、池本茂兵衛のおだやかな死顔が脳裡をよぎってゆくのである。

お秀が、白衣からはじけて出そうな肥やかな臀部を虎之助へぞんぶんに見せつけつつ、台所へ入って行った。

虎之助は立ちあがり、この前に来たとき、見ておきたいとおもった仏殿の二つの位牌をながめた。

一つは、

〔法誉教信居士〕

とあって、男の戒名だが、別の一つは、

〔芳誉妙静信女〕

で、これは女のものであった。

いつの間にか、台所から出て来たお秀が、

「その御位牌は、一つが私の夫のもの。一つが、この庵室を建てて下されたお人の母ごのものなのでございますよ」

と、虎之助の背へ声をかけてよこした。

「その、お人とは？」

「むかし、夫が京におりましたころの知り合いにて、松原油小路の紙問屋・菱屋五兵衛と申されます」

お秀の亡夫・遠藤主税教元は、長らく淀藩の京都屋敷で御役目についてい、藩邸へ出入りをしていた菱屋五兵衛とは浅からぬ親交があったという。

諸国を好き勝手にめぐり歩き、京都へあらわれたお秀の身を心配した菱屋が、お秀へ仏門に入ることをすすめ、この庵室を建ててくれたものであった。

男が僧門へ入るのとちがい、女の場合は金しだいで、短時日のうちに、庵室をかまえる尼僧になれるものらしい。

二

お秀は、虎之助が持参した菓子の箱を仏殿にそなえてから、虎之助の背中を押すようにして居室へもどり、仏殿との境の杉の板戸をきっちりとしめた。

小さな火鉢に鉄の鍋が置かれ、ふつふつと湯がたぎっている。

お秀が台所から持ちはこんで来たものだ。

「酒は、冷えたままで、よろしい？」

と、お秀が上眼づかいにこちらを見ていう。

どうも、ときどき、ふしぎなことばづかいをする女ではある。

しめきった障子を透して、せまい部屋へながれこんでいる春の光りがやわらかい。

いつの間にか、陽がさしてきたようであった。

二つの茶わんへ、お秀が冷酒をつぎ、これを虎之助と自分の前へ置き、それから長い菜箸をとり、大きな平たい笊の上へさしのばした。

笊は、清らかな白い布巾におおわれ、その上に、部厚く輪切りにされた大根がたっぷりと盛られている。

大根のほかには、なにもない。

その大根を、お秀は鍋の中の煮えたぎった湯の中へ入れこみ、虎之助を見て、にっと笑いかけ

る。

(ははあ……大根を湯で煮て、食わせるつもりか?)

　これまでに、そんなものを食べたことがない虎之助であった。

　小さな鉢に生醤油を入れたものと、皿と箸が出た。

(つまらぬものを、食べているのだな)

　とおもった。

　茶わんの酒を一気にのみほした虎之助が、新しい酒をのみ終えぬうち、

「さ、食べごろでございますよ」

　お秀が、鍋の中の大根をとって小鉢の醤油へひたし、すぐに引きあげて皿へうつし、

「さ、早う」

「うむ……」

「む……」

　虎之助、がぶりとやって見て、

　うなり声をあげた。

「いかが?」

　と、お秀。

「む……これは……うまい。うまいよ、うまい」

　世辞ではなかった。

　京の野菜のうまさは江戸の比でないことを、虎之助もよく知っていたけれども、このようなむぞうさな調理による大根の野趣横溢な食べ方をしたことはない。

「これはどうも、実に、大したものだ」

「さ、これも煮えておりますよ」

「うむ、うむ……や、うまい」

「お躰が、あたたまりましょう?」

「うむ、うむ」

　肌に、汗が浮いてきた。

「大根が、これほどにうまいとは知らなかった……」

「滋味そのものでございますねえ」

「まことに、そうだ」

「なまじに、手をかけませぬところがよろしいので」

「なるほど」

「さ、もう一つ」

「ありがとう」

「お酒も」

「うむ……」

　大根も酒も、たっぷりと腹へ入れた。

　池本先生が亡くなってよりこのときまで、虎之助はろくにものを食べていなかった。いや、食べる気にさえなれなかった。それほどに強く烈しい悲嘆であったともいえよう。

「とにかく、うまかったのです。お秀は別に、私をもてなそうとして仕度をしたわけではなかったのでしょうが……あのときの私の口には、あの大根の味が、もっともよく合ったのでございま

しょうな。のちに、何度も自分でやってみましたが、あのときほどのうまさはなかった。よく見ますとね。鉄の鍋の、くらくら煮えたぎっている湯の中に、小さな布袋（ぬのぶくろ）が沈んでいるのですよ。

で、お秀に、これは何か？……と、ききましたところ、お秀がこう申しました。袋の中には米（よね）が入っております、とね。米（こめ）をよねという。そりゃまあ、たしかにそうなのですが、どうもときどき、芝居もどきに、お秀は妙ないいまわしをするのでございました」

と、虎之助が語りのこしているけれども、さて、大根と酒がおしまいになると、横坐りにひざをくずしたお秀の青々と剃りあげたあたまが、いつの間にか、虎之助の胸もとへぴったりと寄せつけられていたのである。

三

お秀は、もう何もいわなかった。

虎之助の胸へ顔を押しつけつつ、右腕を男の腰へまわし、左手がゆっくりと、虎之助のえりもとへさしこまれてきた。

「お秀さん。なにを、しようというのだね？」

お秀、だまっている。

「私は、そんなつもりで、来たのではない」

お秀は、こたえない。

いつの間にか、はだけた虎之助の胸肌へお秀が顔をうめ、くちびるでまさぐってくる。

お秀のやわらかい舌（した）の先がちろちろと虎之助の胸肌をなぶってくるのである。

どうにも、困った。

これまでにされては、虎之助もどうにかなってしまいそうであったが……。

やはり、どうにもならぬ。

先ず、礼子の顔が胸に浮かんでくるし、池本先生の声が耳によみがえってくる。

事実、礼子に死なれてからの杉虎之助は、女に一指（いっし）もふれていない。

それが、苦痛でも何でもなかったのである。

それに、いまひとつ……。

板戸一枚をへだてた向うの仏殿に、お秀の亡夫の位牌があるのだ。

その位牌の前で、お秀を抱くというのは、どうもいけない。

「……お秀さん。それは、たしかに、お前さんに会いたくて来た。来たのだが、ひとつには、中村さんへ伝言をたのみたいとおもったし……いろいろと、中村さんには親切にしてもらったのでね」

まだ、お秀はこたえようとはせぬ。

そればかりか、お秀の両手のうごきはしだいにちからを加えてきて、身うごきをするたび、ゆるやかに身にまとった白の法衣のえりもとがくずれ、躰にくらべて意外にすんなりと細いお秀のうなじから、にわかにもりあがった左肩のあたりが露出し、その烈しいあえぎが熱く熱く虎之助の肌へつたわってくる。

実は……。

虎之助は中村半次郎へ、

「せっかくお引き合せ下すった貴藩の東郷直二殿を斬ったのは私である。東郷殿は亡き妻を殺害したので、その敵(かたき)を討った」

このことを、お秀からつたえてもらおうと考えていたのだ。

半次郎が親切にも紹介してくれた東郷直二だけに、だまって江戸へ去るのは、

(男のすることではない)

と、おもったまでである。

鴨川の河原へ斬って捨てた東郷の死体はすでに発見されているだろうし、身もともわかって薩摩屋敷へ引きわたされたとみてよい。

もっとも、昨今の京都では諸藩の士(もの)や浪人、志士たちの死体が見つかったところで、だれも彼もおどろきはせぬ。

こうした血なまぐさい事件は、

「日常茶飯のこと」

になっている。

もちろん、中村半次郎へこのことを告げれば、虎之助の身も危ないことになる。

だが虎之助は、薩摩藩を相手に、あえて闘ってみるつもりでいた。

どちらにせよ、いま一度、京都へもどって来て、池本茂兵衛殺害の犯人を、どこまでも追いもとめる決意に変りはない。

「これ、お秀さん……」

「……」

「やめなさい。これ……」

「……」

「実はね、中村半次郎さんへ折入って、つたえておいてもらわねばならないことが……」

虎之助が、そういいさしたときであった。

顔をあげたお秀が二度、三度と激しくかぶりを振ったかとおもうと、虎之助の両ひざへ重い腰を乗せかけるように、狂気のごとく、着ている法衣をぬぎ捨ててしまった。

ぬぐ、というよりも、みずからむしり取ったような感じであった。

卵色のお秀の肌には、なめらかな凝脂(ぎょうし)がみなぎりわたってい、虎之助の目の前にゆれている双の乳房の量感が、まさに圧倒的なのである。

「いや、いやいや、いや……」

ほとばしるように叫んだお秀が、双腕を虎之助のくびへ巻きつけ、のしかかってきた。

「あ。……なにをする……」

おもわず、仰向けに倒れた虎之助へおおいかぶさったお秀が、たばさんでいた虎之助の小刀を引きぬいて向うへ押しやり、そのまま、袴のひもをほどきにかかった。

すさまじいばかりのお秀の情熱であった。

虎之助は、こう語っている。

「ずっと後になってからのことでございますが……お秀は、こう申しておりましたよ。

私の躰の中には、異国の血がまじっている。父母はともに日本人だが、私もよくは知らぬ祖父は、遠い海をわたって日本へ来た眼の青い人であった、と、このようにね。

お秀の父親は、稲葉侯につかえていた医者で、名を丹羽良仙(にわりょうせん)といったそうですが、実の父ではなかったと申します。お秀が丹羽家の養女となったのは五、六歳のころだったらしいので……」

とにかく、このような仕ぐさをする女を虎之助は見たことがない。

江戸の家で、お秀をはじめて抱いたときも、その強烈なこたえ方に瞠目したものだが、あのときにはまだ、お秀にもいささかのはじらいがあったといえよう。

いまのお秀は、女の……けだものであった。

叔父の家

一

とにかく、さすがの虎之助も、このお秀の狂態にはおどろきもし、あきれもした。

とにかく、当時の日本の女のふるまいとしては常軌を逸している。

とにかく、

「どうにもなりませんでね、あのときは……」

であった。

お秀の腕から、いや、その肉体から逃れ、大小の刀を抱えこみ、虎之助はほうほうの態で庭先へ飛び出した。

「ああ、虎さま……虎之助さま……」

と、裸体のまま、すがりついて来るお秀を突き退け、ぴしゃりと障子をしめきった杉虎之助が、

「た、た、達者でいなさい」

この一言を投げつけておいて、すっかりひものゆるんだ袴をたくしあげたくしあげ、一散に松林の中へ駈けこんだ。

こうなると、いかなお秀も裸体であるだけに、外へは追って出られない。

あとのお秀がどうしたか、それはわからぬ。

虎之助は夢中で逃げ、「大谷」とよばれる本願寺の廟所(びょうしょ)の傍の坂道から妙見堂の木立へ入り、そこで、ようやくに身仕度をととのえたものである。

そして、ついに虎之助は、肝心(かんじん)の中村半次郎への伝言を口に出さぬまま、お秀の不了庵から去った。

そのまま、津国屋へもどり、

「これから江戸へ発つ」

虎之助がいい出したのをきいて、長太郎夫婦は、

「明日の朝になされたら……」

しきりに押しとどめようとした。

別れの宴をもうけるつもりでいたらしい。

だが、虎之助のこころに、そのゆとりがうしなわれている。

すぐにあとから、お秀が津国屋へ押しかけて来るような気がしてならず、どうにも落ちつけなかった。

「日暮れには、まだ間があるし……大津までは、じゅうぶんに行けよう」

と、手早く旅仕度をととのえ、虎之助は、

「御主人。いろいろと御世話になりましたねえ。虎之助は決して忘れませんよ」

「なにをおっしゃいますことやら……」

「おそらく、今年中には、またきっと、こちらへもどって来ます。そのときは、よろしく……」

「はい。お待ち申しあげております」

津国屋夫婦と下男・三吉。それに女中たちが、白川橋のたもとまで、虎之助を見送ってくれた。

雨はすっかりあがって、やわらかい午後の陽ざしに街道の土もほとんどかわいている。

予定のごとく、この夜は大津泊り。

翌朝早く大津を発ち、東海道を下って行きながら、虎之助は、池本茂兵衛の死以来、ずっと考えつづけてきていることを、

(さて、どうしようか……)

まだ、決めかねていた。

それは、茂兵衛の故郷へ、

(先生の御骨(おほね)を、いちおうは持って行かねばいけないのではないか。そして、場合によっては分骨(ぶんこつ)をしていただき、それを江戸へうつし、礼子とおれの墓とならべて新しい御墓を……)

そう、おもっているのだ。

かつて虎之助が茂兵衛につれられて旅をしたころ、近江の国・水口(みなくち)城下の醸酒業で土地(ところ)の庄屋をつとめている池本忠右衛門方へ、二度ほど滞在(たいざい)したことがある。

まだ三十前の当主であった忠右衛門は、茂兵衛のことを、

「おじさま、おじさま」

と、よんでいた。

だからといって、茂兵衛は忠右衛門の伯父でも叔父でもないらしい。

ただ、縁類であることはたしかだ。姓も同じ「池本」なのである。

虎之助は茂兵衛に、この庄屋の池本家との関係を問うたことがある。

そのとき、池本茂兵衛はほろ苦く笑い、

「わしの生い立ちは、いろいろと、こみ入っていてな。そうしたことをいちいち語るのもめんどうだし、またお前に語ってみたところではじまらぬことなのだ」

といい、

「わしも、剣術なぞというものが好きにならなかったら、水口で酒つくりをしながら、一生を終えたことであろうよ」

ともいった。

よほどに、茂兵衛の生いたちには複雑な事情があると、虎之助は看てとり、以後は二度と問いかけたことがない。

それはそれとして……。

(ともあれ、水口の池本忠右衛門殿へは、先生の御骨をお見せしなくてはなるまい)

と、おもっていたわけだが、大津から草津をぬけ、石部の宿へかかるころには、かつて池本茂兵衛がさりげもなく虎之助へ洩らしたことばが、強く想い出されてきた。

そのころから茂兵衛は公儀隠密の役目にはたらいていた故もあってか、

「のう虎よ。もしも、わしが急に、この世を去ったときのことだが……そして、そうしたときに、まだお前がわしのそばにいたらのことだが……そのときは、すこしもためらうことなく、おれの死体を灰にしてしまい、お前がおもうように始末をしてもらいたい」

こう、いったことがある。

当時の虎之助は、先生が秘密の役目にはたらいていることなど、すこしも知らなかっただけに、身を入れてはきかず、

「御冗談を申されます」

笑って、ききながしてしまったものだ。

そのとき茂兵衛は、こうもいった。

「わしが死んだなら、水口の池本家へは知らせるにはおよばぬぞ。よいか、このことをよくおぼえておいてくれ。わしが死んだことになると、それはそれで、またいろいろと水口でもめごとが起るのだ」

二

結局……。

虎之助は水口城下を素通りして、翌日は一気に鈴鹿峠を越えてしまった。

師の遺言ともとれることばに、したがったわけだが、

(先生は、おれ一人のものだ。いや、おれの父上同様なのだから、おれ一人がよいようにすればよい)

と、そこへようやく決意がさだまったのである。

虎之助が江戸へ到着したとき、陽の光りも風のにおいも、初夏のものといってよかった。

旅姿のまま、どこへも立ち寄らずに、まっすぐ本所・石原の叔父・山口金五郎宅へあらわれた虎之助を見て、

「まあ、虎之助さん、よ、よく、早く帰って……」

叔母のお浜が、飛び立つようにして迎え入れた。

「叔父上は？」
「どうやら、すこし、もち直したようですよ」
「あ……それは、よかった。ようございました」
すぐに、病間へ通った。
小さな庭先からさしこむ陽光をうけて、山口金五郎は床に寝ていたが、虎之助を見るや、もどかしげにくびをうごかし、いささかは自由のきく左手をさしのべ満面をゆがめつつ、
「あ……うう……」
もつれる舌を懸命にあやつろうとする。
「叔父上。ただいま、もどりました」
「う、うう……あ……」
金五郎叔父の満面は、あとからあとからふきこぼれる泪にぬれつくした。
虎之助も胸がいっぱいになった。
このとき、虎之助はこうおもった。
（ああ。ここにも、おれの父上がいた……）
そして、茂兵衛をうしなった悲しみも怒りも、この一瞬は消えてしまい、得もいわれぬ幸福感をおぼえた、というのである。
（おれには、三人もの父がいた）
このことであった。
実父の杉平右衛門については、憎しみもないかわりに、茂兵衛や金五郎へ感ずるような深い愛情をもてなかった。

けれども実父が亡くなる前に、偶然、永代橋の上で出合ったときの印象が、まことによかったものだから、いまの虎之助はわが手で実父の墓をこしらえ、礼子のそれと共に、金杉の安楽寺へうつしてある。
「あ……う、う……」
金五郎叔父が手つきで虎之助へ酒を出せ、と妻女へ命じた。
次の間で、老僕の与平が、これも泣きしきっている。
（みんな、年をとった……）
しみじみと、虎之助はそうおもった。
このとき、山口金五郎は四十四歳で、現代ならはたらきざかりというところだろうが、そのころの男の寿命は五十年といわれていたほどだし、当時の感覚とすれば老人の坂道へ一歩、足をふみ出したものとされていたとおもってよかろう。
叔父夫婦のひとり娘・お千代が買物から帰って来たのは、このときであった。
「虎さんが、帰って来ましたよ」
お浜にいわれて、おずおずと病間へ入って来たお千代が、虎之助を見るや、たちまちにえりもとから顔へかけて血をのぼらせ、
「お帰り、なさいまし」
おもてを伏せた態に、十八歳の乙女の初々しい色気がにじみ出ているのに、虎之助も目をみはるおもいがしたものだ。
わずかの間に、
（女は、これほど変るものか……）

であった。
　虎之助と礼子が夫婦になってからは、虎之助を避けよう避けようとしていたお千代であったが……。
「う、ひ、ひゃひゃ……う、うう……」
　わけのわからぬ声を発し、山口金五郎がお千代を左手で指し、さもうれしげな笑顔となった。
「お父さま。いや」
　叫ぶや、お千代が両のたもとに顔をおおい、病間から駈け去った。

三

　虎之助が帰って来てみると……。
　京都ばかりではなく、江戸にも、ようやくに動乱の影がただよってきはじめていた。
　このときまでは、いかに政局があわただしく変転しようとも、
「なんといっても江戸は将軍家のひざもと」
　であるというわけで、江戸の町が、直接に、ゆれうごいている日本の様相を肌に感じるということはなかったといってよい。
　ところが……。
　これは虎之助が江戸へ到着するすこし前に、徳川将軍家とは、もっとも血すじが近い御三家の一つである水戸藩に内乱が起った。
　水戸藩は、現・茨城県水戸市に本城を置き、三十五万石の大名として、藩祖・徳川頼房（家康

の子のひとり）以来、将軍補佐の姿勢をくずさなかった。
　黄門・徳川光圀は頼房の子で、水戸藩主となってから藩政を完全にととのえ、かの「大日本史」の大著を編纂した。
　日本の歴史と水戸藩との強いむすびつきは、このときからはじまっている。
　日本の歴史と日本の天皇の存在とは、
「切っても切れぬ」
　ものであることは、いうをまたない。
　徳川光圀の勤王精神というものは、まことに強烈なものであって、水戸藩の幕府政治へ対する批判は、いろいろと根もあろうが、およそ、ここに発しているといってよい。
　ま、黄門さまの生きていたころはそれでよかったろう。
　だが、何代も藩主が代るうちには、将軍家の親類であり、諸大名を将軍と共に統べて行くべき水戸藩であるべきなら、いたずらに反骨を誇示すべきではないという家臣たちも、あらわれてくる。
　幕末となってからの藩主・徳川斉昭（烈公とよばれた）が、アメリカ艦隊の日本入港をきっかけとした動乱初期に、
「夷狄を追いのけよ！」
　と叫び、尊王攘夷運動の先頭に立ったことによって、水戸の藩論は、この殿さまの激しく強引な姿勢の前に統一されたかのように見えた。
　もっとも、そのころは、斉昭の子で一橋家へ入っていた慶喜を将軍の座につけるための運動で、水戸藩は熱気にあふれていたともいえる。

この熱気は――。

大老・井伊直弼の、

「いやでも港を開き、外国との交際に応じなくては、日本は諸外国の武力の前に屈するよりほかはない」

という、これも断固とした「開港論」と、その政治姿勢を、つらぬき通すために新将軍として推したてた家茂（いえもち）（紀州家の出）の擁立（ようりつ）運動と闘って敗北した。

ここに……。

新しい日本の指導者として起とうとする水戸藩の野望は消え、徳川斉昭をはじめ、水戸藩に同盟した諸大名や志士たちが井伊大老によって弾圧されたわけである。

その斉昭は失望と激怒のうちに、四年前の万延元年に、宿敵・井伊の後を追うかたちで病歿してしまっている。

それからのちの水戸藩は、

「尊王か、佐幕（さばく）か……」

と、ゆれうごく時勢の象徴であったといってよい。

家臣たちは、二派に別れ、対立し、争い、闘いはじめた。

その内紛が、ついに爆発したのである。

すなわち「天狗党」の挙兵であった。

「天狗党」は、亡き藩主・徳川斉昭の政治改革の折、水戸藩内に生まれた集団で、身分のかるい藩士たちが中心になっている。

「一日も早く、外国勢力を追いはらって、天皇の御世を迎えるべし！」

と、彼らは筑波山へたてこもり、将軍と幕府へ反旗を打ち立てたのである。

水戸と江戸とは間近い。

京都と江戸の差ではない。

その間近にいる、将軍の親類である大名のところから反旗がひるがえったのだ。

江戸が、騒然となったのは当然である。

（こいつは、いまに江戸も、ぶじではおさまるまい）

と、虎之助は感じた。

金五郎叔父の看病にはげみつつ、虎之助は、近く将軍と共に江戸へ帰って来るはずの伊庭八郎を待ちかねるおもいであった。

慕情

一

山口金五郎は、虎之助が帰って来たので、いささか昂奮してしまったらしく、また、病状が悪化した。

中風のみではないらしい。

近くに住む岡杏伯（きょうはく）という町医者が診察・投薬をしてくれているのだが、

「だいぶんに、その、胃の腑がよろしゅうないようじゃ」

と、杏伯先生、くびをかしげているのである。

虎之助は、そのまま山口家へ寝泊りすることになった。

金杉の屋敷は、これを抵当に……というよりも二度と帰らぬつもりで、虎之助としては伊庭八郎に、

（買ってもらったつもり……）

でいたのだから、そこへ寝泊りするわけにもゆかぬ。

金五郎叔父が快方に向ったなら、すぐさま、ふたたび京都へ引き返す決心に変りはない。

江戸へもどって五日目……。

虎之助は、看病しつづけていた叔父の枕頭（ちんとう）をはなれ、外出をした。

谷中・八軒町の石屋を尋ねたのである。

石屋のあるじ・太兵衛は七十に近い老人だが、あらわれた虎之助を見て、眉をひそめた。

この客のように、つぎつぎと新しい墓石を注文するのを、ふしぎにもめずらしくも思ったからであろう。

「また、たのむ」

「こ、今度は、どなたさまがお亡くなりに……？」

「父だ」

「え……ですが、旦那。たしか四年前に……」

「あれも父、今度のも父だ」

「へへえ……？」

先年の初冬につくらせた礼子の墓と同じような墓石をえらんだ虎之助は、みずから書きしたためてきた〔池本茂兵衛之墓〕の文字をわたし、歿年月日を告げ、

「今度も急ぐのだ。よろしく、たのむ」

「かしこまりました」

谷中から、金杉の安楽寺へ立ち寄った杉虎之助を、

「いつおもどりに？」

英誉をはじめ、寺僧たちがおどろいて迎えた。老和尚は不在だという。

虎之助は、簡単に、池本茂兵衛と自分との関係を語り、新しくできる茂兵衛の墓について、

「よろしく、たのみます」

と、いった。

久しぶりで、虎之助は実父・杉平右衛門と礼子の墓の前に立った。

墓地をかこむ木立から、新緑のにおいが濃厚にたちのぼっている。

二つの墓のうしろにある朴の木が、白い花をふっくりと咲かせていた。

墓を拝み終えた虎之助が、ただ一人つきそって来てくれた僧・英誉に、

「どうもねえ……」

ためいきと共に、

「私は、こうした運命なのだと、つくづくおもいますね」

「え……？」

「こころに想い、いつまでも長く、共どもに暮すべき人と出合うたびにはかなく、こうして死に別れて行くという……」

「杉さん……」

「え？」

「同じことですよ」

と、英誉は仏門の人らしく、

「長く暮したとて、いつかは、はかなく死に別れるのです」

「ふうむ……」

「ところで、杉さん。実は、三日ほど前でしたが、あなたの家の庭へ妙な男が入りこんでおりましてね」

その二人の男は、いかつい顔だちの侍姿で、いつの間にか虎之助の旧宅の庭へ入りこみ、家のまわりを、

「何やらものを嗅ぎまわるような恰好で……」

歩きまわっていたそうな。

折しも、根岸の檀家へ出かけての帰途、虎之助旧宅の前を通りかかった英誉が、

「もし、この家に何ぞ御用でも？」

垣根ごしに問いかけると、二人の侍は、ちょっとおどろいたようだが、すぐに笑いをうかべ、

「この家のあるじ殿は？」

「いまはもう、おいでにはなりませぬよ」

「ふむ。どこへ行かれた？」

「さて……ようは存じませぬ。なんでもこの家を人にお売りなされ、いずこかへ立ちのかれましたようで」

と、英誉も、礼子があのように亡くなってからは、注意ぶかくなって、めったなことは口に出さぬ。

うなずき合った二人の侍は、すぐに門から出て、金杉の通りの方へ去った。

二人とも、強い国なまりがあったというから、

（おそらく、薩摩の者だろう）

虎之助は、そうおもった。

いずれにせよ、東郷直二の死によって、虎之助が偽名につかった〔山本平三郎〕の名は、京の薩摩藩邸に記憶されたものと考えてよい。

なぜなら……。
　東郷が虎之助に斬殺された前日に、山本平三郎の名で東郷へわたした呼び出しの手紙が、後に発見されたと見てよいからである。
　そのことが、中村半次郎の耳に入れば、たちどころに杉虎之助の偽名が〔山本平三郎〕だと知れてしまう。
　怪しい侍二人が、旧宅の庭へあらわれたのは、
（知れた、ものと見てよいだろう）
　と、虎之助はおもった。

二

「ところが、その後、困ったことになってしまいましてね」
　と、後年に杉虎之助が語り残している、その声をしばらくきこう。
「……と申しますのは、金五郎叔父のひとりむすめ、お千代のことなので……いえいえ、とんでもございませんよ。のろけているのではない、まことのことなので。
　どうもその、私の口から申しにくいのだが、つまりその、お千代は従兄の私を好いていたのでございますね。私も、お秀の法秀尼へは、前に申しのべましたように、その気など毛頭おこりませんでしたが……お千代の、ひたむきな女のこころが、その両眼に凝められ、その眼で見つめられると、胸がさわぎましたもので。
　いえ、十七、十八の年ごろのむすめというものは、そりゃもうどのような顔だちのむすめでも、

凄いほどの美しさが出てくるものでございますよ、それはもう、ほんのわずかな間でございますがね。
　それに、あの年ごろのむすめの一途におもいつめてくる気魄というものは……そりゃもう大したものなので。
　或晩のことでしたが、金五郎叔父の病間のとなりの、せまい三畳ほどの部屋……そこで、私がねむっておりますとね。何かその、人の気配がする。はっと目ざめました。
　すると……するとでございますよ。
　いつの間に入って来たものか、お千代が、私の枕もとへすわりこんでいて、凝とこう、私の顔を見おろしているではありませんか。驚きましたね、これには……。
　あたりは、しいんとしている。叔父も叔母もねむりこんでしまった夜ふけのことなのです。
　どうした……と、私が、たまりかねて声をかけた、そのとたんに、お千代がものもいわずに、仰向けに寝ている私の胸もとへしがみついてきたものです。
　お秀のときよりも、このときのほうが、私にはこたえました。なにしろあなた、襖ひとつへだてて金五郎叔父が寝ていることですし、合せて四間か五間ほどの小さな家なのですから、どうしようもありません。おもえば、十八かそこらの……しかも、とりわけて温和しい無口のお千代が、よくもあのようにおもいきったまねをしたものなので……。
　そうするうちにも、こちらの胸へぴったりと顔をつけているお千代のあえぎが昂まってくる。
　ええもう、ひとことも口をきかないのでございましてね。私の肩から腕のあたりをお千代がつかんでいる、そのちからの強さにびっくりしたものです。
　私も……妙に、この、気が昂ぶってまいりましてね。なまじ、叔父夫婦にきこえてはいけない

とおもうものですから、声もたてられないし、音もたてられない。凝(じっ)として、お千代を胸に乗せているだけに……いえもう、まことに辛(つ)ろうございましたよ。お察し下さいまし。

ですが、しかし……。

やはりどうも、私にはまだ、礼子のことが忘れきれない。これが、どこぞの岡場所の女ででもあったら、別にどうということもありませんが、お千代と妙なことになってしまうと、もう取り返しがつきません。

それでなくとも、江戸へ帰って来た私を見てから、金五郎叔父が口でものをいえなくとも、眼にものをいわせるのです。

つまりその、私の傍へ、何かの用事でお千代があらわれたりすると、わなわなふるえる指先でお千代を指し、それから私を見て、何度もうなずいて見せる。お千代をたのむ、というわけです。おれも長いことはないから、お千代と夫婦になって、山口の家をついでくれ……と、こういっているわけなので。

どうやら叔母も、その気になっているらしい。ま、それはそれでよいのですが、なんとしても、こちらはその気になれないのです。お千代の躰をうけとめていて、妙な気もちになったというのは、何も、お千代と夫婦になろうというのではない。女の躰が久しぶりに私を……つまりその妙な気もちにさそいこんできたわけで。まったくそれは、久しぶりのことでございました。

礼子が亡くなって以来、私は女の躰へゆび一つふれないできていた。いえ別に、ふれたいともおもいませんでしたが……この夜は、自分で自分が、どうにもならなくなってきそうにおもえました。

あの年ごろの、むすめの躰というものは、実にどうも大したもので……。

や、つまらぬことを長々と申しあげてしまいましたねえ。ええ、ついに手が出ませんでした。私はお千代に、こう申しましたよ。

わかっている、お前さんのこころもちはよくわかっている。いるけれども、私はこれからなさねばならぬことがある。まだ、お前も若いのだし、私もよくよく考えてみるから、とにかく、いまはいけない。ここで、このようなことをしていてはいけない、とね。いやもう冷汗(ひやあせ)ものでございました。

なんとかいいきかせて、お千代がこっくりとうなずき、私の躰からはなれて、小廊下の方へ出て行ったときには、まったくもって、ほっといたしました。

そのとき、こうおもいました。ここに、あまり長く暮していてはいけない、と……」

三

将軍・家茂(いえもち)が大坂から海路を江戸へ帰って来たのは、五月の二十日であった。

それから七日後の夕暮れどきであったが……。

買物に出たお千代が、若い侍をともなって帰って来た。家の近くで、

「このあたりに、山口金五郎さんとおっしゃる……?」

と、若い侍に問われ、

「それならば、わたくしのところでございます」

とお千代が、つれて来たのである。

この侍、名を小出又三郎といい、伊庭道場の門人であった。

小出又三郎は、本所三ツ目通りに住み、金五郎叔父と同様、五十俵二人扶持の小普請である。
あとできくと、又三郎の亡父・伝兵衛を、金五郎はよく見知っていたそうな。
「伊庭先生より申しつかりまして、おたずねいたしました」
小出は、はきはきとした口調で、
「金杉の御宅へまいりましたところ、お帰りがないとのことで……それならば、こちらへおたずねしてみよ、と、先生が申されましたので」
「御苦労さん。先生は京からおもどりか？」
「はい、昨夕、御徒町へもどられました」
伊庭八郎たち奥詰の士は、将軍が大坂を発する前に、陸路を江戸へ向って発ったのだという。
「おさしつかえがございませんでしたら、これより、上野広小路の〔鳥八十〕までお出向き下さいませんでしょうか。先生が待っておいでになります」
「あ、まいりましょう」
「御供をいたします」
「それにはおよばない。わかっていますよ」
「さようでございますか……」
「お前さんは、お宅も近いのだ。これから上野まで行くことはない」
「杉先生。それでは、これで……」
「ありがとう」
小出又三郎は門口から引き返して行ったが、そのとき、虎之助と共に見送って出たお千代へ、
「おかげで、助かりました」

と、あいさつをした。
してから、虎之助へ、
「杉先生。また、うかがってよろしいでしょうか？」
こういったものである。
「ああ、よござんすとも」
何気なくこたえた虎之助が、ひょいと見ると、小出又三郎が虎之助から移した視線をひたとお千代へ向けて、
「では、また、お目にかかります」
という。
いやもう、実に物怖じをせぬ若者であった。
「ははあ……こやつ、お千代が気に入ったのか。それにしても眼の早いやつだ」
虎之助は苦笑をもらした。
お千代は、別に又三郎に関心がないらしく、おじぎをするや、すぐに家の中へ入ってしまった。
虎之助が手早く仕度をすませ、番場町の〔駕籠音〕という駕籠屋で駕籠をたのみ、上野広小路の〔鳥八十〕へ着くと、
「やあ、見つかった、見つかった」
伊庭八郎が、元気な顔を廊下へ見せ、
「小出のやつ。本所へ行きましたかえ？」
「来ましたよ。いい御門人ですね」
「とんでもねえ。剣術のほうはからきし駄目なのだが、万事によく気がついて重宝なやつです。

さ、お入んなさい、虎さん」
「ありがとう」
八郎と共に、江戸で酌む酒も久しいことになる。
「いやはや、今度の、京での虎さんのはたらきぶりには、びっくりした」
「それよりも八郎さん。京都はどうですね？」
「それがさ……」
伊庭八郎は、虎之助の盃へ酌をしてから、ためいきのように、
「どっちにしろ、いずれ、大戦は避けられないねえ」
「ふうむ……」
「近いうちに、京は、とんでもないことになりそうだ」
この伊庭八郎の直感は、それから間もなく、かたちとなってあらわれた。

戦火

一

あの〔池田屋事件〕が、京都で起ったのは、翌月の五日であった。
これを、〔鳥八十〕の二階座敷で、伊庭八郎からつたえきいたとき、杉虎之助は、
（やはり、そうだったのか……）
さすがに昂奮を押えきれず、酒の味もわからなくなってしまった。
この春……。
京都にいた虎之助が、なんとか池本茂兵衛の手がかりをつかもうとし、さぐりをかけていた四条木屋町の道具商桝屋喜右衛門。これが、ついに捕えられた。
幕吏に捕えられたのではない。
京都守護職・会津侯預りの新選組が捕えたのだ。
〔桝屋喜右衛門〕こと勤王志士・古高俊太郎については、池本茂兵衛をはじめ公儀の密偵が探索をすすめていたわけだが、新選組は、
「怪しい」

という情報をつかむや、すぐさま、桝屋へ押しかけ、古高を捕えてしまった。こういうところは、もともとが、機動性に富む浪士隊であっただけに、新選組の行動は実にすばやい。

勤王派の地下運動が烈しくなるばかりの京都で、武州・多摩出身の近藤勇がひきいる新選組の活動のすさまじさは、虎之助もよく知っている。

なまじ体面だの、めんどうな手つづきを経なくては身動きもせぬ幕吏とちがい、新選組は、

「会津藩と共に、京の地をまもりぬこう」

という一途の気概に燃えていて、何事にもいのちがけのはたらきをする。

この年の五月に入ってからは会津藩士・松田鼎をはじめ、幕府側の人びとが何人も暗殺され、勤王派の蠢動がにわかに苛烈となってきた。

その矢先に、古高俊太郎が捕えられたのである。

新選組は古高を壬生の屯所へ引き立てて行き、有無をいわさぬ拷問にかけ、責めぬいたあげく、古高をついに白状せしめた。

その白状によると……。

来る六月二十日前後の、風の強い日をえらび、大坂から京都にかけて潜入している志士たちがあつまり、なんと天皇おわす御所へ火をはなち、京都市中を混乱におとし入れようというのだ。

その混乱に乗じ、志士たちは、親幕派の公家・中川宮をはじめ、会津侯松平容保を襲撃して首をはね、幕府側の諸大名藩邸へも放火する。

場合によっては、孝明天皇を、

「京都から長州の本国へ、うつしまいらせよう」

というものである。

口では、

「勤王」

をとなえながら、手段をえらばず、皇居へ放火して天皇をうばい取ろうという……暴力革命の様相はいよいよ濃い。

孝明天皇が、長州藩をはじめとする勤王派を嫌悪なさるのも当然であったろう。

さて……。

古高の自白をもとにして新選組の密偵が八方に飛び、六月五日の夜に、三条小橋の旅宿〔池田屋〕と縄手の〔四国屋〕で、志士たちの暴動計画の会合がおこなわれることをつきとめた。

そして五日。

新選組は、局長・近藤勇以下三十余名の隊士が出動し、これを二手にわけ、池田屋と四国屋を襲撃したわけだが、

「四国屋のほうには志士どもがいなかったそうだ。池田屋には、三十人もいて、この中には、肥後の宮部鼎蔵とか、長州の吉田稔麿とか、公儀でも目をつけていた恐ろしい男もいてね。そこへ虎さん。近藤が、わずか八、九名の隊士をひきいて斬りこんだというのだ」

と、伊庭八郎が嘆息をもらし、

「以前から公儀では、百姓や浪人くずれをあつめた新選組に何が出来る、って、ね。見くびっていたものだが……どうしてどうして、これだけの勇気がある男たちは、こっちのさむらいにはいませんよ。やれ直参だ、旗本だと、反っくり返っている連中の中には、さむらいでいながら馬の手綱ひとつ、さばけねえのもいるのだからねえ」

そういったものだ。

ところで……。

後刻、四国屋へ向った二十余名が池田屋へ駈けつけて来るまでの間、近藤勇ら十名は、三十余名の志士・浪士たちを相手に奮戦した。

この斬り合いの最中に、会津藩がようやく兵をくり出したし、所司代も出動したので、志士たちのほとんどが、斬られるか捕えられるかして、全滅した。

池田屋事件で、新選組の名は洛中の大評判となり、江戸表でも、これまでは彼らを寄せあつめたまま、まるで、

〔まま子あつかい〕

にしていた幕府も、新選組を見直さざるを得なくなったそうだ。

「これはね、虎さん。徳川幕府というものが、いかに、ちからおとろえたかを、はっきりとしめすものだ。そうおもわないかね。新選組が池田屋へ斬り込んだときも、あらかじめ知らせをうけていながら、会津藩も所司代も、めんどうな手つづきやら談合やらを何度も重ねたあげく、ようやくに兵をくり出したのだ。これではもう、危急のときに間に合うものではないよ」

「いかにもねえ……」

「新選組の名は天下に揚がったが、そのかわりに、幕府の弱腰も相手に見られてしまった。長州はね、このまま、おさまりませんよ。きっと、また攻めかけて来る。どんな方法でか、それはわからないがね」

「八郎さん。薩摩藩は、いま、どうなのだ？」

「知らん顔さ」

「え……？」

「薩摩はねえ、旗色を見ているのさ。徳川についていても、表向きだけのことで、いつなんどき、何を仕出かすか、知れたものじゃあねえ」

と、伊庭八郎は、にがにがしげにいった。

二

そのころ……。

杉虎之助は、すでに本所の叔父の家を出ていたのである。

金五郎叔父の病気も、いくらかもち直してきたし、そうなると、どうにもお千代と共に暮すことが、

「あぶない……」

と、おもえてきた。

「どうも、居辛くてねえ」

虎之助が八郎に、おもわずこぼすと、

「なんだねえ、虎さん。お前さんの家は金杉にあるではないか」

「いや、それはちがう」

「何が、ちがう」

「あの家は、あんたに……」

「冗談ではない。いつでも、おもどりなさい」

「そうおもっていて下さるか」

「きまっていることさ」
「八郎さん」
「なんですね」
「金三十両、お返しする。そして、私を金杉の家へもどして下さるか？」
「あは、は、は……よいとも。それで、虎さんの気がすみなさるのなら、三十両を返してもらいましょうよ」
と、これできまった。
虎之助が、金杉の家へもどりたかったのには理由があった。ただ、叔父の家を出たいというだけなら、安楽寺の和尚も、
「いつでも、当寺へおいで」
と、いってくれているのだ。
虎之助は、いつか僧・英誉から、薩摩侍らしい二人づれが、旧居の庭へ潜入していたことをきいたときから、
（また、きっと様子を見に来るにちがいない）
と、感じていた。
（よし。のぞむところだ！）
なのである。
おそらく〔山本平三郎〕が、杉虎之助の偽名であったことを、京の薩摩屋敷では知ったものと見てよい。中村半次郎の口からそのことが語られたなら、礼子を襲った薩摩侍によって、すべてがあきらかになったにちがいない。

京都を去るにあたり、お秀を通じて中村半次郎へ、
「東郷直二を斬ったのは、私だ」
と、告げるつもりでいた虎之助である。
（こうなれば、池本先生と礼子のかたきを討つために、薩摩屋敷のものどもが何人かかって来ても、おれは平気だ。薩摩のやつどもめ、斬って斬って斬りまくってやる！）
その闘志が、しだいに虎之助の心身をみたしはじめてきた。
伊庭八郎へ、金三十両を返し、虎之助が金杉の家へもどったのは、夏のさかりであった。

三

京都に戦さが起ったのは、それから間もなくのことだ。〔池田屋事件〕で、勤王倒幕の志士中、第一級の人物とされていた人びとが斬られたり、捕えられたりした。
これは、あの〔安政の大獄〕以来の、幕府側が勤王派へふるった大がかりな武力の行使であった。
去年八月。
幕府が薩摩藩と手をむすび、京都の長州藩勢力を追いはらったクーデターの折も、センセーショナルな点において〔池田屋事件〕にはおよばない。
というよりも、そのときの勤王派の怒りが、今度の事件によって激発した、ともいえよう。
長州藩の久坂義助（玄瑞）は、桂小五郎とならんで、薩摩藩の西郷吉之助・大久保一蔵のような指導的立場にある人物だが、この久坂は、
「もう、がまんができぬ！」

というので、筑後・久留米の神官で熱烈な勤王思想を抱いている真木和泉と協力し、志士三百名ほどをあつめ、長州を発して大坂まで乗りこんで来た。

これは、長州藩をはなれ、単独で行動しようというものだ。

ところが、俄然、

「久坂につづけ！」

と、長州藩自体が起ちあがった。

このとき、長州の〔殿さま〕は毛利敬親という人だが、この殿さまのいうことなどきくものではない。

また長州の殿さまは、しごくおっとりとしていて、家来たちのいうままになっているようなところがある。

で……。

長州藩の家老、福原越後と国司信濃が三千ほどの兵をひきい、長州を発して急行し、京都とは目と鼻の先の伏見と嵯峨へ二手に兵を分け、陣形をととのえた。

やがて、殿さまの毛利侯も出馬することになった。

こうして、京都の南面一帯に兵力を展開させ、

「いざとなれば、京へ攻めこむぞ！」

という姿勢を見せておいて、長州藩は、朝廷に訴状をさし出した。

これは、去年の八月。薩摩・会津の両藩が朝廷と幕府の威光を笠に着て、

「一夜のうちに、われらを京都より追放なされた……」

そのことに対する怒りと恨みが、激烈に書きつらねてあるものだ。

とても、訴えるというようなものではない。

天皇と朝廷の、

「反省をうながす」

という姿勢なのである。

「さ、それがねえ、虎さん」

のちになって、伊庭八郎がいうには、

「そのとき、幕府のほうでは、いうまでもなく大坂に城もある。城代もいる、町奉行もいて、兵隊もおいてある。それでいて、長州のやつらが通りぬけるのを、ゆびをくわえて見ていたという……紀州藩では前々から、兵を出して、淀川一帯を警備していたし、伏見にも枚方にも、こちら側の兵が出ている。そいつら、手も足も出ねえのさ。

いや、それはね。長州軍がやって来ると、いちおうは、『どちらへまいられる』とかなんとかいうのだがね。長州の凄いのが鎧兜に身をかため、馬上凛々として『藩命によって関東へまいる！』と怒鳴る。怒鳴られてこっちは、もうまっ青となり、もぞもぞしながら長州軍を通してしまったという……これではもう、いけませんよ、虎さん。なさけなくて涙も出ねえ」

こぼしぬいた。

さて……。

長州軍が京都へせまるときいて、中川宮が、将軍・後見職として京都にいる一橋慶喜へ、

「薩摩と会津から兵を出し、すぐさま長州兵を打ちはらっていただきたい」

という。

一橋慶喜は、水戸の徳川斉昭の子で、かつて将軍・家茂と十四代将軍位をあらそった人物であ

る。

会津は出兵する決意をしめしたが、薩摩は、西郷吉之助が、

「藩士の外出を禁ずる」

という命令を出したまま、しずまり返って反応を見せない。

中川宮も、じりじりしてきた。

中川宮は、伏見宮邦家親王の第四子に生まれ、宮門跡の一つである京都の青蓮院へ入られたが、幕末動乱にさいし、孝明天皇の深い信頼をうけ、いわゆる〈公武合体派〉の皇族として、政治家として起ちあがった。

勤王派の連中は、中川宮を、

「魔王の宮」

と、よんだそうである。

それほどに勤王派は、中川宮の権謀をおそれていたことになる。

中川宮が薩摩藩とひそかに密約をかわし、孝明天皇をしりぞけて皇位につくべく、暗躍をしているとの風評もある

のちに、大正年間における現天皇と現皇后の婚約の折、すでに亡くなられていた中川宮問題が、ふたたび大きく浮かびあがった。

現皇后は当時の久邇宮良子姫であって、中川宮の孫女にあたられる。

「維新の折、あれほどの陰謀をたくらまれた中川宮の孫女を、つぎの天皇の后にすえるなどとは、まことにけしからん」

と、長州閥の巨頭・山県有朋らが猛反対をした。

これに対し、薩摩閥の政治家や貴族は、良子姫を擁して長州閥と対立し、ついに長州側の、

「良子姫は色盲の系統である」

との主張をしりぞけ、現天皇との婚儀を成立させてしまった。

杉虎之助は、こういっている。

「ま、とにかく、維新のさわぎのときは、何がどこまで本当のことだったのか、わかるものではございませんよ。その真実の姿を突きとめようとすればするほど、混乱してしまいます。さようで。人間のこころというものの表と裏。こればかりは、とてもとても計りきれるものではございません。ましてや、その人間がたくさんにあつまり、たくさんの表と裏がからみ合っていたわけですから、その恐ろしさというものは、私のような凡人には、とてもわかるものではないのですよ」

四

長州軍が京都へ迫ったとき、かねてから、長州に好意を抱いていた三十名ほどの公卿たちが、

「このさい、天皇にねがい出て、毛利父子（長州藩主）のみは入京をゆるし、天皇の御勘気をといてやってはどうか」

と、さわぎはじめた。

幕府側の、もっとも強力な大名として藩兵を京都に置いている薩摩・会津の両藩のうち、薩摩藩が沈黙しているものだから、長州びいきの公卿たちは、しだいに強気になった。

宮中では、連日の会議である。

恐るべき長州軍が目と鼻の先へ来て、陣をかまえたというのに、朝廷も幕府も、すぐさま決断が下せないのだ。

　将軍後見職の一橋慶喜が、たまりかね、朝議の席上において、

「これは、考えるべき何ものもないことではありませぬか！」

と、熱弁をふるった。

「口に嘆願をいたしながら、長州藩は、砲、銃、刀槍をつらね、天皇おわすこの都へ押しつめてまいったのでござる。かくのごとき長州をゆるし、都へ入れようなどとは、まことにけしからぬ。そのようなことをなされば、天皇の威風は地に落ち、天下の物笑いとなりましょう。もしも、長州がゆるしを乞うというのなれば、藩主・毛利大膳大夫父子が身一つになってあらわれるべきでありましょう」

　正論である。

　慶喜はさらに、朝廷が長州を容れ、幕府代表の自分の意見をきいてくれぬならば、

「われらは、会津藩と共に職を辞し、関東へ引きあげます。あとは勝手しだいになさるがよろしい」

と、いいはなった。

　この席に、薩摩藩の代表として、西郷吉之助がいる。

　薩摩藩の意見をもとめられたとき、西郷は意を決し、

「長州が兵をとき、恭順のかたちをしめさぬときは、朝廷より諸藩へ、長州追討の勅命を下しおかるべきかと存じます」

と、こたえた。

こたえざるを得ない。

一橋慶喜の主張は、

「莫迦か狂人でないかぎり……」

当然のことであったからである。

　しかし、西郷は、

（たとえ、今度は京都から追いのけられても、長州の底力のすさまじさは決しておとろえない。われわれが新時代の中心勢力となるためには、いずれ、長州と手をむすばねばなるまい）

と、見通しを早くもたてていたようだ。

ために、西郷は、

「我藩は、天皇と皇居を守護したてまつる」

といい、戦場へ出ての、長州藩との戦闘を避けてしまった。

幕府側の兵力は……。

大垣、彦根、会津（新選組をふくむ）、桑名、小倉、丸岡、薩摩、福井などの諸藩である。

長州追討の勅命が下ったのは七月十七日であったが、十九日の夜明けと共に、突如、嵯峨に陣をかまえていた長州軍が疾風のように京都市内へ押し入って来た。

嵯峨から、京都の皇居までは約三里ほどだが、

「あっ……」

という間に、長州軍は皇居の西側へ肉薄して来た。

すなわち〔禁門の変〕の火ぶたが切って落されたのである。

こうなると、御所を守護していた薩摩藩は、いやでも長州兵と戦わねばならぬ。

戦闘は、午前四時すぎから、八時ごろまでで終った。

短い戦闘であったが、皇居の内外に双方の藩兵が芋を洗うような烈しい混戦を息つぐ間もなくつづけぬいた。

双方の砲撃もおこなわれたし、皇居周辺の公家屋敷が黒煙と炎をふきあげ、市街の町家の焼失家屋は二万八千戸におよび、公家屋敷十八、武家屋敷四十四、神社仏閣が百七十余。橋四十、芝居小屋三、土蔵二百十六が焼失したというから、京都の大半が、戦火によって焼け落ちたとおもってよい。

乱闘の中で、薩摩部隊を指揮していた西郷吉之助が、脚に小銃弾をうけて落馬したのは、このときであった。

「西郷だ。討て!!」

と、これを見た長州兵が喚声をあげて殺到したとき、

「横合いから、半どのが駈けつけたそうでございますよ」

と、お秀がのちに、杉虎之助へ、

「槍ぶすまをつくって西郷先生へ飛びかかる長州兵を、半どのは、たちまちのうちに、七名も斬って倒したそうな……ふ、ふふ。そのとき、西郷先生は、のこのこ起きあがって、おいどんな、馬は苦手じゃや。なれど、こうしてもおられぬ。だれか、早う馬ひいて来なはれ……と、こう申されたそうで」

と、語ったことがある。

激戦の後に、長州軍は敗走した。

せっかくの奇襲も、兵力がちがいすぎて成功しなかったわけである。

長州軍の指揮官で久坂義助・真木和泉守・来島又兵衛・入江九市など、勤王派にとってかけがえのない人材が、みんな戦死し、自決をとげた。

「なんとまあ、馬鹿な事、したものごわしょ」

と、西郷吉之助が焼けただれた京の町を見て、苦にがしげにつぶやいたという。

西郷は、のちに虎之助へ、こう語っている。

「官軍が江戸へ攻めのぼったとき、徳川の代表として勝さん（勝海舟）が、おいどんと会うて、戦さだけは避けようといわれたとき、おいどんな、あの元治元年の京の戦さを、すぐに思い出したものでごわす。そして、こりゃなんとしても、戦さな避けねばならぬとおめもしたよ」

五

この戦争さわぎで、幕府側も昂奮したものか、市中・六角の牢獄へ押しこめてあった勤王志士三十余名を引出し、首を斬ってしまった。

このあたりへも戦火が燃え移ってきたので、

「いつ、長州兵がうばい返しに来るやも知れぬ」

と考えた町奉行が、おもいきって断首してしまったのだ。

のちに町奉行・滝川讃岐守は、守護職の会津侯（松平容保）から、

「裁決なき者を、何故に断首いたした!!」

ひどく、叱りつけられたという。

杉虎之助は、つぎのように語りのこしている。

「あのころはもう、むちゃくちゃでございましてね。当時の勤王方なども、心底から日本の行末を憂い、国を救おうという鉄壁のごとき決心をもって事にあたろうという人は、ごく少なかったので……。

あのときのように、時勢が大きくゆれうごき、移り変ってゆこうというときには、はじめのうち、人が人の影響をうけてうごき出すのですね。斬られたから怒って斬り返す。しゃにむに幕府が憎い、勤王が憎いというやつで……こうなると、腰の大小の刀をもてあました浪人なぞも、いまこそ一旗あげるときだというので、みんな、勤王浪人になってしまう。ほんとうに国を支えてはたらいているお百姓や町民のことなど、もう念頭にはないのでしてね。

斬ったり斬られたりして、血みどろになって……それこそ、人間という生きものの中にかくされている獣のようなちからに火がついたようなものです。ま、そうしたものの、ちからずくの闘いからはじまってゆく。殺し合い、騙し合って、何とか、わが勢力を押しひろげようという……そのうちにね、何かこう、行手に見えてくるのでございますね。

つまりその、外国の強いちからに押えつけられている自分の国と、その国の中で殺し合い、傷つけ合っているのが自分たちの姿だ、ということが、だんだんに見えてくる。

そのときが来るまでは、たとえ眼で見ていても、こころには見えないのですよ。

この時期が来るまで生き残っていた人が、新しい時代の偉い人になってしまう。ま、そうしたものなのでございますねえ」

幕府も、

「この機会に、どうあっても長州藩を叩きつぶしてしまわぬと、のちのち、どのようなことになるか知れたものではない」

と、長州征討の勅令を仰ぎ、征討軍を編成することになった。

諸藩が兵を出して、尾張名古屋の大守・徳川慶勝が、

〔征討軍総督〕

に任命された。

ところが、将軍の親類であり、御三家の一である尾州侯、どうも気がのらないらしく、ぐずぐずしている。

諸藩の足なみも、なかなかにそろわぬのだ。

薩摩藩の西郷吉之助は、征討軍の〔総参謀〕に任命されたけれども、

「長州をあやまらせればよいのでごわしょう。戦さはむだでごわす」

などといっている。

そして西郷は、幕府の意向なぞには少しもかまわず、単独で、長州側と談判をはじめる始末だ。

いっぽう、京都の戦争で敗北し、またも故国へ逃げもどった長州藩は、英・米・仏、それにオランダの連合艦隊の砲撃をうけた。

外国側にしてみれば、

「日本が国をひらき、われわれと交際をしようとするのを、狂人のごとく邪魔する大名がいる。それは、長州の毛利である。徳川幕府が、ぐずぐずしているのなら、われわれで長州を討とうではないか！」

というわけだ。

外国艦隊の猛砲撃によって、下関の長州砲台はすべて破壊された。

外国の陸戦隊が上陸し、大砲六十五門をうばい取った。

長州藩は、もう踏んだり蹴ったりということで、幕府も一時はよろこんだが、とんでもない。

イギリスが代表となって、

「われわれが幕府の代りに長州砲台を攻略したのである。これまでにも、長州は、われわれ外国人を殺傷したり、公使館へ火を放ったりして、そのつぐないもしていない。幕府はこのさい、すみやかに下関港を外国へ開放し、償金三百万ドルを支払ってもらいたい」

と、幕府へねじこんで来た。

そんな、莫大な金が、いまの幕府にあるわけがない。

幕府は、

「長州のやつどもめ、勝手放題にあばれまわり、いつも、こちらへ尻ぬぐいをさせる。こうなっては、一時も早く、長州へ攻めこみ、幕府武力をもって、彼らを根こそぎ討滅してしまわねばならぬ!!」

いきり立ち、ようやくに編成した征討軍を広島まで進軍せしめた。

このとき、ついに薩摩藩が乗り出した。

仲介に立とうというのである。

というよりも、長州藩へ向けて、

「藩主父子が朝廷と幕府へ謝罪し、藩中の上から下まで、すべて恭順をし、禁門戦争へ参加した三家老と参謀を処刑するなら、わが薩摩藩が中へ入り、幕府を説きふせ、長州進軍を中止させようではないか」

こういってよこした。

長州も、薩摩などに口をきかれてたまるか……と怒ったけれども、もはや、この条件をのむ以

外に生きる道はない。そこまで追いつめられてしまっている。仕方がない。

「たのむ」

と、いうことになった。

「よろしい」

薩摩藩は、西郷吉之助を広島の征討軍・本営へ送った。

西郷に説得されると、征討総督の徳川慶勝は一も二もなく、これを承知してしまう。

そもそも、この征討総督、戦争のやり方も知らないのである。

男をあげたのは、薩摩藩であった。

幕府へも長州へも、

「うまく恩を売りやぁがった」

と、伊庭八郎が苦笑をして、

「幕府へ薩摩っぽの半分の知恵でもあればいいのだがねえ」

しみじみと、虎之助へこぼしたものだ。

「知恵者がいないことも、ないとおもうがねえ、八郎さん」

「そりゃあいる。いるけれども、一人二人あたまを出すと、年寄りどもが寄ってたかってたたきつぶしてしまう。いやはや、老中だの若年寄だのと、ともかく、いろいろとこみ入っていて面倒な仕組になっているものだから、政事のすじが一本に通らぬのさ。なにごとにも慣例だ、体裁だといって、尻についた火をもみ消すどころか、火がひろがって行くのを見物しながら手も出さずに、火の消し方はこうでなくてはならぬ、いやこうしたほうがよい、などと論判をしているというのでは……こいつもう、どうにもならねえよ、虎さん」

伊庭八郎は、もう、あきらめきったかのような口ぶりであった。

八郎の吉原通いがはじまったのは、このころからである。

「どうだね、虎さん。たまには一緒においでなさいよ」

「いい女がいますかえ？」

「虎さんは、岡場所のほうが好きらしいが……」

「以前は、ね」

「やはり、礼子どののことが忘れられないか？」

このごろの虎之助は、御徒町の伊庭道場へ毎日のように通って、稽古にはげんでいた。

「こいつはいい」

よろこんだのは八郎である。門人たちの前で、八郎はこんなことをいった。

「みんな、よくきいておけ。弟は躰が弱いことだし、この伊庭道場も、おれかぎりでおしまいだ、と、こうおもっていたところ、ここに杉虎之助先生があらわれた。

おれなぞよりも、ずっと名人でおいでだ。おれも父上も、おそらくは近いうちに、あの世へ行くことになる。そのあとで杉先生がこの道場を引きうけて、おぬしたちを教えて下さるよう、一同から、くれぐれもおねがい申しておくがいい」

八郎は、いずれ将軍直属の家来たちが、敵と戦うことになる、と思いこんでいるらしい。

「八郎さん。しかし、徳川と薩摩が手をむすんで、これから何とか、かたちがついて行きそうにおもえるが……」

「冗談をいいなさるな。薩摩はねえ、虎さん。いま、爪を研（と）いでいるのさ。研ぎあがったときは、まっしぐらにこっちへ飛びかかって来る」

きっぱりといって、

「そのときは、道場をたのみますよ」

「いや八郎さん。叔父の病気も大分によくなったし、私も、近いうちに京へのぼろうと考えているのだ」

「池本先生の敵（かたき）を討ちにかね？」

「その通りだ」

「ふうむ……」

伊庭八郎が、急に押しだまって、考えにふけりはじめた。

洛中見廻組

一

そのとき、伊庭八郎が虎之助に、
「京へのぼるのなら、見廻組の佐々木只三郎をたずねてごらんなさい」
と、いった。
〔見廻組〕とは……。
幕府が、京都に蠢動する志士・浪士たちを、さらにきびしく取締るためにもうけた一隊であった。
先に、幕府は浪士隊を組織させて京都へ送りこみ、これが、のちに〔新選組〕となって会津侯・御預りの名目のもとに、すばらしい成績をあげている。
だが、まだ足りない。
〔新選組〕のような機動性をあたえた一隊を、幕府直属のものとして派遣すれば、もっと効果があがるにちがいない。
そこで幕府は、旗本・御家人の次三男のうち、武術のすぐれたものを抜擢し、一隊を組織する

ことにした。
この見廻組へ編入されたものは、大半が〔講武所〕で武術の鍛錬にはげんでいたもので、腕利きぞろいである。
隊員は四百人ともいい、五百人ともいう。
組頭には、備中・浅尾藩主の蒔田広孝と、幕臣・松平康正が任命された。
かつて〔まま子〕あつかいにされた新選組とは、くらべものにならぬ大がかりなものである。
佐々木只三郎は、見廻組の幹部の一人であった。
佐々木は、会津藩士・佐々木源八の三男に生まれたが、のちに、佐々木家の遠縁にあたる佐々木矢太夫という旗本の養子になった。
ときに佐々木は三十歳で、虎之助や八郎よりも年長であったが、江戸にいたころには、
「伊庭先生、伊庭先生」
といって、八郎をたてること、なみなみでなかったそうな。
「虎さんのことは、佐々木さんに、かねてからよくはなしてあるのだ。いや、虎さん。なにも見廻組へ入ってくれというのではないよ。見廻組の連中と親しくしておいたほうが、池本先生を斬った奴をさがすに便利ではないか、どうです？」
「なるほど……」
たしかにそうだ。
京都へ出て、自分ひとりが、どのようにうごいてみても、
（たかが知れている……）
ことは、すでに虎之助が身にしみてさとっていることではないか。

佐々木只三郎の剣名は、虎之助も、かねてききおよんでいた。

〔新選組〕の前身であった浪士隊が京都へのぼったとき、これを引率して行った出羽・庄内の郷士・清川八郎を江戸の赤羽橋で暗殺したのが、佐々木只三郎である。

清川八郎は、幕府をたきつけて浪士隊を組織させ、これを京都へ送りこんでのちに、自分の勤王運動へ引きこんで活動させようとしたほどの策士だ。あの〔寺田屋騒動〕の折も、蔭で糸を引いていたのが、この清川であった。

「清川を捨てておいてはいかぬ」

というので、幕府側が清川暗殺にふみきった。佐々木がこの役目をうけたまわったのは、一にも二にも佐々木只三郎の剣技が高く評価されていて

「佐々木ならば討ちもらすまい」

と、見きわめをつけられていたからだ。

山口金五郎の病状は、秋口になってから、好転してきた。

三日に一度は、虎之助も本所の叔父を見舞うが、そのたびに、

「虎之助。お前もう、二度と江戸をはなれてくれるな。おらあ、お前がいねえと、さびしくて、さびしくて……」

金五郎叔父が、泪ぐんで、くどくどという。

そこで虎之助は、叔父夫婦にだまって、江戸を発つことにした。

江戸を発つ前の晩に、虎之助は、伊庭道場の小出又三郎を金杉の家へよんで、酒を出し、

「又さん。たのむよ」

と、いった。

「なにをです？」

「お前さんのお宅は、おれの叔父と同じ本所だ。ときどき、見舞ってやって下さいよ」

「杉先生、どこかへお出向きに？」

「京へね」

「それは、それは……」

「叔父には、だまって行く。それでね、この手紙を、おれが江戸を発ったのちに、叔父へとどけてくれないか」

「は……よろしゅうございます」

「いつか、八郎さんの使いで、叔父のところにいたおれをたずねて来てくれたが縁となったかして……又さん、お前、このごろ、よく叔父の家へ行ってくれるそうだね」

「いや、どうも……」

「そんなに、おれが従妹のお千代を気に入ってくれたか」

すると小出は、まっ赤になってあたまをかきかき、

「へ、へへ……」

と、笑う。

「よしよし。又さん、剣術なぞはどうでもいい。お千代を早くものにしてしまってくれ」

「はっ……」

「お千代と夫婦になって、丈夫な子を産ませてくれ」

「よ、よろしゅうございます」

「うけ合ってくれるか」

「うけ合います、杉先生」
「かまわねえから、こんな、さわがしい世の中なぞ、お前さんのほうから捨ててしまえ。お千代と夫婦になって、子を産ませる。これだけでお前さんは、立派に国のお役に立っているのだと、そうおもいなさい」
「はっ。かしこまりました」
「どんな世の中になろうとも、人間のいとなみは絶えてならぬものだからねえ。こいつが絶えると国がほろびる」
「まったく、もって……はい、はい」

二

杉虎之助が、ひそかに江戸を発ったのは、この年の十一月二十日であった。
ちょうど、そのころが……。
薩摩藩が、幕府と長州との間を斡旋している最中であり、いっぽう、水戸の〔天狗党〕は筑波山から追いはらわれ、信州へ逃げのび、和田峠で、諏訪・松本の藩兵と闘っている。
のちに、天狗党は加賀・金沢藩に降伏し、指導者の武田耕雲斎・藤田小四郎らは斬罪に処せられた。
勤王運動の先駆者であった〔水戸藩〕は、その内乱のために、多くの人材をうしない、新時代の潮流へ完全に乗りそこねてしまうことになる。
さて……。

またも京都へもどった杉虎之助は、例によって三条白川の旅籠〔津国屋〕へ旅装を解き、その翌日。二条城の西側にもうけられている見廻組の組屋敷へ、佐々木只三郎をたずねた。
「これは、よくこそ」
と、佐々木は愛想よく迎えてくれ、
「杉先生のことは、かねがね、御徒町（伊庭八郎をさす）からうかがっておりました」
いたって腰が低い。
痩身だが、いかにも剣士らしい体軀で、その筋肉は極限にまで引きしめられ、打ち固められている感じがする。
金五郎叔父が、
「痩せて、しんなりとしていて、とても剣術つかいには見えねえね」
といった伊庭八郎の体格とは、似ているようでいてちがう。痩せてはいてもたくましく、強靱な筋骨が衣服の上から見ても、はっきりと看取される佐々木只三郎であった。
実父は、会津藩士であるけれども、江戸詰めだし、したがって佐々木は〔江戸育ち〕であったから、八郎や虎之助ともぴたりと呼吸が合ったものであろう。
伊庭八郎からの手紙を読み終えた佐々木は、
「よくわかりました。できるかぎりのことはいたしましょう」
たのもしく、うけ合ってくれた。
見廻組は、守護職・所司代・町奉行所とは別に、浪士や志士の探索をおこなってい、成果もあがっているようだ。
「もっともゆだんがならぬのは、長州よりも薩摩ですよ、杉先生」

「なるほど……」
　いまにしておもえば、道具屋に化けていた古高俊太郎と中村半次郎が密会していたことも、うなずけるのである。
　しかし、そのことは佐々木にうちあけなかった。半次郎にめいわくをかけたくなかったのである。
「佐々木さん。あの古高俊太郎は、どうなりました？」
「禁門の戦さのときに、六角の牢にいたのですがね。ほかの志士や浪士たちといっしょに、引き出されて首をはねられました。ですが、あれはこっちもまずかった。薩摩なども、ずいぶんひどいことをするではないか、とね。こっちへねじこんできまして、会津侯も困っておられました」
「佐々木さん。これから、いったいどうなるのでしょうかね？」
「どうなるもこうなるも……どうにかしなくてはなりません。幕府(こうぎ)だって以前の幕府ではない。ともかく天皇第一ということで、ずいぶんとゆずってきているのですから……」
「いかにも……」
「いまは、なんとしても長州を討ってしまわなくてはなりません。もう、長州のやつどもは気狂い犬ですよ。切られても切られても尻尾が生えてくる蝮(まむし)のように物凄くて、しぶとい」
　佐々木は、あくまでも長州討伐をいいたてているが、長州は薩摩藩の仲介(ちゅうかい)で条件をのみ、三家老を切腹させ、恭順(きょうじゅん)の意をあらわしたので、やがて幕府もしぶしぶ、長州への進軍を中止することになってしまうことになる。
　どこの大名も、もう幕府のいうことなどきかなくなってきている。
「このさい、戦争などをして損をしたら大変なことになる。時勢の変化に取り残されないことが

第一だ」
　きょろきょろと、あたりを見まわしているだけのことなのだ。

三

　今度は虎之助も、京都へじっくりと腰を落ちつけるつもりになった。
　そうなると、三条白川の津国屋にいるのは、
（まずい）
と、おもった。
　津国屋に虎之助が滞在していたことを、中村半次郎は知っている。半次郎の口から虎之助のことが薩摩屋敷へ洩れているとすれば、
（津国屋にいることは、あぶないし……いざというときに迷惑がかからぬでもない）
のである。
　そこで虎之助は、津国屋長太郎へ相談をもちかけてみると、
「そのようなことを、お案じなさらずともよろしゅうございます」
「いや、御亭主。私としても、ここにいてはおもいきったことができにくいのだ」
「さようで……」
　長太郎が引きうけてくれ、数日後に、借家を見つけてきた。
　その借家というのが、なんと、公儀隠密のひとりで、池本茂兵衛とも関係のあった蒔絵師・原孫七の住んでいた油小路二条の家であった。

その家のすじ向いの表具師〔茶屋宗助〕方の二階へ、虎之助は間借りをし、原孫七のうごきを見張ってい、孫七が暗殺されたのを見とどけてもいた。

このあたりの一角は、禁門の戦火にも焼け残っていたのである。

あれから、足かけ三年の歳月がすぎ去っていたのだ。

「それはよい。そこにきめてもらおう」

「大丈夫でござりましょうか？　そりゃもう、茶屋宗助も近いによって、便利なことは便利でござりますが、前に、あのような物騒なことがあったところゆえ……」

「かまわない、きめて下さい」

津国屋は茶屋宗助方へ立ち寄り、くだんの家がまだ空家のままになっていることをきいたものらしい。

すぐに、虎之助は、故・原孫七の旧居へ引き移った。

三度の食事は、茶屋宗助方でととのえてくれることになった。

「そりゃ、けっこうです」

と、報告に来た杉虎之助へ、佐々木只三郎が、

「われわれの、この組屋敷からも間近いことだし、連絡もつけやすいことになりますから……」

よろこんでくれて、配下の本田辰次郎という若者を呼び、虎之助へ引き合せ、

「これからは、この本田が、見廻組と杉先生の連絡をいたします」

「いろいろと御厄介をかけますねえ」

「なんの……そのかわり杉先生。おひとりで、うごかれることだけはおやめ下さい」

「わかりました」

「もしも何かありましたときは、いちいち、私へお申しつけ下さい。見廻組も探索の網をひろげていることにおいては、新選組や所司代に劣っていないつもりですから……」

「はい、よくわかった」

「何か、お困りのことでもありましたら、御遠慮なく、お申しつけ下さい」

と、佐々木は、虎之助の生活費のことにまで気をくばってくれた。交誼のふかい伊庭八郎にたのまれたことだからとはいいながら、佐々木只三郎の虎之助へ対する態度は、まことに誠実で真情にあふれているといってよい。

虎之助にしても、大いに、こころ強かったものだ。

池本茂兵衛が遺しておいてくれた金は、まだ、たっぷりと残っていて、当分は暮しにも困らない。

京都へ落ちついてからの杉虎之助は、一度も、お秀の〔法秀尼〕をたずねていない。

だが……。

一度だけ、お秀を見ている。

それは、元治元年も暮れようという或日の夕暮れであった。

五条橋を東から西へわたろうとする虎之助は、橋の向うから、こちらへわたって来るお秀と中村半次郎を見つけたのである。

お秀は、前と変らぬ尼の姿で頭巾をかぶり、半次郎は総髪を茶筅にゆいあげ、黒紋付の羽織に袴をつけ、実にりゅうとしたものであった。

編笠をかぶった虎之助は、それと見てすばやく身を返し、五条橋・東詰の町家の露地へ身を隠した。

その虎之助の目の前、五間ほど向うに、橋をわたって来たお秀と半次郎があらわれ、何やら、たのしげに笑いながら通りすぎて行った。お秀の庵へ行くつもりなのであろう。

（よりをもどしたのか……）

橋のたもとへ出て、虎之助は苦笑をした。

その苦笑も、すぐに消えた。

礼子をうしなったさびしさを、あらためて感じぬわけにはゆかなかったのである。

血のような夕焼けの光りをあびて、杉虎之助は、いつまでもそこに立ちつくしていた。

四

杉虎之助は、その後の約三年間を京都から離れなかった。

そして、この三年の間に……。

徳川幕府は、まっしぐらに崩壊の渦の中へ落ちこんで行ったのである。

先ず、長州藩が息を吹き返した。

あれだけに手足をもがれてしまっても、今度は高杉晋作・伊藤俊輔（のちの博文）・井上聞多（馨）などの藩士たちが、その若々しい精力的な行動をもって、実力的な藩の中核となったのだ。

高杉は、自藩の武士のみか他国の脱藩者、さらに農民・町民までをあつめて〔奇兵隊〕と称する軍隊をつくりあげ、その武力をもって藩の保守派をしりぞけ、実権をつかみとってしまった。

「長州へ行け!!」

と、諸方の勤王志士・浪士たちも、ぞくぞくと長州へあつまり、気勢をあげる。

たまりかねた幕府が、ようやく長州へさしむけた征討軍は、この〔奇兵隊〕によって、さんざんに打ち破られてしまうことになる。

薩摩藩は、しきりに長州へ接近し、

「いっしょにやりましょう。幕府を打ち倒すためには、どうしても、われわれが手をむすばなくてはいけません」

と、もちかけたわけだが、薩長二藩の歩み寄りを仲介したのが、土佐の郷土出身の志士・坂本竜馬であった。

幕府は、薩摩藩へ対し、

「長州へ出兵せよ!!」

と命じたが、きくものではない。

薩摩藩にしても〔大殿さま〕の島津久光が、もう口をさしはさむ余地のないほど、西郷吉之助を中心にして家来たちの結束が固められている。

こうした封建大名の藩における新旧勢力の交替は、とりも直さず、幕府政権のおとろえをしめしていることにもなるのだ。

虎之助は、

「私が京都におりました三年の間に、物価は五倍から六倍にはね上りまして、近江の瀬田川へ、一日に五人も六人も入水する者があったそうです。諸国で、百姓たちが一揆を起しても、幕府には、これを取りしずめるちからさえなくなっていたのですねえ」

と、語っている。

将軍・家茂も、江戸にいるわけにもゆかず、またも上洛して来たが、慶応二年七月二十日に、

大坂城内で病死してしまった。

さらに、この年の十二月十五日には、孝明天皇が崩御された。

あれほどに、将軍・家茂を気に入られていた孝明天皇の崩御は、とりも直さず、朝廷と幕府、天皇と将軍とのつながりが断ち切られてしまったことになる。

孝明天皇の〔毒殺説〕が、すぐにひろまった。

「そのころは、祇園町の芸奴の間にさえ、この天皇毒殺のうわさがひそひそとささやきかわされたという……いやもう、なんともいえぬ恐ろしい世の中でございましたな。毒殺説が、ほんとうか、と、おっしゃるのですか……。

は、はは……。だれがあなた、それをつきとめることができましたろう。ま、孝明天皇さまは、真から幕府びいきの長州ぎらいでございましたから、この天皇おわすかぎり、幕府を倒す時機が長引くばかりだというので、毒をもったという……うそか本当か。それを私がいう資格はない。つまり、それほどに、すさまじい世の中だったと申しあげたいのですよ」

と、虎之助がいっている。

虎之助も、必死に、池本茂兵衛を殺した男をさがしまわっていた。

見廻組も、佐々木只三郎の命令で、探索をつづけてくれたが、なかなかにわからぬ。

長州その他の諸藩のうごきは、割合にさぐりとることができるのだが、薩摩藩の隠密行動は、実に完璧なもので、月日がたてばたつほど、茂兵衛殺害の件など忘れられてしまう。そのようなことに、かまっていられぬほどの動乱、騒動の続出であった。

杉虎之助は、佐々木只三郎との親交が深くなるにつれ、またひとつには、自分のために見廻組がちからを借してくれていることもあって、自然、見廻組に接近するようになった。

当時をかえりみて、虎之助は微妙な笑いをうかべつつ、のちに、こう語っている。

「……ふ、ふふ。それはあなた、私の実父も幕臣。恩師も公儀御役目にはたらいていたのですから、間ちがっても勤王方にはなりませぬよ。

はい、はい……見廻組の、つまり客分というかたちで、勤王方の志士や浪士を相手に、刀をぬいたことも、ないとは申しません。

え……？　そのことを、くわしく話せとおっしゃる……それはもう、いまとなっては何を語ったとてかまいませんが、まだまだ、私が口を開くと迷惑のかかる方々も生き残っていらっしゃいますのでねえ。ま、これはひとつ、ごかんべん下さいまし」

五

そのころの杉虎之助について、大正十年まで生き残っていた見廻組の本田辰次郎が語りのこしていることがある。

それは、将軍・家茂が亡くなり、後見職に在った一橋慶喜が、十五代将軍、徳川慶喜となってから間もなくの慶応二年十二月十一日のことだが……。

佐々木只三郎からの伝言をもって本田辰次郎が、油小路の虎之助宅をおとずれ、しばらく雑談をかわしているうち、とっぷりと日が暮れた。

「本田さん、木屋町へでも行って、今夜はゆっくりと飲みましょう」

と、虎之助がいうので、

「けっこうですな」

本田はよろこび、先へ立って、家を出る虎之助のうしろから、外へ足をふみ出した、その瞬間であった。

闇の中から、突風のように三人の刺客が走り出て、虎之助と本田へ襲いかかった。

だが、本田辰次郎が引きぬいた刀をつかうまでもなかった。

本田をかばって立った杉虎之助が、声も発せず、

「いかにも無造作に……」

抜いた刀を打ちおろすと、

「うわ……」

「ぎゃあっ……」

飛びかかって来た三人のうちの二人が、ばたばたと斬り斃されてしまった。

最後の一人が、

「おのれ!!」

猛然として切りこんで来るのを、虎之助が、ほとんど躰をうごかさずに、むしろ緩慢な動作で刀を打ちおろすと、この刀の下へ、敵は吸いこまれるがごとくに躰を突込み、

「そりゃもう、呆気もないほどに、斬られてしまいました」

と、のちに本田が佐々木に語るや、佐々木只三郎は、

「ふうむ……大したものだ」

満面に血をのぼらせ、

「さすがだ。さすがに、杉先生だ」

めずらしく昂奮の体で、

「おれは、今夜、ねむれそうもないぞ」

と、いったそうな。

そのころの京都には、伊庭八郎もいた。

前の年に、将軍・家茂が上洛したとき、八郎も奥詰の一員としてこれにしたがい、京都へのぼって来たのである。

虎之助は、京都へ来た八郎と久しぶりに会ったとき、

(……?)

八郎が、げっそりとやつれてしまっているのにおどろき、しばらくは声もなかったほどだ。

八郎の顔色は、白蠟のごとく艶をうしない、

「こっちへ来る少し前に、また、血を吐いてねえ、虎さん」

と、いう。

「八郎さん。大事にしなくては……」

「わかっていますよ」

「医者には……例によって、診せてはいないようだな」

「いい薬をのんでいる。烏丸・三条上ルところに、松山青竜軒という薬種屋があってね、そこに蘇命湯と称する薬がある。煎じてのむのだが、こいつ、私の躰によく効いてねえ」

などと、八郎の声にはちからがあった。

八郎はまるで他人の病気のような口ぶりでいうのだ。

これは、気分がそうさせるものであろう。

八郎は上洛すると、間もなく、将軍・家茂が大坂城へ移ったので、これに従い、大坂・谷町の

宿舎〔大仙寺〕へ入ってしまった。家茂が亡くなり、一橋慶喜が新将軍となってからは、虎之助も八郎と会っていなかった。

年が暮れ、年が明けた。

慶応三年である。

その正月十八日の朝……。

虎之助が、表具師の家で朝飯をすませ、家へもどって来ると、門口に伊庭八郎が立っていた。

馬の手綱をとった八郎は陣笠をかぶり、ぶっさき羽織に馬乗袴といういでたちで、

「そうした姿の伊庭さんというものは、若いし男前だし、そりゃもう、ちかごろのことばでいう颯爽たるものでしてね。私なども、よくおもいおもいしたものですよ……ああ、徳川の人びとが、みんなこの人のようだったら、長州や薩摩なぞにばかにされまいにと、ね」

虎之助が、そういうのも、もっともである。

虎之助の家へ落ちついてから、伊庭八郎が、こんなことをいったものだ。

「先ごろ、江戸から来たさる人にきいたのだが、日本橋の高札場に、こんな落首をはりつけたやつがいるそうな。その落首というのはね……行末を、おもいやらるる細袴、泪をはらう袖だにもなし……と、こういうのさ」

〔細袴〕というのは、幕府が新しく定めた陸軍制服の〔ズボン〕のことである。

「袖だにもなし」というのは、制服の筒袖上着のことをさしている。

つまり、金のかかる格式や体裁を排して、万事に簡略をむねとするのはよいけれども、いまや手おくれで行末の見こみはない……と、幕府をあざけった落首なのである。

江戸の市民たちすら、このような眼で幕府を見ているのだから、諸大名が、

（もはや、徳川には見こみがない）

と、考えるのも当然であろう。

六

「薩摩なぞはね、虎さん。いまは大っぴらで長州へ金を借したり、鉄砲を売ったりしている。いくらでも手を借すから幕府に負けてはいけない。もし負けても、そちらの悪いようには決してはからわぬから、安心して戦いなさい、と、こういうことなのだ。大坂城には将軍もいなさるし、一応、長州征討軍の本営ということになっているが……これこそ天下の笑いものだよ」

と、八郎はいった。

八郎は前日、京都・二条城の定番組頭・鈴木重兵衛へ、義父・軍平の手紙をとどけに来て、一夜を鈴木方へ泊し、大坂へもどる途中、虎之助の家へ立ち寄ったのである。

その〔長州征討軍本営〕がある大坂城のまわりの土地で、百姓たちの暴動が起り、幕府は、大坂周辺の大名たちに、

「取りしずめよ」

と命令を下したのだが、激怒した農民を押えきれぬ始末なのだ。

米の値段が、うなぎ上りに上っているのに、このところ、日本諸国は、

「不作つづき」

なのである。

諸国の農民が、さわぎ出すのもむりはないのだけれども、

「こうなると何から何まで、悪いことはみな、幕府へ押しつけられてしまうのだから、たまったものではないよ」
八郎は、苦笑をうかべつつ、
「では、これで……」
「お帰んなさる？」
「義父が、鈴木さんの返書を待っているのでね」
「そりゃあ、どうも……久しぶりに、ゆっくりとのみたかったのだが……」
「そりゃあ虎さん。こっちでいうせりふだ」
「名残り惜しいな」
「あ、そうだ。こいつを見てもらおうか……」
ふっと思い出したように、伊庭八郎が手にした風呂敷包みを開け、中の品を虎之助に見せた。
その品というものは……麻布を二枚重ねにしてぬいあげた筒袖の肌襦袢のようなものへ、びっしりと古銭がぬいつけられてある。
「なんです、これは？」
これは、江戸・吉原の遊里で、一時は大へんに流行をした〔御守〕で、古銭の穴に三味線の糸を通し、これを肌へつけたという、その故事にならったもので、
「稲本の小稲が、京へ送ってよこしたのですよ。私が大坂へ引き移ったことを知らないのでね」
新吉原、稲本楼の小稲といえば、それと知られた遊女で、これが伊庭八郎の〔女〕であることは、虎之助もききおよんでいた。
その小稲が、丹精こめてぬいあげた〔守り襦袢〕だというのである。

「こりゃあ、どうも……御馳走さま」
虎之助が冷やかすと、
「いや、なあに……」
八郎が、めずらしく照れた。
二十五歳の若さが、そこににじみ出ている。八郎が、このような態を虎之助へ見せたのは、はじめてのことであった。
江戸人が、自分の〔女〕のことを他人へ語るというのは、めったにないことだ。よほどに気をゆるした相手のみにかぎられている。これは何も見栄や体裁があってのことではない。
他のことはさておき、おのが〔情事〕と、その相手について、やたらに口走ることを、江戸の男たちは、
「みっともないこと」
と、考えていたのであろう。
八郎は、小稲手づくりの〔守り襦袢〕を、虎之助へ見せびらかしたかったのではない。
遊女ながら小稲の〔こころづくし〕がうれしく、虎之助に会うと、これを語らずにはいられなくなってしまったものであろう。
虎之助も、すぐにそれと察し、まじめな顔つきとなって、
「男には、女が第一ですねえ、八郎さん」
「女がいなくては、世の中は闇ですよ、虎さん」
ふたたび立ちあがり、外へ出た伊庭八郎が、
「こいつを肌につけ、長州と戦って死にますかねえ。は、はは……」

と、馬へ乗って、
「なんだか、もう、これっきり虎さんの顔を見ることが、できねえような気がする」
こころ細いことを、むしろ威勢のよい口調でいったものである。

（三巻へつづく）

文春文庫

その男（おとこ）（二）

定価はカバーに表示してあります

1981年7月25日　第1刷
2010年1月25日　第41刷

著者　池波正太郎（いけなみしょうたろう）
発行者　村上和宏
発行所　株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町 3-23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
落丁、乱丁本は、お手数ですが小社製作部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本
Printed in Japan
ISBN978-4-16-714224-7